

2：皇帝が使用する教会建築

前章でみてきたように、これらの史料で皇帝が使用する教会として、名の挙がっている物は数多く、またその取り扱いも様々である。このうち皇帝の教会堂内での行動が、ある程度の具体性をもって再現できるものは以下のとおりである。

●市内の教会 [図1、2]

ハギア・ソフィア教会（大教会）³⁹¹⁾

コンスタンティノスのフォルムの聖コンスタンティノス礼拝堂³⁹²⁾

聖使徒教会³⁹³⁾

ボーマスの宮殿の聖コンスタンティノス教会³⁹⁴⁾

カルコプラティアの聖母教会³⁹⁵⁾

ブラケルナイの聖母教会³⁹⁶⁾

ペーゲーの聖母修道院³⁹⁷⁾

聖セルギオスと聖バツコス教会³⁹⁸⁾

聖モーキオス修道院³⁹⁹⁾

ナルソス地区の聖バンテレエモン教会⁴⁰⁰⁾

ストゥーディオス洗礼者修道院⁴⁰¹⁾

●宮殿内の教会

ファロスの聖母教会⁴⁰²⁾

ネア（新教会）⁴⁰³⁾

聖デメトリオス教会⁴⁰⁴⁾

聖ベテロス礼拝堂⁴⁰⁵⁾

聖バシレイオス教会⁴⁰⁶⁾

ダフネー宮殿内の聖ステファノス教会⁴⁰⁷⁾

以上にあげたそれぞれの教会について、その9世紀後半から10世紀前半にかけての建築形態、平面計画などを復元し、皇帝の行動と合わせて考察してみたい。

さて現在のイスタンブールに残っているビザンティン帝国の建築遺構は大変数が少ない。先ほど名を挙

げた教会堂について、その状況をまとめると以下のようになる。

●遺構が現存するもの

ハギア・ソフィア教会（大教会）⁴⁰⁸⁾

聖セルギオスと聖バックス教会⁴⁰⁹⁾

●遺構が部分的に残っているもの

ストゥーディオス洗礼者修道院⁴¹⁰⁾

カルコプラティアの聖母教会⁴¹¹⁾

また文献史料からどの程度建築形態が探れるか、ということに関してまとめると以下のようになる。

●文字史料から形態が分かるもの

聖使徒教会

ブラケルナイの聖母教会

ペーゲーの聖母修道院

ファロスの聖母教会

ネア（新教会）

大宮殿の聖デメトリオス教会

●まったく手掛かりの無いもの

ポーマスの宮殿の聖コンスタンティノス教会

聖モーキオス修道院

ナルソス地区の聖パンテレエモン教会

大宮殿内の聖ベテロス礼拝堂

大宮殿内の聖バシレイオス教会

ダフネ宮殿内の聖ステファノス教会

それではこれらのことを踏まえて、各教会堂の当時の状態について見ていくこととする。なおコンスタンティノポリスの教会堂で、西入東祭壇が厳密にまもられているものは、ほとんどない。本論文においては実際の正確な方位とは無関係に、便宜上、教会堂のアブスを東、入口を西として記述する。

2-1 ハギア・ソフィア⁴¹²⁾

『儀式について』では様々な箇所ではハギア・ソフィアが登場する。通常「大教会」の名で取り上げられているこの大聖堂は、同史料において最も登場回数が多い建築の一つである。ここでは本章で通常使用する教会堂ごとに分割しての記述ではなく、教会堂内の細分化された諸空間についてさらに細かく見ていくことにする。

建築遺構の沿革⁴¹³⁾

現存するハギア・ソフィアの遺構は、数多くの改修工事によって当初の姿が失われた部分も多いが、その多くをユスティニアノス1世に上っている。〔図3、4〕これは532年の、いわゆるニカの乱によって焼失した教会堂に変わるものとして建設された。工事は異例の速さで進められ、537年には献堂式がおこなわれた。建築形態も他に類をみないもので、三廊式のバシリカ式教会堂に準じる、二つの側廊にはさまれた身廊からなる平面形式ではあるが、中央に直径100ピュザンティン・フィート（約31m）のペンデンティヴ・ドームを戴き、このドームは東西は半ドーム、南北は巨大なティンバナムによって支持されている。ギャラリーはΠ字型に身廊の周囲を巡り、室内は二重のナルテックスによってアトリウムと連絡していた。

しかしこの最初のドームは557年の地震によって被害を受け、翌年倒壊した。このためドームの高さを増すなどの変更と共に再建され、562年に再献堂された。このときの建築形態が、現在のハギア・ソフィアの形態の基礎となっている。〔図5、6、7〕

その後、869年に再び地震によって損傷を受け、バシレイオス1世の命によって修理がおこなわれた。このときの工事によってティンバナムの形態が大きく変化した。

989年には地震によって大損傷を受け、大ドーム西側部分、西大アーチ、西半ドームが倒壊した。アルメニア人トゥルダトがバシレイオス2世の命を受けて工事を監督し、994年に大規模な修復工事が完了した。

ハギア・ソフィアもコンスタンティノポリスの他の教会と同様に、十字軍によって1204年に略奪を受け、内装を換えてラテン式の典礼がおこなわれるようになったが、1261年の再征服後ももとに戻された。

そして1317年には北側及び、西側の壁体に巨大なバットレスによる補強がおこなわれたが、再び1343年に地震によって大損傷を受け、それが原因となって1346年に大ドームの東側部分と東大アーチが倒壊した。皇帝ヨアンネス6世カンタクゼノスはモスクワ大公からの資金援助とイタリア人建築家の助けを借りて修理を命じ、工事は1353年に完了したが、十分満足のいく内容のものではなかったようであ

る。[図8]

オスマン朝が1453年にコンスタンティノポリスを占領すると、この教会はただちにモスクとして使用されるようになった。この後、かつての教会堂をモスクとして整備しようとする工事はたびたびおこなわれたが、その中でも最も重要なものは宮廷建築家シナンによる大規模な改修工事である。これは1573年に始まり、ミナレットの追加、総主教宮の取り壊し、構造体の補強などがおこなわれた。またこの際に教会堂の南側にはスルタン・セリム2世の霊廟が建設された。これ以降1608年までに、南側には計4棟の霊廟が建設され、またかつての洗礼堂も1618年に霊廟に改装された。[図9]

この後も、内装を中心にたびたび工事がおこなわれたが、地震の被害がきっかけとなって、1847年にフォッサティ兄弟による全面的な改修工事がおこなわれた。この工事は、ギャラリーの列柱の補強、ドームの構造体の補強、ピアの修復、内装の全面的な変更などを含んでいた。[図10、11]

その後、1935年にモスクから博物館に変更されて現在に至っている。

以上の概略から、『儀式について』などの史料に登場するハギア・ソフィアは、バシレイオス1世によるティンバナムの工事とバシレイオス2世によるドーム西側の改修工事の、間の時期のものであることがわかる。

儀式

概観

前章においてみてきたように、『儀式について』における各儀式の次第はいくつかの型に分類することが可能である。ここではハギア・ソフィアが舞台になる儀式について、まずその次第から分類を試みることにする。具体的には皇帝が大宮殿からハギア・ソフィアに行く際に通る経路によって、それぞれの次第は三つの場合に分類できる⁴¹⁴⁾。そしてこれらの分類は以下にみていくように、儀式の内容と関連がある。

1) ホーロロギオン脇からナルテックスに入る場合

この場合、皇帝は大宮殿から、カルケー、アウグスタイオンを経てハギア・ソフィアに至り、ホーロロギオン脇を通してナルテックスに到着する。この型の最大の特徴は、奉神礼において皇帝が全面的に儀式の進行に関与することである。つまり皇帝が小型入のみならず大聖入と平和の接吻にも参加し、さらに至聖所、あるいはそのそばで領聖を受ける点である。このため皇帝が儀式の最中に使用するのは、南側廊のメタトリーオンと呼ばれる空間である。

実際にこの型の儀礼がおこなわれたと考えられるのは、重要な年中行事、復活祭(第1巻第1章・第9

章)、生誕祭(同第1章・第23章)、神現祭(同第1章、第26章)、変容祭(同第1章)、聖霊降臨祭(同第1章)である。また皇帝の戴冠式(同第38章)のような特殊な儀式もこの型の変形とみることができる⁴¹⁵⁾。

2) マンナウラの通路からギャラリーに入る場合

皇帝が直接ハギア・ソフィアのギャラリーに行くのは、以下の場合である。十字架架米祭(第1巻第22章)、正統信仰の祭日(同第28章)、復活祭後の日曜日:古い次第(同第16章)、総主教の選出(第2巻第14章、同第38章)。この型の次第において重要な役割を演じるのは、ギャラリーのメタトリーオンである。皇帝は大宮殿からマンナウラの通路を経てギャラリーに入り、祈りを捧げ待機する。その後、下へおいて入場に参加する。

十字架架米祭では、アンボでの儀式の後に神聖な井戸を経て大宮殿に戻る。しかし正統信仰の祭の新しい次第では、皇帝は再びギャラリーに上りメタトリーオンから儀式に参加し、その後、総主教と会食して大宮殿に戻る。おそらくこの新しい正統信仰の祭日の次第が、しいていうなら、この型の一つの典型と考えられるだろう。

また第2巻第14章に説明のあるコンスタンティノポリス総主教の選挙も、同第38章にみることのできる933年2月2日の総主教テオフェラクトスの選挙の記録と合わせて考えると、この型の変形と位置付けられるだろう⁴¹⁶⁾。

この型に分類されるもので唯一皇帝の入場が明記されていないものは、第1巻第16章、復活祭後の日曜日に関する9世紀中頃の古い次第である。だがこれも「そして廊下を通して、皇帝達とクーブクレイオンの者達、シレンティアリオス達だけがギャラリーに入って、典礼をおこない、総主教と会食する。」⁴¹⁷⁾となっており、儀式の後に総主教との会食があったことから、入場に皇帝が参加し献納品を納めた可能性は否定できない。

復活祭後の日曜日の問題とは別に、この型に分類されるもので他とは一線を画するのが正統信仰の祭日の古い次第である。この場合、皇帝はギャラリーのメタトリーオンに一旦入った後、入場に参加するが至聖所には入らず、側廊のメタトリーオンに入り、ここから出ずに残りの儀式に参加する。

3) 神聖な井戸の堂を経て側廊に入る場合

さて以上の二つの場合に加えてもうひとつ、皇帝が大宮殿からカルケーを通り、神聖な井戸を経て直接、南側廊に行く場合がある。実際にこのような行動が記録されているのは、聖母生誕祭(第1巻第1章)、復活祭の月曜日(同第10章)、受胎告知と四旬節第三日曜日が重なったとき(同第30章)、進堂祭が

四旬節第一週月曜日と重なるとき（同第27章）、聖土曜日（同第1章、同第35章）、四旬節第一週月曜日（第2巻第10章）である。

以上の様々な祭日は二つに分けることができる。一つ目は他の教会に向かう行進の開始地点としてハギア・ソフィアが使用される場合で、もう一つは奉神礼以外の理由でハギア・ソフィアに行く場合である。

行進の始まりの礼拝をハギア・ソフィアの至聖所でおこなうのは、聖母生誕祭、復活祭の月曜日、受胎告知⁴¹⁸⁾で、いずれの場合もフォロスを経て他の教会（カルコブラティアの聖母教会、あるいは聖使徒教会）へ行き、そこで奉神礼に参加する。これは本来、祭日の儀式の次第に伝統的に組み込まれていたものである。

また進堂祭が四旬節第一週月曜日と重なるときは、やはり行進の始めの礼拝を、皇帝はハギア・ソフィアでおこなうが、至聖所ではなくメタトーリオンを使用する。そして皇帝はブラケルナイに向かう。これはおそらく進堂祭と重ならなかった場合の四旬節第一週月曜日の次第に従ったものであろう⁴¹⁹⁾。先の三つの祭日に対してこの日が根本的に異なるのは、二つの儀式を組み合わせるために、二つの教会を一日のうちに訪問する必要性ができ、このような次第をとることになった点である。

以上の四つの次第は、行進を始める際にハギア・ソフィアを訪問するものであった。これとまったく異なるのが聖土曜日である。この日皇帝は、翌日の復活祭に関連した儀式をおこなうために、ハギア・ソフィアを訪れるのである。前述の経路を経て南側廊に入った皇帝は、至聖所に献納品を納め祭壇を用意し、スケウオフルキオンで甘松を分配する。

また先に触れた四旬節第一週月曜日には皇帝は、マンナウラでの儀式の後、ハギア・ソフィアに行き第三第六の勤めに参加する。この際、皇帝は南側廊のメタトーリオンから礼拝に参加する。

これら二つの次第は、動作も由来もまったく異なるものではあるが、奉神礼、あるいはそれに先行する儀式、具体的には行進とその開始の礼拝、とは無関係であるという点で共通している。むしろたとえ言うならば、皇帝は一寸用事があってハギア・ソフィアを訪れたといった趣がある。いずれにせよ、行進を開始する際の礼拝に参加する場合も、ハギア・ソフィアで奉神礼がおこなわれないという点では二つの次第と同じであり、この点に第三の分類は共通点を見いだすことができる。

4) その他の場合

前章で取り上げた祭日のうち、以上の三つの型にあてはまらないものは第1巻第36章の教会和解記念日のみである。この日、皇帝は神聖な井戸まで行くが、そこで総主教と準備をすとハギア・エイレーネーへ行きそこで儀式に参加する。そしてその後、ハギア・ソフィアに行進して戻り、「この教会の側廊を通りナルテックスに入る。ここで行進の儀式をおこない、入場する」⁴²⁰⁾。残念ながらこの日の儀式に關

しては詳細な記述がなされていないため、ハギア・エイレーネーでの行事の内容などは不明である。しかしこの日の次第は、ハギア・ソフィアとハギア・エイレーネーが同じ組織によって運営されていたことから考えて、3)の神聖な井戸からハギア・ソフィアの南側廊に入り儀式に参加する型の変形と見てよいだろう。ちなみに皇帝がハギア・エイレーネーを訪問するとの記事は、『儀式について』のこの箇所のみ見ることができる。

以上見てきたように、皇帝が大宮殿からハギア・ソフィアに至る経路は、大きく三つに分類することができ、それぞれハギア・ソフィアにおける皇帝の行動と相関関係にあることがわかる。

次に教会内における皇帝の行動に関して、各建築部位ごとに、先行研究や遺構の現状にも目を向けながら見て行くことにする。

1) 西正面と西南隅の複合施設

●ホーロロギオンとナルテックスの前室

ハギア・ソフィアのホーロロギオンは、洗礼所の近く、教会の南西にあったことが定説となっている⁴²¹⁾。ホーロロギオンとは語源的には「時を語るもの」であり、時計であるが転じて時計を納めた建物も意味するようになった。ハギア・ソフィアのそれは12個の扉を外壁に持ち、その開閉によって時を告げたそうであるが⁴²²⁾、仕組みなどは不明なままである⁴²³⁾。

古くからこのホーロロギオンを現在の教会の南西の隅、二重のナルテックスの南に接する部分とするのが通説となっていた⁴²⁴⁾。この一角には現在も、一連の小部屋からなる煉瓦造の付属建築が残っている。〔図12〕この建築物を調査したディリムテキンもまた、ナルテックスの南側に位置する前室の入口を中央にして、西側にホーロロギオン東に総主教宮があったと考えている⁴²⁵⁾。かねてから多くの研究者は偽コディノス等の記述⁴²⁶⁾から、ホーロロギオンをユスティニアノス1世まで遡るものとみていた⁴²⁷⁾。南東隅の一連の建築物を調査したコルマクとホーキンスも、構法的理由から、このホーロロギオンとされる部分を6世紀の一回目の工事によるものと結論付けている⁴²⁸⁾。

『儀式について』の記述によると皇帝は、復活祭、生誕祭などの大きな祭の際には（前述の型：1）、大宮殿からホーロロギオンの脇を経てホーライア・ビュレーからハギア・ソフィアに入る。このホーライア・ビュレーは通常「美しい門」と訳されるが、その位置に関しては二つの説がある⁴²⁹⁾。一つはアトリウムから外側のナルテックスにはいる中央の扉を指すとする説で、もう一つは内側のナルテックスの南に位置する前室と外部をつなぐ扉のことであるとする説である。マンガによるとこの単語の指すものは史料によって様々に異なる。『儀式について』における解釈という点ではウベソルヤベリャエフ、コルマクとホーキンスは前者をとり、アントニアデス、シュトゥルーベは後者をとっている。

ここで整理してみると、この部分の記述では以下のようなものが見られる。第1章では「ハギア・ソフィアのホーロロギオン」から「ホーライア・ビュレー」を経て入るとなっており、第9章では「皇帝がホーロロギオンの前述の門から入ると」デーモスの歓迎がある。第2章では「皇帝がナルテックスの前に入ると布の中で」とあり、第3章には「ホーロロギオンのところから入り、カーテンをあげメータトリオンに入ると」となっている。

もしも『儀式について』においてホーライア・ビュレーが、アトリウムから外側のナルテックスにはいる扉を指すとする、アトリウムに言及が、少なくとも一回ぐらいいはあってもよいのではないだろうか。

第2章の記述が気になりはするが、ここではホーライア・ビュレーは内側のナルテックスの、南側の前室の扉と考える。

現在、ハギア・ソフィアの内側のナルテックスの南側には、南北方向に3ベイ連続したヴォールト・ヴォールトを持つ前室がある。この前室はホーロロギオンとギャラリーに上る斜路との間にあって、上には総主教宮の名残とされる部屋がのっている。また東側では斜路に隣接しているが、西側ではホーロロギオンの当初の東壁面よりもさらに東側に現在の前室の西壁面がある。またこの前室の西側の壁体にはかつて、ホーロロギオンの入口となっていた開口部があったが、この開口部の幅はヴォールト天井の中央のベイと一致している。これらのことから当初、西側にホーロロギオン、北にナルテックス、東に斜路で囲まれた細長い空間があって、後の時代にホーロロギオンと斜路の間を渡すように上の諸室が増築された際に、西側の壁体とその上にのるヴォールト天井とを合わせて建設することで、この前室が整備されたと想像されている⁴³⁰⁾。〔図15〕

以前は多くの研究者達がこの前室の天井を、言い換えれば前室の上の諸室を、9世紀のバシレイオス1世の工事によるものと考えていた⁴³¹⁾。これに対しマシューズはイコン破壊運動以前としたが⁴³²⁾、6世紀の段階でナルテックス南北の空間には屋根がなかったとする⁴³³⁾、彼の議論の流れから考えて、比較的遅い時期（おそらくは7世紀後半か8世紀前半）を想定しているものともわれる。しかしコルマクとホーキンスは上階の部屋の構法との比較と、史料の記述からこの前室の建設年代を565年から577年の間とみている⁴³⁴⁾。一方、この前室とナルテックスの間の扉、そしてホーライア・ビュレーと呼ばれる青銅製の扉は、いずれもその装飾から9世紀のものと考えられている⁴³⁵⁾。

この扉をへて前室に入った皇帝の行動は、第1巻第1章の記述では

「ヴォールト天井の下に、言い換えればナルテックスの前室（プロビュライア）の中に、釣り下げられた目隠し（カーテン）の中で、プライボシトスが（皇帝から）冠を外す。その時、総主教はナルテックスの扉で仕来り通り従者や部下と共に待つ。皇帝は冠を外した後、総主教の方へと進み、・・・」⁴³⁶⁾

となっている。この記述に登場する「ナルテックスの扉」をナルテックスと前室との間の扉と理解するならば、皇帝が冠をはずすカーテンで仕切られた空間は、二つの扉の間、前室の中に用意されていたことになる。

このカーテンで仕切られた空間について『儀式について』の他の部分の記述を見て行くと以下のようになる。

生誕祭（第2章）では

「皇帝がナルテックスの前に入ると布の中で、プライボシトスが皇帝の頭から王冠をはずし、皇帝はナルテックスに入る。」⁴³⁷⁾

とあり、第1章の記述と同様、前室にカーテンがあったことになる。

これに対して復活祭に関する記述(第9章)では

「皇帝はナルテックスの扉の後ろ、メタトリーオンの中、吊るしてある布の中に入る。プライボシトスは彼の頭から冠をとる。ナルテックスに入ると・・・」⁴³⁹⁾

とあり、カーテンで仕切られた空間は「ナルテックスの扉の後ろ」、すなわちナルテックスの中にあつたことになる。しかしそのあとに続けて「ナルテックスに入る」とあり、記述が重複してしまう。

また神現祭(第26章)では

「ナルテックスに入ると、布に入る。プライボシトスは冠を皇帝の頭から取る。ナルテックスを通過して総主教が彼等を出迎える。お互いに接吻すると入り、大きな門の前に立つ。」⁴³⁹⁾

となっている。ところがこの神現祭の記述では「お互いに接吻すると入り」とある。もしもこれが「ナルテックスに入る」だと解釈すると、他に考えうる可能性は低いのであるが、第9章の記述と同様な問題点を持っていることになる。

なお参考までに第1巻第38章の戴冠式に関する記述では

「ホーロギオンへ入り、カーテンをあげメタトリーオンに入るとディベーターシオンとジザキオンを着てその上にサギオンをつけて、総主教と共に入場するが、銀の門に蠟燭を灯し身廊に入る。」⁴⁴⁰⁾

となっており、皇帝が「メタトリーオン」と呼ばれる空間を使用することがわかるが、その前にある「ホーロギオンへ入り」の解釈が問題となる。これはおそらく、字義通りには解釈せずに、「ホーロギオンの所へ入り」ぐらいの意味にとり、前室のメタトリーオンのことと考えるのが適当であろう。

ここでナルテックスに目を転じると第1巻第1章の聖母生誕祭に関する部分で、ハギア・ソフィアでの礼拝を終えた皇帝は

「総主教と皇帝達は共に皇帝の門から出る。そして彼等はそこで接吻し、皇帝達はナルテックスに吊られた布に入り、(冠を)被ると再び退出し・・・」⁴⁴¹⁾

フォロスへと向かうことが書かれている。

以上をまとめてみると、ナルテックス、ナルテックスの前室の両方、あるいはいずれかに、カーテンで区切られた空間があり、メタトリーオンと呼ばれ、皇帝の更衣室としての機能を持っていたことがわかる。しかしこの空間のあった場所に関しては、今一つはっきりしないところがある。シュトゥルーベはこれを、ナルテックスと前室との両方にあつたものと考えている⁴⁴²⁾。

ナルテックスの前室は、実のところ幅が4m強しかなく、皇帝とその廷臣達が通り過ぎることを考えた場合、前室の一角を区切って使用することは困難である。この前室の東北の隅には、ビザンティン時代のモールディングによる戸口が残っている。この戸口の向こう側は斜路と本堂、そしてナルテックスの取り

合いの関係から生まれる煙突状の空間になっている。アントニアデスはこの空間こそかつての前室のメタトリーオンの位置であるとしているが⁴⁴³⁾、これは非常に魅力的な仮説である。[図13]

一方、後に触れるが、内側のナルテックスは当然ながら非常に扉の多い空間であり、現状ではメタトリーオンがあつたであろう位置に関しては、具体的なことは何も言えない。

●ナルテックス、皇帝の門

前述のようにハギア・ソフィアには二重のナルテックスがある。どちらも9ベイのグロイン・ヴォールトからなる南北に細長い方形の空間であるが、天井高、幅ともに内側のものの方が大きい。

二つのナルテックスのうち、『儀式について』の記述で特に重要なのは内側のそれである⁴⁴⁴⁾。この空間は天井が金地モザイクによる幾何学模様、壁面は様々な色彩の大理石によって飾られており、装飾の質から考えても6世紀に属するものである。この内側のナルテックスには南北に一つづつ、西壁面、外側のナルテックスとの間にヴォールトのベイに対応するように一つおきに五つ、東側本堂との間に南北の側廊と身廊とに、それぞれ三つづつが対応するように計九つの扉がある。この九つの扉のうち中央のものは特に大きく、皇帝の門と呼ばれている。[図14]

このナルテックスにおける皇帝の行動に関して、『儀式について』の各章の記述はほぼ一致する。それは以下のようなものである。ナルテックスに入って総主教と会った皇帝は、輔祭の持っている福音書と十字架を礼拝し、総主教と挨拶をかわす。その後、皇帝の門の前に移動し、そこで蠟燭を手に総主教が唱える入場の祈りに参加したのち、再び十字架と福音書を礼拝して、堂内に入場する。

この動作は、ハギア・ソフィアに皇帝が総主教と共に入場する場合、ナルテックスにいたる経路に無関係にみることができる。具体的には第1章の大きな祭の場合のようにホーライア・ビュレーからナルテックスに入る場合、つまり復活祭(第9章)、生誕祭(第23章)、神現祭(第26章)、戴冠式(第38章)、総主教テオフルクトスの選出(第2巻第38章)、の各場合のみならず、ギャラリーからナルテックスにおいてくる場合、十字架挙栄祭(第22章)、正統信仰の祭日(第28章)においても、この動作は共通である。

●アトリウム

さて一方の外側のナルテックスは大きな問題を含んでいる。

『儀式について』などの文献史料に記載されているように、また当時の他の教会の遺構からも想像されるように、ハギア・ソフィアにおいてもアトリウムがあり、その中央には泉水が湧き、回廊が周囲を巡っていたことが、シュナイダーの発掘調査でわかった⁴⁴⁵⁾。このアトリウムは人工地盤の上のっについて、

現在のナルテックスの外壁から42m西側まで広がっていた。〔図15〕

このアトリウムとナルテックスとの関連を考えるうえで、幾つか重要な点がある。

まず西正面の四本のフライング・バットレスは、以前は十字軍時代にゴシック建築の影響を受けて付加されたとの説もあったが、現在では否定されている。ミュラー＝ヴィーナーはバシレイオス1世による工事を⁴⁴⁶⁾、メインストンはバシレイオス1世ないし2世による工事を示唆している⁴⁴⁷⁾。

また1680年のグル口のスケッチ〔図9〕には西正面中央、フライング・バットレスの間に方形の塔状の建物がみられるが、この建築物は現存せず、シュナイダーの発掘調査でも基礎を発見できなかった。またビュザンツにおける他の教会で、このような塔は決して一般的ではない。このためミュラー＝ヴィーナーやメインストンは、これを十字軍時代の木造の鐘楼と考えている⁴⁴⁸⁾。

現存する外側のナルテックスの西側の壁体のうち、開口部間のピアは当初のものである⁴⁴⁹⁾。また現状では開口部は、北から南へ、扉(回廊へ続く)＝窓＝窓＝扉＝扉＝扉＝窓(大理石の支柱)＝窓＝扉(回廊へ続く)、といった配列になっている。なおちなみに両端部の回廊へと続いていた扉は、回廊が後の改修工事によって取り壊された際に、翼状に西側に突出した方形の部屋に続くことになったものである。このうち一番北側の窓は、その前の地面が発掘された際に、かつては扉であった痕跡が発見された⁴⁵⁰⁾。

以上のことから、ユスティニアノス時代のハギア・ソフィアの西側立面は、次のようなものであったと思われる⁴⁵¹⁾。

まず外側のナルテックスの西側の壁体の開口部は、現在と同じ大きさのアーチの中に開いていた。しかしフライング・バットレスも鐘楼もなく、開口の配置は北から南へ、扉(回廊へ続く)＝扉＝窓(大理石の支柱)＝扉＝扉＝扉＝窓(大理石の支柱)＝扉＝扉(回廊へ続く)、となっていた。このナルテックスからΠ字型に回廊が延びて、アトリウムを取り囲んでいた。この回廊は西、北、南の三方で、ピアとピアの間に二本の円柱を立てた形式の列柱廊となっていた。そしてこのアトリウムの西側には、アテュルと呼ばれる一つの門を持った前室状の空間があった⁴⁵²⁾。そしてこのアテュルは階段を介して表の通りと連絡していた。〔図15、16〕

しかしすでにみてきたように、実際に皇帝がアトリウムを通るのは、ハギア・ソフィアに向かう往路ではなく、ハギア・ソフィアから行進して他の教会に向かう際に、行進の開始の礼拝ののち、退出するときである。

前節でまとめたように、聖母生誕祭、復活祭の月曜日、受胎告知と四旬節第三日曜日が重なったとき、進堂祭が四旬節第一週月曜日と重なるときの各場合に、行進して他の教会に向かうためにハギア・ソフィアから出発する皇帝の様子が描かれている。

しかし先に触れたように、第1巻第1章の記述のうち、聖母の生誕祭に関する部分では、皇帝が皇帝の

門からナルテックスに出て、カーテンの影で冠を被ることが記されているが、退出の経路に関してはこれ以上何も触れていない。

一方、同第10章の復活祭の月曜日に関する部分では、以下のような記述をみることができる。

「慣習どおり皆に先導された皇帝は、身廊の中心を通り皇帝の門から出て、ナルテックス、アトリウムを通り、アテュルの階段を下りてミリオンとメセーを通り……」⁴⁵³⁾

ほぼ同じ記述は、受胎告知が四旬節第三日曜日と重なった場合について記した、第30章にもみることができる⁴⁵⁴⁾。こちらの場合は皇帝の経路は明確に把握できるが、皇帝が冠を再び被ることについては、何も記されていない。

さてまた第27章の進堂祭が四旬節第一週月曜日と重なった場合では、

「皇帝は教会堂の右の部分、ナルテックス、ホーロロギオンを通り、アテュルに向かって続く西向きの大きな門を出る。そこから馬に乗って……」⁴⁵⁵⁾

とある。このうち解釈上問題となるのは「教会の右の部分」と「アテュルに向かって続く西向きの大きな門」である。前者の「右側の部分」は『儀式について』においてよくみる表現で、進行方向に対して右左、という意味ではなく、東に向かって右左という意味である可能性が高い。そうだとすれば、ここでは南側、おそらくは南側廊の意味となる。後者に関しては、先行研究ではあまり取り上げられてこなかったが、字義通りホーロロギオンを通り抜けて、ホーロロギオンの西側の扉から出ると解釈しても、何ら矛盾はない⁴⁵⁶⁾。なお他の場合、復活祭の月曜日などと比較すると、礼拝をおこなう場所が至聖所からメータトリーオンに移った場合、退出の経路も教会の中央を通るものから南側を通るものへ変化するというのも、興味深い点である。なぜならば後に触れるように、このメータトリーオンは南側廊にあったと思われるからである。

●大きな螺旋階段と学校

先にみてきたように皇帝がホーライア・ビュレーをへてナルテックスに入る場合と、ギャラリーからおりてくる場合とで、ナルテックス内の行動には大きな差がなかった。しかし当然のことながらナルテックスにいたる経路は、両者で大きく異なることになる。後に説明するように、皇帝はこの時代、ギャラリーを使用する際には主に南ギャラリーを使用した。この南ギャラリーからナルテックスにいたるまでの経路を、第1巻第2章では以下のように述べている。

「大きな螺旋階段を下りて高貴な(左の)部分へ曲がり、復活祭の銘板のある学校を通過して段を下り、ナルテックスの大きな門に入る。そして帝室の門に到着する。」⁴⁵⁷⁾ (十字架崇拝祭)

またこれとよく似た部分を第28章の正統信仰の祭日にもみることができる。

「大きな螺旋階段を下り、復活祭の板のある学校を通過して段を下り、大きなナルテックスには入らずに、そのかわりに左に曲がって三角形からメータトンに向かう。段のところで儀式長官が言う：「お進みください、陛下」。そしてアテュルの階段を下り、そこで行進を迎える。」⁴⁵⁸⁾

どちらもギャラリーから「大きな螺旋階段」をおり、途中、学校を通過する。おそらくこの二つの記述は同じ階段について言及しているものと思われる。ただ前者ではナルテックスへ入るのに対して、後者では「三角形からメータトンに向かう⁴⁵⁹⁾」とある。残念ながらこの「メータトン」や「三角形」が何であるかは不明であるが、続く部分でアテュルが言及されていることから、アトリウム内あるいはアトリウムの極く近くにあった何かであると思われる。左折してこの「メータトン」や「三角形」の方向、つまり西に向かうとすると、階段の出入口は北向きであると考えられる。そしてわざわざ「ナルテックスには入らずに」と但し書きを付けていることから、この階段はナルテックスのすぐそばに出入口があったのではないだろうか。

一方、第2巻第38章には以下の記述がある。

「(ギャラリーから)そして決まり通りに皇帝達は大きな螺旋階段を下り、最も神聖な教会のナルテックスにホーライア・ビュレーから入った。」⁴⁶⁰⁾

十字架崇拝祭の記述に登場する「ナルテックスの大きな門」とはホーライア・ビュレーを差すのだろうか。すでにみてきたように、『儀式について』においてナルテックスの門とホーライア・ビュレーは使い分けがある。おそらくこの両者は別のもを差すと考えるのが適当であろう⁴⁶¹⁾。またこの記述からも、「大きな螺旋階段」がホーライア・ビュレーから決して離れていないところ、少なくとも説明を追加せずとも十分な程度に、近い場所にあることが想像できる。

現在ハギア・ソフィアには西南、西北のすみにそれぞれ一つづつ斜路がある。しかしシュトゥルーベは『儀式について』で言及されている学校⁴⁶²⁾を教会堂ないしアトリウムの南側にあったものと考えている⁴⁶³⁾。また先に述べた出入口の向きや、位置の問題から考えても西北の斜路が、この「大きな螺旋階段」であったとは考えにくい。

コルマクとホーキンスは、もう一つの西南の斜路が「大きな螺旋階段」であったと考えている⁴⁶⁴⁾。この場合大きな問題が生じる。この斜路は途中連絡する空間がまったくなく、学校の記述とあわなくなってしまう。彼等はこれに対して、学校は洗礼堂の近くにあり、斜路をおりてからその前を通過したので問題ないと反論している。しかしこの斜路は洗礼堂の北側に南向きに出口がある。史料では「大きな螺旋階段」を出ると左に曲がって学校の前を通ることになっている。これをどう解釈するかが問題で、斜路を出てすぐに洗礼堂の北で左折してしまうと東向きに進むことになり、また斜路を出てまず右折して洗礼堂と斜路のあいだの通路状の空間から一回出て、左折すると南に進むことになり、どちらの場合もナルテック

スから離れて行ってしまふ。

これに対してディリムテキンは、16世紀にシナンによって建てられたミナレットの位置に階段があった可能性を指摘している。これは螺旋階段で、教会堂の南東隅にあった一連の部屋と連絡し、西ギャラリーまで続いてたと彼は主張している⁴⁶⁵⁾。シュトゥルーベは以上の様々な条件を考慮して、皇帝が使用した「大きな螺旋階段」はこのディリムテキンのいう螺旋階段に他ならず、学校も螺旋階段に隣接していた一連の部屋のうちのどれかであったとみている⁴⁶⁶⁾。

この二つの説のどちらがより説得力があるのかという問題は、大変難しい。「大きな螺旋階段」という単語からしてすでに複雑で、「螺旋階段」と訳した単語は『儀式について』において、斜路か階段かを問わず、また方形か円形かを問わず、螺旋状に上下方向に移動する空間があればこの単語が用いられている。大小を言えば、西南の斜路は三つ現存する斜路のうちで最小のものだが、ミナレットの位置にあった階段よりもはるかに大きかったであろう。「大きな螺旋階段」と学校の関係、左折の問題など、実に不可解な点が尽きない。シュトゥルーベの説も、問題の螺旋階段が現存しないために、斜路と異なって十分な議論の基盤がないだけかも知れないが、ここでは彼女の説に従うことにする。

2) 身廊

●身廊の床面

現在ハギア・ソフィアの身廊の床面は、石材の寸法から大きく三つに分けることができる⁴⁶⁷⁾。[図17] 身廊の中央部をかなり広い範囲に渡って占める、大きさ約3m×1mの整然と並んだ大理石、身廊の西側入口付近の約0.7m四方の石材、東側の種々雑多な大きさの石材、の三つである。これらの年代判定は非常に困難であるが、ドームの崩壊した時期とあわせて考え、それぞれ6世紀、10世紀、14世紀のものと考えることができる。このうち、中央部付近には緑色の石材によって、身廊を横断するように帯が何本か引かれている。[図18] また一番東側の折れ曲がった帯は中央部、身廊の軸線とあたる部分で途切れており、そのさらに東側にこれと対応する形でΠ字型に赤い石材がはめ込まれている。『儀式について』の記述にも繰り返し登場し、またのちに詳しく触れるように、10世紀のハギア・ソフィアにはテンブロン、アンボ、ソレアといった堂内装置があった。マジスカはこの緑の石材の帯の欠落部分をつかつてアンボがあった名残と、また赤の石材はテンブロン中央の扉の痕と考えている⁴⁶⁸⁾。[図19、20]

これら身廊の床面と関係あると思われる箇所を、史料から拾いだすと以下ようになる。まず第1巻第1章には小聖入の様子に関して以下の記述がある。

「総主教が祈りを捧げ終わると、入場が行われる。錫やすべての前出の宝物が入場し、教会の左右の決められた場所に位置する。ローマ人の標識や旗印は互いにソレアの横に並び、聖コンスタンティノスの十字架はペーマの右側の部分に立つ。マジストロス達、アンテュバトス達、他のシュンクレートス達はバシリコス・アントロポス達と共に、教会の(身廊の)右側の部分、決められたところに立つ。そこを皇帝達が通過する。」⁴⁶⁹⁾

なお皇帝がハギア・ソフィアへの入場、あるいは小聖入において、身廊の中央を通過してアンボの脇を通過しソレアの中を、テンブロン神聖な扉まで進むことは、復活祭、生誕祭、神現祭、十字架栄誉祭、正統信仰の祭日の各場合において等しくみることができる。それゆえ、引用部分では「通過する」とのみ書かれてはいるが、この場合も皇帝はソレアを進むものと考えてよいだろう。

一方、皇帝とは別に廷臣達は堂内の決められた位置に立つことになっている。この廷臣や標識、旗印などの位置と、先に触れた身廊床面の帯との関連は不明である。また13世紀以降、皇帝の玉座がおかれたとされる⁴⁷⁰⁾、東南ビアのそばの床モザイクも、『儀式について』の記述と関連があるのか否か不明である⁴⁷¹⁾。

次に大聖入に関する記述について見て行くことにする。すでに述べたように大聖入の行進に皇帝が参加するのは、ハギア・ソフィアだけで見ることができるものである。このときの模様は『儀式について』の

第1巻第1章、第9章、第23章から知ることができる。このうち第1章では

「(皇帝はメータトリオンから出て)そしてこの教会の右側の部分を、クーブークレイオンとシュンクレートスと共に、錫や他の宝物を引き連れて通り、アンボの後ろまで進む。そこで神聖な宝物達は待ち、そこに皇帝のあかりを置いて火をつける。皇帝達がそこに来ると、プライボシトス達があかりを取って皇帝達の手に戻す。皇帝達はあかりを手にシュンクレートスとクーブークレイオンと神聖(な贈り物)を護衛して行く。錫と他の宝物はそれぞれの規則に従って立ち、皇帝達はソレアを通過して進み、神聖な扉の外に立つ。」⁴⁷²⁾

とあり、皇帝がメータトリオンを出て、おそらくは南側廊を西へ進み、それから北向きに方向を換えて身廊に出て、アンボの西側に用意されたあかりをとって聖職者達の行進と同行することがわかる⁴⁷³⁾。またこのとき、第9章には「パトリキオスの全員はそこに立ち、皇帝は彼等の真中を通る」⁴⁷⁴⁾ってあかりのところへ行くとの記述があり、第23章では同様に「シュンクレートスは横に並んでいて、(皇帝は)その中央を通る。」⁴⁷⁵⁾となっている。おそらく身廊の南側にパトリキオスを始めとする元老院の面々が東西に横に並んで立ち、その中央を皇帝は突き抜けて側廊から身廊のアンボの方へと進むのであろう。

この蠟燭を置く位置や南北方向の移動と、先に述べた床面の緑の石材の帯とは何らかの関係があった可能性は否定できない。

以上の場合以外に皇帝が身廊を通る旨、記述があるのは⁴⁷⁶⁾ 行進の始めの礼拝をハギア・ソフィアでおこなう場合である。この場合、前述の進堂祭と四旬節第一月曜日为重なった場合を別として、皇帝は至聖所で礼拝を済ませたのち、ソレアを通過し身廊の中心を通り皇帝の門から退出する。このとき、復活祭の月曜日(第10章)と受胎告知(第30章)では皇帝がソレアを出ると聖歌が始まることになっている。一方、聖母生誕祭(第1章)では以下のような記述がある。

「彼等がアンボの後ろに、言い換えれば大きな門の前に、来ると皇帝達と総主教は、十字架と福音書を従えて立ち、彼等はそこで教会でやることに従って、祈りを捧げ始める。」⁴⁷⁷⁾

おそらく先の床面の緑の帯は、マジスカの指摘⁴⁷⁸⁾とあわせて考えると、上の記述に見られるアンボと皇帝の門の間の祈りを捧げる場所を特定するのに使用されたと見ることができるだろう。だが残念なことに、『儀式について』の記述には床の緑の帯あるいはそれに類するものは一切登場しない。

●アンボとソレア、そしてテンブロン

次に当時のハギア・ソフィアの身廊東側にあったであろう、堂内装置について見て行くことにする。ハギア・ソフィアの東側の堂内装置は6世紀中頃にドームが倒壊してから、1204年に十字軍の略奪を受

けるまで、基本的には変更されなかったと考えられる。この562年に設置された堂内装置に関して最も詳しい記述は、再献堂式に際して書かれたパウロス・シレンティアリオスの韻文である。本稿においてもこの韻文の記述を参照しながら、身廊東側の設えについて考えていくことにする。

6世紀コンスタンティノポリスにおける教会堂の身廊東側堂内装置に関しては、考古学調査の結果、 Π 字型に祭壇の周りを取り囲む障壁=テンブロン、身廊の軸線上の真中に近い場所に位置する説教壇=アンボ、テンブロン中央の扉からアンボに向かって延びる通路状の腰壁=ソレア、といったものがあったことがわかっている⁴⁷⁹⁾。

562年に設置されたハギア・ソフィアの堂内装置の復元に関しては、19世紀以後様々なものが発表されてきた。しかし戦後クシュティスの論文⁴⁸⁰⁾が発表されるとこれがほぼ定説となり【図21、22】、マジェスカが床面の状況をもとに寸法体形に変更を加える⁴⁸¹⁾など、細部の見直しはあるものの⁴⁸²⁾基本的には現在においても重要さを失っていない。

このうちアンボの復元は、主な典拠となるパウロス・シレンティアリオスの記述⁴⁸³⁾が比較的詳細なため、装飾以外あまり疑問の余地がない。アントニアデスの案⁴⁸⁴⁾がすでに形態面での定説となり【図23】、クシュティス⁴⁸⁵⁾やマジェスカ⁴⁸⁶⁾も基本的にはこれを踏襲している⁴⁸⁷⁾。

その形態はおおよそ以下のようなものである。身廊の東西軸状に楕円形をした腰壁を持つ壇があり、これは8本の円柱によって支えられている。この壇からは東西に一つづつ計二つの、やはり腰壁を持つ階段が身廊から連絡している。この説教壇の周囲を楕円形に取り囲むように、別の8本の円柱が説教壇よりも高く立ち、燭台を載せたアーキトレーヴを支えている。これら外側の円柱の間にも腰壁があるが、北西と南東に出入口が設けられており、東側ではソレアと連絡している。

アンボに対してテンブロンの復元は、クシュティスの研究が発表されるまでに種々雑多、様々なものが登場した⁴⁸⁸⁾。これはもともになるパウロス・シレンティアリオスの記述⁴⁸⁹⁾が韻文ゆえのあいまいさを含んでいることと、古い時代の研究者がロシア正教会で一般的な壁状の障壁、イコノスタシスと類似なものを想定していたことが原因と思われる。

しかしクシュティス以降このテンブロンの形態に関しても、おおよそ以下のようなものというところで研究者の意見は一致している。身廊に Π 字型に突出した平面をもっており、円柱、腰壁、アーキトレーヴによって構成されていた。全部で12本の円柱からなっており、西正面にはそのうちの6本が配置されており中央に出入口がある。また南北両側面にも出入口があり、テンブロン全体では計3個の出入口となる。アーキトレーヴには正面には聖人像の装飾があり、上面には燭台が載っていた。そして正面中央の出入口からソレアといわれる通路状の腰壁が西へ延び、アンボと連絡していた。【図24】

さてでは『儀式について』の記述における身廊東端部の堂内装置についてみていくことにする。

アンボが儀式の舞台装置として、皇帝によって積極的に活用されるのは主に以下の二つの場合である。まず十字架架米祭(第22章)の時は、アンボの上で総主教が十字架の聖遺物を掲げる際に、皇帝はアンボの階段を東側から三、四段上り、そこで礼拝と掲示の儀式に参加する。このとき廷臣達がアンボを取り巻くように立つことになっていた。

もう一つは戴冠式(第1巻第38章)で、総主教と共にアンボに上った皇帝は、アンボ上でクラミュスと冠を授けられる。

なお、アンボの下には聖歌隊のための席があり、10世紀においてもこれは使用されていた⁴⁹⁰⁾。

次にテンブロンに関する記述である。この中でまず重要なのは西正面中央の開口部、神聖な扉に関するものである。ここでは儀式の各局面に分けてみていくことにする。

さて小型入の際に皇帝が至聖所に入るときの様子を、第1巻第1章は以下のように書いている。

「皇帝達は神聖な扉に、紫色の一段高くなったところにつく。総主教だけが障壁の内側に入り、神聖の扉の左(高貴な)側に位置する。蠟燭と共に三回跪き、皇帝達は神への感謝を表し、そして総主教の占めている神聖な扉に跪てから入る。」⁴⁹¹⁾

『儀式について』では皇帝と総主教がテンブロン中央の扉まで来ると、総主教は中に入り、皇帝は蠟燭を手に折りを捧げてからテンブロン内にはいることが、繰り返して説明されている⁴⁹²⁾。しかしながら他の部分には「紫色の一段高くなったところ⁴⁹³⁾」に関する記述は一切登場しない。また神聖な扉について言及している他の部分にも、この「紫色の一段高くなったところ」に関する記述はまったく見ることができない。この「紫色の一段高くなったところ」をマンブーリは、先に述べたマジェスカがテンブロンの神聖な扉の位置を示すとした、赤い Π 字型の石材を差すと考えている⁴⁹⁴⁾。【図25】彼は原文の「オムファリオン」の意味から考えて、本来は「紫色の円形に一段高くなったところ」であり、以前はそのような石材が置かれていたが、後の時代に現在の形に変更されたものとしている。

大聖入に関する部分の記述では同じ章に

「皇帝達はソレアを通過して進み、神聖な扉の外に立つ。第一の皇帝が右に、第二の皇帝が左にである。自分達のあかりを神聖な扉の柱につける。」⁴⁹⁵⁾

とある。しかし復活祭について述べた第9章と第23章の生誕祭に関する部分では、皇帝は蠟燭をブライボトスに渡し、彼がソレアのパラベットの上に、この蠟燭を置くことになっている。そして皇帝は聖職者全員が中に入ったのを見届けて、第1章では「総主教に暇乞いをしてペーマの右側の部分の外を通過⁴⁹⁶⁾、メータトーリオンに入る」⁴⁹⁷⁾とあり、第9章でも総主教と挨拶を交わしてから、「至聖所の外を通りメータトーリオンに入る。」⁴⁹⁸⁾となっている。このことからソレアとテンブロンの間には、

人間が通り抜けることが可能な隙間があったと思われる。

本論文で取り上げた史料の記述の中でも最も興味深い部分は、テンプロンの南側側面に関するものである。以下それを追っていくことにする。ここで皇帝が参加しておこなわれる行為は平和の接吻と領聖である。

まず接吻については第1章に、皇帝は

「メータトリーオンの向かいのペーマの右側の部分で総主教は障壁の内側に立ち、第一の皇帝が障壁の外に立って総主教と接吻する。」⁴⁹⁹⁾

とある。そしてその後、皇帝が他の聖職者達と接吻したあとで、総主教は「障壁の少し低いところ」で元老院議員達と接吻を交わすことがわかる。

ところが第9章の復活祭に関する記述では以下のようにになっている。メータトリーオンを出た皇帝は「至聖所の右側の脇に、障壁にもたれるようにして横の移動式祭壇に」⁵⁰⁰⁾立って、そこで聖職者達と接吻をかわすのである。この移動式祭壇の位置に関しては、続く領聖に関する部分では「至聖所の前」となっている。

そして聖職者達と接吻を交わした後に、「皇帝は下りると自分がいつも行進（に参加している廷臣）のそれぞれに愛（の接吻）を与えるところに立つ。」そしてここで廷臣達と接吻を交わすのである。

また何れの場合も生誕祭に関して記した第23章では、慣例通りのところ、としか記されていない。

以上をまとめると表現が異なりこそすれ、至聖所の南の障壁越しに皇帝と総主教が接吻をする点で、各記述は矛盾しないようである。この接吻の位置に関して、なぜかマシューズはほとんど言及していないが、シュトゥルーベは至聖所南側の障壁⁵⁰¹⁾、メインストンはテンプロンの南側の戸口⁵⁰²⁾とほぼ同様の結論に達している。

ところがマンブーリはこれについて、ソレアに設置された移動式祭壇の脇で総主教と皇帝が接吻した後、皇帝は東南のエクセドラの床に嵌まっている紫色の円形の石材〔図26〕に移動し、ここで廷臣達と接吻するとしている⁵⁰³⁾。しかしかれはかなり幅の広いソレアを想定しており⁵⁰⁴⁾、現在、一般的に想像されている通路状のソレアには不適當である。〔図27〕

彼がソレアを皇帝と総主教の接吻の場所と考えた原因は、第9章において、移動式祭壇の位置の説明があいまいなことにある。接吻の場所について史料は、至聖所の南側の障壁にもたれるようにして、と述べる一方で、「横の移動式祭壇」のところ、とも言っている。しかしのちに詳しく見ていくように領聖の場面の記録では、「至聖所の前」の「帝室の移動式祭壇」が使用される。

この移動式祭壇はたびたび『儀式について』の記述に登場するが、ハギア・ソフィアでの使用が記録されているのはこの章と、第1巻第47章のパトリキオス、シュンクレティコス、ストラテゴスの昇進

に関する部分⁵⁰⁵⁾のみであり、後者の場合皇帝は使用しない⁵⁰⁶⁾。言い換えれば皇帝がこの移動式祭壇を使用する場面は、第9章の記述にのみ見ることができる。マンブーリや、彼の説に影響を与えたウベンソルの説は⁵⁰⁷⁾、この第9章の記述「至聖所の前」と、第47章のソレアに設置された移動式祭壇との記述とを突き合わせることで成立している。つまり「至聖所の前」ソレアの中が、移動式祭壇の定位置であると考えたわけである。

ところで『儀式について』で移動式祭壇が登場する場合⁵⁰⁸⁾、皇帝や廷臣の領聖の為に使用されるのがほとんどである。当時の教会堂において信徒が領聖を受ける場所は、現在でもそうだが、通常、至聖所の障壁の中央の扉の前、つまり史料の言うところの「神聖な扉」の前である⁵⁰⁹⁾。『儀式について』には記述が見られないが、第9章の復活祭の儀式で皇帝のみならず廷臣達も領聖を受けるのであれば、移動式祭壇は神聖な扉の前に設置してあったと考えるのが無理がない。

つまり「帝室の移動式祭壇」は、ソレアとの関係は不明ではあるが、至聖所の西正面、神聖な扉のそばにあった可能性が高い。しかし史料の記述には至聖所の南側に「横の移動式祭壇」があったことが記されている。

おそらくこの「帝室の移動式祭壇」と「横の移動式祭壇」について、最も単純かつ問題の少ない解釈は、至聖所の前と南側の二箇所に二つの移動式祭壇が設置されていた、あるいは儀式の途中で南側から正面に移動させた、とするものであろう。

また皇帝が廷臣達と接吻を交わす場所に関しては、第9章からも慣例に従った場所であることがわかり、これを第1章の記述とあわせて考えると、ペーマの南側の障壁の外、東南エクセドラか南側廊の東側の何処かということになる。このときには先のマンブーリの指摘した、紫色の石材に関する説は大変魅力的なものである。

さて次の領聖に関する記述は、『儀式について』の各章で食い違いが大きい部分である。第1章では以下のように描写されている。

「領聖の時が来ると、皇帝達は再び、既に述べた方法で出て、ペーマの右の部分に進み、そこで神聖な結合を受ける。そして慣例どおり総主教と接吻してから、メータトリーオンに入り……」⁵¹⁰⁾

しかし第9章では前述のように移動式祭壇を利用する。

「皇帝は出ると、上記のものすべてに先導されて進み出て、至聖所の前の帝室の移動式祭壇の前に立つ。そして折るとそこに上り、総主教の手によって、クリストスの生誕に先立つ祭の所で説明した方法で、領聖を受ける。」⁵¹¹⁾

そして第23章の生誕祭の記述では、動作は詳細に記録されているにもかかわらず、なぜか場所が明記

されていない。

「そして神との結合が訪れると、儀式長官がプライポシトスに、プライポシトスは皇帝に教える。既に述べたように先導されて出て、我等が主イエーソス・クリストスの汚れなき肉と血を拝受するために総主教の横に行く。二人のオスティアリオスが広げた布を持ち、価値ある贈り物をその手で受ける。総主教に接吻して段⁵¹²⁾を下り三回合図して神聖な贈り物を拝受する。それからこの段を上り、オスティアリオスが布を彼の下に広げ、総主教によって葡萄酒を授けられる。下りて祈ると二人は互いに跪く。」⁵¹³⁾

以上の三通りの方法について、シュトゥルーベは第9章の復活祭の方法にのみ注目し他には注意を払っていない⁵¹⁴⁾。マシューズとメインストンは共に、逆に第1章と第2・3章とを補完的に利用している。つまり至聖所の内部、祭壇の南側に段が用意されていて、ここで皇帝が領聖を受けたと考えている。しかしながら至聖所に至る経路は二人の間で異なっている。その理由は二つの章のどちらもが経路について、「既に述べた」方法で行くとしか書いていないことに起因する。マシューズはこれを大聖入のときと同じ経路と考え、皇帝は神聖な扉から至聖所内に入り、祭壇の南側の段の上で総主教から領聖を受けたとしている⁵¹⁵⁾。メインストンはこれを接吻の際と同じ経路と考えており、段上で領聖を受けるのは生誕祭など特別な機会のみとしている⁵¹⁶⁾。

先に述べたように復活祭の次第では移動式祭壇が登場することから、領聖は大聖入のときの経路にしたがって、神聖な扉の前の移動式祭壇でおこなうと考えるのが自然である。逆に生誕祭の次第はこの部分に関しては、第9章の記述とは基本的に無関係と考えるのが適当であろう。確かに第9章には、生誕祭の次第にしたがって領聖を受ける旨、書かれている。だがこれは領聖の際の具体的な動作についてであって、経路や場所に関してではないと思われる。つまりマシューズやメインストンのように第1章と第2・3章は相互補完的に読むべきで、皇帝のみが至聖所内に入って、段上で総主教から領聖を受けるのである。このときの経路は不明であるが、仮に廷臣達も領聖を受けるのであれば、当時の慣習から考えて、皇帝は廷臣達と共に神聖な扉の前まで行き、そこから一人で至聖所内に入ると考えるのが適当であろう。なぜなら、通常、俗人は至聖所内に入ることはできず、例外的に皇帝のみ（正確には皇帝とその侍従達）が幾つかの場合に、入ることを認められているに過ぎないからである。そして廷臣達は至聖所の前で領聖を受けるのである。

続いてこのテンプロンで区切られた空間、至聖所の内部に目を転ずることにする。

至聖所内の祭壇についてパウロス・シレンティアリオスは、黄金製の祭壇にはキリストの姿を描いた錦織りのおおいが掛けられていた⁵¹⁷⁾、ことを述べている。『儀式について』第1巻第1章は以下のように記述している。

「祭壇のところに来ると神聖な布の聖像に接吻する。もちろん総主教がこれを持ち上げて、皇帝達に接吻するよう促すのである。これがすむと習慣通り、二枚の白い聖体布を祭壇の上に広げ、総主教の手によってそこに戻される二つの神聖な杯、二つの神聖な丸い盆と神聖な産着に跪く。」⁵¹⁸⁾

第9章の復活祭に関する記述にも

「祭壇の前で折り、そこに二枚の聖体布を広げ、持って来たものを置く。丸い盆二つ、杯二つ、それから聖なる産着に接吻する。その後、プライポシトスから献納品を取りこれを祭壇に置く。」⁵¹⁹⁾

とあり、ほぼ同じ記述を生誕祭（第2・3章）、神現祭（第2・6章）にもみることができる。

以下、祭壇に関する記述を類別してまとめることにする。

第1章にある聖母の生誕祭に関する部分と第2巻第10章の四旬節第一月曜日の次第では、皇帝が祈りのあとで祭壇の周囲に香をまくことがしるされている。

これに対して第10章の復活祭後の月曜日と第30章の受胎告知と四旬節第三日曜日が重なった場合、そして第28章の正統信仰の祭日の新しい場合の次第では、皇帝が祭壇に跪いて祈ることのみが記されている。

また第22章の十字架挙栄祭の場合は、祭壇ではなく十字架の聖遺物を礼拝することが書かれている。祭壇とその周りの設えに関して、幾らか興味深い言説をみることができるのは、聖大土曜日（ケンテナーリオン）の献納に関する部分である。第1章の記述では皇帝は、祭壇のおおいを整えた後、ケンテナーリオンを「祭壇の水盤の台」に置き、香を炊くことになっている。また第35章には、皇帝が祭壇のおおいを換えて、ケンテナーリオンを「祭壇の上の段の上に」置き、さらに「そこに立ったままで、祭壇を換え、プライポシトスからやはり大変高価なもう一つの献納品を取ると、それを祭壇の上に」置いて香を焚くことになっている。このことから、少なくとも聖大土曜日には通常の祭壇の他に補助的な祭壇も用意されていたことがわかる。

以上、様々な場合をみてきたが、この祭壇のあった位置はマンブーリによれば、先に述べた神聖な扉と対応する床面のΠ字型の赤い石材から約4m東にある、南北に5枚連続して並んでいる床面の大理石板と対応する⁵²⁰⁾。

また祭壇の上にあったであろうキボリオンについて、言及されているのは第2巻第38章のみで、ここにはキボリオンの柱が銀であったとの記述がある⁵²¹⁾。これら祭壇とその周りの設えについてパウロス・シレンティアリオスも黄金製の祭壇の上には、四本の銀の柱と四つの銀のアーチからなるキボリオンがあったと述べている⁵²²⁾。

さて第1巻第1章には先に引用した部分に続いて以下のような記述がある。

「そしてその後で、この神聖なペーラの右側の部分を通して、皇帝達は総主教と共に丸い所（＝アプス）

に入る。ここには黄金の神聖な十字架がある。」⁵²³⁾

このことから、至聖所内のアプス、祭壇の東には黄金製の十字架があったことがわかる。

またこのアプスにはパウロス・シレンティアリオスの記述⁵²⁴⁾ や、ハギア・エイレーネー⁵²⁵⁾ 等の同時代の建築遺構から考えて、半円形の階段状の司祭席、シュントロノンがあり、その中央、最上段には総主教席が設けられていたと思われる⁵²⁶⁾。[図24]

3) 南側廊東部分

●メータトリーオン

ここでは皇帝が使用したハギア・ソフィア一階のメータトリーオンについて、見ていくことにしよう。まずこのメータトリーオンの位置について検討していくことにする。大聖入の行進を終えたあとの皇帝の行動に関して、第1巻第1章には以下のようにある。

「皇帝は総主教に暇乞いをしてベーマの右側の部分の外を通過して、メータトリーオンに入る。」⁵²⁷⁾

またのちの平和の接吻についても

「そしてメータトリーオンの向かいのベーマの右側の部分で総主教は障壁の内側に立ち・・・」⁵²⁸⁾

となっており、ベーマの右側、つまり至聖所の南側にメータトリーオンがあったことがわかる。さらに第2巻には

「そのちベーマの右側の部分を通して、小さな神聖な扉から出て、主人達は総主教と紫の列柱まで行き、そこで暇乞いをして彼に接吻する。そして総主教はベーマに入り第三第六の動めをおこなう。一方皇帝はメータトリーオンに入り、・・・」⁵²⁹⁾

とある。このベーマの右側の「紫の列柱」は、現在の東南エクセドラの紫色の二本の柱だと思われる。それゆえにメータトリーオンの位置は東南エクセドラの柱の近く、それも身廊から柱を通過していくような位置関係にある可能性が非常に高い。

メータトリーオンは、『儀式について』の記述から考えて、一般的には更衣室、休憩室としての機能があったものと思われる。残念ながらハギア・ソフィアの一階にあったメータトリーオンの中での皇帝の行動に関しては、のちに詳しく見ていくが、食事をしたということしか書かれていない。しかし一般的な更衣室、休憩室としての機能と、史料で裏付けられた食堂としての機能を満たすことから、適当な広さのカーテンや障壁で仕切られた空間が想定される。しかしながら現状ではハギア・ソフィアの堂内には、身廊にもビザンティン時代の堂内装置は一切残っていない。

またこのメータトリーオンの前には礼拝所があったことが、先の第1章の引用部分に先行する至聖所に献納品を納めたあとの皇帝の行動からわかる。

「(至聖所の中で) 総主教に接吻して暇乞いをし、メータトリーオンの前にある礼拝所に入る。ここでも蠟燭を手に三回跪いて神への感謝を表し、我等が主と神の受難の象徴がすべて刻まれている価値ある十字架に接吻し、メータトリーオンに入る。」⁵³⁰⁾

またメータトリーオンの機能については、第1巻第1章には、領聖を受けたあとの皇帝の行動として以下の記述がある。

「メータトリーオンに入り、そこでシュンクレートスのうちの高位で親しい人達と食事を取る。皇帝達

の食事がすむと、プライボシス達が係の者と入室し、皇帝達に彼等のクラミュスを着せる。その後、このプライボシス達が総主教を案内し、(彼は)皇帝達と接吻し、神聖な井戸へと続く小さな扉へと彼等を送っていく。」⁵³¹⁾

他にほぼ同じ内容の記述が第23章にもあるが、第9章ではメタトリーオンではなくてトリクリノスで食事することが記されている。

「皇帝の領聖の後に、皇帝と総主教は両者互いに跪き、皇帝はメタトリーオンに入る。トリクリノスに出ると、命令を受けた友人達と食事をする。」⁵³²⁾

「皇帝は食事の席を立つと、バステートルから肩掛を掛けてもらい、プライボシスに総主教を呼ぶように命じる。総主教が入室すると、皇帝と総主教とは両者互いに跪く。そして食事をしてきたトリクリノスを通ると、神聖な井戸へと出るときに、皇帝は門の中に総主教と立ち・・・」⁵³³⁾

このトリクリノスとメタトリーオンの位置関係は不明である。しかし全体として、礼拝所、トリクリノス、メタトリーオンという少なくとも三つの空間が隣接、あるいは近接して存在していたことがわかる。

そこで前述のエクセドラ周辺、南側廊などを痕跡を中心に詳しく見ていくと気がつく点が見つかる。[図28、35]

まず第一には南側廊東端のベイの南側壁体手前の床面の痕跡があげられる。これは壁の手前、ベイの両脇に立つ二本の支柱をちょうど結ぶように、一連の痕跡が並んでいるものである。この痕跡のほぼ中央に直径2cm程の小さな二つの穴がある。ここから左右に70cm程はなれたところに、直径10cm程のかなり大きな円形の穴を埋めたあとがある。この大きな痕跡のうち、西側のものの中心から15cm程はなれたところ、痕跡から東南方向に90度分程の円弧状に床面が摩り減ったあとがある。これは東側のものに関しても同様で、ほぼ線対称に西南方向に90度分の円弧状の磨耗がみられる。[図29] さらにこの太い二つの痕跡から外側に、それぞれ28cm離れたところに、直径7cmの円形の穴のあとが左右にある。この痕跡と同様の痕跡はここから外側に向かって、左右それぞれさらに二箇所、計三箇所づつ並んでおり、その間隔はいずれも20cmである。残念ながらこれより左側、つまり東側の石材は後代のもので、痕跡はもはや存在しない。しかし右側、あるいは西側には支柱まで痕跡がつづいている。また左右の支柱にはそれぞれ内側の部分に、向かい合う形で横穴があいていて、柱礎にも内側に掻き込がある。横穴は左側の角柱には二箇所あり、高さはそれぞれ255cmと220cmであるが、右側の円柱には高さ205cmの所に一箇所あるだけである。

このことから、この部分の二本の支柱間には柵状の障壁が、かつて入っていた可能性が高い。[図24、27] これは真中に両開きの扉をもち、ある程度まで左右対称の立面をもっていたはずである。しかしな

がら左右の端部では、痕跡の高さが異なることから考えて、何らかの操作がおこなれていたはずである。

ここでさらに、この部分の壁体を観察してみると、向かって左から順に盲窓、窓[図30]、扉[図31]となっている。しかし右端の扉は他の建設当初の扉とは、周囲のモールディングが異なるうえに、開口上部の台形のモールディングももたず、その上、壁体下部を回っているフリーズを不細工に切断してから扉左右の縁取りを下に延長した痕跡がある。これに対して中央の窓では逆に、このフリーズが窓台の部分で綺麗に欠落しており、欠落部分は彫刻のない石材で充填されている。さらにこれに対応する壁体、北側廊東端部北側壁体を見ると、左右が窓、中央が扉[図32]となっており、この扉は当初まで廻るものと思われる。

以上のことから、南側廊東端部南側壁体においても、当初は中央に扉が、左右に窓があり、ちょうど障壁の扉と壁体の扉が対応する位置にあったことがわかる。

次に南東ピア西側の床面にも様々な大きさの支柱の痕跡がある。これらはかなりの多様性をもって混沌と並んでいるが[図33]、何対かの痕跡は矩形に柵状の構造物があったことを推測させるものである。[図34]

またすでに平和の接吻との関連でふれたが、この教会堂の東南エクセドラの床面、至聖所の南側だったはずの部分に、紫の石材でできた円盤がはめ込まれている。

さらに東南エクセドラ部分で身廊と側廊の間の床面には段差がある。エクセドラを支える二本の支柱の間では、この段差部分でかなり激しく石が摩耗している。

これらのことを総合して多くの研究者は、南側の壁体とその手前の障壁のあいだの空間がメタトリーオンだとしている⁵³⁴⁾。また彼等の多くは、トリクリノスはこのメタトリーオンの外、つまり教会堂外にあったと考えている。一方、これに対してピア脇の痕跡は、6世紀の玉座の跡だと考える研究者が多い⁵³⁵⁾。

さてこのメタトリーオンと関連して第2巻第10章、四旬節第一月曜日には

「密かにメタトリーオンの階段を通過してギャラリーへ登る。」⁵³⁶⁾

という記述がある。また第28章の正統信仰の祝日の新次第には

「至聖所の脇とコンクの後ろの螺旋階段を通過してギャラリーに上り、メタトリーオンに入る」⁵³⁷⁾

とある。そして第2巻の総主教の選挙を主題とした二つの章⁵³⁸⁾には以下の記述がある。

「神聖な井戸の所に向いた階段を通過して、ギャラリーの東に向かって右の部分に上り、神聖な福音書の朗読を待つ。」⁵³⁹⁾

これら「メタトリーオンの階段」、「コンクの後ろの螺旋階段」、「神聖な井戸の所に向いた階段」が、それぞれ異なる三つの階段を指すとは考えにくく、何れもハギア・ソフィアの東南隅に位置していたと思

われることから、かつて建設当初にはあったであろう、南東隅の斜路、現存する北東隅のものに対応するもの、のことを指しているのではないかと想像される⁵⁴⁰⁾。

●神聖な井戸

『儀式について』を始めとする史料には、「神聖な井戸」と呼ばれる建築物がたびたび登場する。これは福音書の記述に登場する、キリストゆかりの井戸⁵⁴¹⁾の破片が聖遺物として納めてある堂のことで、建設年代は不明だが9世紀の初頭の史料には登場する。『儀式について』にはさらに、皇帝がハギア・ソフィアを訪れる際にこの堂を使用する様子が記録されている。

このうち最も目を引くものは大きな祭の後、皇帝が大宮殿に戻る際にこの建物による次第である。第1巻第1章ではメータトリーオンで食事を終えた皇帝の行動が、以下のように記録されている。

「その後、このプライポシトス達が総主教を案内し、(彼は)皇帝達と接吻し、神聖な井戸へと続く小さな扉へと彼等を送っていく。この扉の敷居のところ、皇帝達と総主教は立ち、プライポシトスとアルギュロスはこの扉の外に立つ。」⁵⁴²⁾

史料ではこのあと、皇帝が金をハギア・ソフィアの職員達に渡す様子が説明される。

これと同様な記述は復活祭に関する第9章にも見ることができる。しかしながら先に引用したように第9章での記述には、皇帝はメータトリーオンからトリクリノスを経て神聖な井戸の堂に向かうのである。上記のようにトリクリノスはメータトリーオンの外にあったと想像されている。少なくとも確実にいえることは、トリクリノスと神聖な井戸の堂の間に「小さな扉」があったことである。

さてつづく神聖な井戸の堂内での様子については以下のように記述されている。

「その後皇帝達は総主教と出て、神聖な井戸の中に吊った布の中に入る。そして総主教は彼等に冠を戴せる。戴冠の後、総主教の手から祝福、あるいは贈り物を受け取り、プライポシトスにこれを渡す。これを皇帝達に送った後、総主教は(油?)を塗り、皇帝達から献納品をお返しに受け取る。そして接吻をすると皇帝達は神聖な井戸の外に出る。」⁵⁴³⁾

復活祭など多くの祭日に関して類似の記録を見ることができ、皇帝はハギア・ソフィアの身廊ないし側廊から大宮殿に戻る際には、祭の規模、儀式の次第に関係なくこの堂を経由している。

そして神聖な井戸の堂でおこなわれる儀式は、基本的に総主教と皇帝とが別れを交わすものであるが、その内容は祭の大小などによっていくらかの違いがある。この中で特に目を引くものは、先に触れた第23章の生誕祭の場合である。他の大きな祭ではハギア・ソフィアの扉でおこなわれた儀式、皇帝が教会の人々に金を渡す動作、がここでは井戸の遺物の堂内でおこなわれることになっている。

また逆に皇帝がカルケーから神聖な井戸を通してハギア・ソフィアに行く際に、この堂によって井戸の

聖遺物を礼拝すること⁵⁴⁴⁾が知られている。このときさらに、神聖な井戸の堂の中で総主教の出迎えを受ける場合も多い。

「神聖な井戸のところまで進む。そこで蠟燭を点けて神聖な井戸に接吻する。総主教は彼と会って、神聖な井戸から大きな門を入り……」⁵⁴⁵⁾

マンゴによるとこのとき皇帝が通る経路は以下のようなものであった⁵⁴⁶⁾。カルケーには名前の由来となった大きな青銅の扉のほか小さな鉄の扉があった。これはカルケーから延びた細い通路の先に位置していた。皇帝はカルケーからこの鉄の扉まで進み、これを抜ける。するとこの扉は列柱をもった通路とつながっていて、これをさらに進むと神聖な井戸の堂に着くのである。

さらに一方で、皇帝が神聖な井戸を経てハギア・ソフィアに向かう際にも、遺物の堂と教会堂のあいだの扉が言及される。

「(皇帝は)ここ(神聖な井戸の堂)から教会へと続く門を通して入る。そこには総主教がいつもどおりの自分の部下達を従えて立っている。型通りに総主教は皇帝達に香を振り、皇帝達は彼に接吻する。そのあと、ペーマの右側の部分に向けて開いている門から入る。」⁵⁴⁷⁾

また同様に同じ史料の他の部分では

「神聖な井戸から大きな門を入り貴重な十字架に型通りに跪く。そして総主教は型通りに主人達に香をまき彼に接吻する。そのあとでそこに置かれた門を通してペーマの右側の部分に向かって入る。」⁵⁴⁸⁾

とある。これらのことを総合すると、先に述べた「小さな扉」がメータトリーオンとトリクリノス、言い換えればハギア・ソフィアの南側にあった可能性が高いのに対して、この「大きな門」はハギア・ソフィアの東側にあった可能性が高い。

またのちにふれるハギア・ソフィアの東側を通過していた聖ニコラオスの通路に関連して、以下の記述がある。

「聖ニコラオスを通して神聖な井戸へと続く大きな門へ向かって出る。この門の中に総主教と皇帝は立って、総主教は皇帝達に祝福、あるいは贈り物を渡し接吻する。皇帝達はそこで暇乞いをして、神聖な井戸を通る。」⁵⁴⁹⁾

マンゴはこの聖ニコラオスの通路の「大きな門」とハギア・ソフィアの「大きな門」は別であるとしている。後者は現在もある南側廊東端部東側壁体の扉であると、彼は考えている⁵⁵⁰⁾。この扉は現在、教会堂の東側の前室状の空間につづいている。この空間の南側にはミナレットが建っていて、すべてのちの時代に改築されている。また北側には扉が一つあり、小さな部屋がその奥にあるが、この部屋の北側の壁体ものちの時代のものと思われる。[図5、17、35]もしも当初の一角が、北東の隅の部分と対称形に造られていたとするならば、東の前室の南側には教会本体の東側の壁に添って通路が南に延び、前室と

通路とに接して、前述の斜路があったはずである。以上のことから、またこの斜路がたびたび「神聖な井戸の所に向けた階段」と言及されることから、マンゴは神聖な井戸を納めた堂は、この斜路の南側の何処かであって、「大きな門」によって教会堂東側、南側廊と、「小さな扉」によって教会堂南側、メータトリーオン外のトリクリノスと連絡していたと考えている。そしてそれとは別に聖ニコラオスの通路につづく「大きな門」と、カルケーから来る際に通る列柱のある通路につながる扉があったとしている。

この建物を堂と本稿ではしたが、マンゴによると実際にはテトラパイロンの様な形態の建物で、四方に大きな開口部があり、それぞれが上記の四つの扉に対応していた。しかしテトラパイロンは、通常、四方に路が延びる場合に交差点に設けられるものである。テトラパイロン状の建物の四方の開口部に、四つの扉が対応するという事は、マンゴの述べる四つの経路は、おそらく列柱廊が南に、「小さな扉」が西に、「大きな門」が北でそれぞれ対応し、神聖な井戸の西側で、北へ延びる聖ニコラオスの通路と連絡していたということなのであろう。

実際に『儀式について』に登場する表現は「(ハギア・ソフィアの堂内から)神聖な井戸へとつづく大きな門」、「(ハギア・ソフィアの堂内から)神聖な井戸へとつづく小さな扉」であって、「神聖な井戸の大きな門」、「神聖な井戸の小さな扉」ではない。また皇帝は「聖ニコラオスを通して神聖な井戸へと続く大きな門へ向かって」進むのであるから、マンゴが区別して考えている二つの「大きな門」が、異なる二つのものであるとする理由は何処にもない。

むしろ自然な解釈は以下のようなものであろう。テトラパイロン状の神聖な井戸の建物は、ハギア・ソフィアの南東、現在は失われた南東隅の斜路の南側にあった。ハギア・ソフィアのメータトリーオンの外側にはトリクリノスがあり、このトリクリノスから「小さな扉」を経て、この井戸の建物へと行くことができた。おそらくトリクリノスの外側の出入口が「小さな扉」であったと思われる。またハギア・ソフィアの南側廊の東端の扉を通っても、神聖な井戸へ行くことができた。この扉を出ると東側の前室にはいる。この前室の東端の扉を出ると、そこは聖ニコラオスの通路で、アプスの東を抜けて北へ行くことができる。逆から言うと、聖ニコラオスの通路から神聖な井戸へ入るときは、一旦この前室に入って、現在は失われた大聖堂の東壁沿いの通路を通して南に進み、神聖な井戸へと出るのである。ハギア・ソフィアの堂内から行くときも同様で、南側廊東端の扉から前室に入り、壁沿いの通路を南に進む。そして「大きな門」はこの一連の経路、おそらくは失われた通路の何処かにあったであろう扉、ないし扉に導かれた前室状の空間を指しているのである。

なおこの神聖な井戸を納めた堂内にはプレトロンと呼ばれる礼拝所が設けられていた。この中に前述の井戸の遺物の他、イエリコの喇叭、コンスタンティノス大帝の玉座、キリストのイコンなどが納められていた⁵⁵¹⁾。しかしながら皇帝が使用するカーテンに関しては、他の史料には記述がない。

最後に、今まで見てきた様々な場合から考えて、決して想像しえないことではないのだが、他に例を見ない次第として教会和解の祝日をあげることができる。参考までに該当箇所を引用しておく。

「皇帝は神聖な井戸に行き、そこで王冠を外す。そして彼を迎えた総主教との二人は聖エイレーネーに行く。」⁵⁵²⁾

おそらくこのとき皇帝は、カルケー、神聖な井戸、聖ニコラオスの通路、ハギア・エイレーエネーと進んだものと思われる。

4) 南ギャラリー

●木の階段：ギャラリーへ通じる廊下

さていくつかの祭日には、皇帝は直接、ハギア・ソフィアのギャラリーへ行くことになっている。例えば第22章の十字架挙栄祭に関する部分で、ハギア・ソフィアに向かう皇帝は

「マンナウラとその高い通路（ディアパティコン）を通り、木の階段を上って大教会（＝ハギア・ソフィア）のギャラリーに入る」⁵⁵³⁾

ことになっている。これとまったく同じ記述は、第28章の正統信仰の祝日に見ることができる⁵⁵⁴⁾。同様に皇帝がハギア・ソフィアのギャラリーに直接行く場合を探すと、第16章に「廊下を通して」⁵⁵⁵⁾とまた、第2巻第38章に「マンナウラと通路（ディアパティコン）を通して」⁵⁵⁶⁾との表現を見ることができる。

これらはマンゴによると皆同じものを指しており⁵⁵⁷⁾、先に述べたカルケの鉄の扉と連絡している列柱をもった通路の上ののっていた、屋根のある渡り廊下のことである。この廊下は片方ではおそらくマンナウラまで延びており、もう一方では引用部分に見られるように、木の階段でハギア・ソフィアのギャラリーに連絡していた。

この木の階段からギャラリーにはいる入口を、アントニアデスは南ギャラリー東端の壁体の北端の扉としている⁵⁵⁸⁾。このコンスタンティノス9世のモザイクの脇にある扉は現在、外に連絡するものがないが、当初の扉と考えられている。[図36、37、38]

●メタトリーオンとバラキュプティコン

この木の階段を上って、ハギア・ソフィアのギャラリー [図39] に入った皇帝は

「蠟燭を灯し祈ると、右側のバラキュプティコンに入る。その後、クーブークレイオンの高官達が着替え、クービクラーリオス達が自分達のカニシアだけをつけ、パトリキオス達が紫のクラニディオンを着る。すると皇帝はブライポシトスに総主教を呼ぶように命じる。皇帝は暫く腰を下ろしているが、出ると小さなセクレトンに行く。」⁵⁵⁹⁾

と『儀式について』の十字架挙栄祭の次第は述べている。シュトゥルーベは、このバラキュプティコンはアプスの南側、ギャラリー東端部にある小さなトンネル・ヴォールトのかかった空間で、カーテンによって仕切られていたとしている⁵⁶⁰⁾。

しかし同様に、木の階段からギャラリーへ行く正統信仰の祝日の次第では

「皇帝はギャラリーに入って祈ると、蠟燭を灯し、彼等（廷臣達）すべて規則に従い、白に着替える。行進が近づくと、合図を受けて、皇帝はギャラリーのメタトリーオンから出る。」⁵⁶¹⁾

となっており、今度はバラキュプティコンではなくメタトリーオンが言及されている。このギャラリーのメタトリーオンに関して、同じ正統信仰の日の新しい次第に以下の記述を見ることができる。

「メタトリーオンに入ると、自分のクラミュスだけ脱いで神の福音書と連禱を聴く。すべてがすむと食卓係がアルトクリネースと共に入り、招待者の表を書く。皇帝達は出ると総主教のメタトリーオンまで行き、そこに留まり自分のディベーターションを脱ぎ、神聖な典礼が終わって総主教が上ってくるのを待つ。」⁵⁶²⁾

ここでも先に言及したバラキュプティコンは登場しない。またここで言及されている総主教のメタトリーオンが、ハギア・ソフィアのギャラリーにあったものなのか、それとも総主教宮にあったものなのかは不明である⁵⁶³⁾。第2巻の総主教テオフュラクトス選出の記録では、メタトリーオンではなく「私室」が登場する。

「大教会のギャラリーに進み、仕来りに従って蠟燭を手に三回御辞儀をして神への感謝を表し、自分のディベーターションを変えて座った。そしていつもの通りにすべての儀式が終わると、皇帝達は立て、自分達のクラミュスをつけ、そこに吊ってあるカーテンの外に、その私室から出た。」⁵⁶⁴⁾

しかしこの「私室」は、蠟燭、着替え、礼拝など皇帝の行動から考えて、先のメタトリーオンと同じ空間を指すと考えることができる。このメタトリーオンは、先に述べたように木の階段を通って行くことから、南ギャラリー東端部に入ったところであると想定される。

また引用した様々な部分を比較すると、メタトリーオン内で皇帝は礼拝に参加している。そして同時に、通常のメタトリーオンの使用方法である着替えや打合せもおこなっている。このことから考えて、他の教会のようにバラキュプティコンとメタトリーオンという二つの独立した空間があるのではなく、メタトリーオンの中にバラキュプティコン的使用がなされる部分があると考えた方が、無理がない。

さて『儀式について』第9章の復活祭の記述では、皇后がこのギャラリーにあるメタトリーオンから出て玉座に腰を下ろし、女官達と平和の接吻をかわす様子が描写されている。『儀式について』において皇后の教会での行動が述べられている部分は他にはほとんどない。しかし他の史料から皇后は通常、ギャラリーから儀式に参加したことが知られている⁵⁶⁵⁾。しかしこの皇后のメタトリーオンが皇帝のそれと同じものなのか否かは不明である。

ここで現在のハギア・ソフィアの南ギャラリーに目を向けてみることにする。ここには、西南のピアとパトレスとの間にギャラリーを区切る形で壁体が挿入されている。[図40] この壁体は中央に開口部があり、左右の壁体に両開きの扉を模した彫刻が施されている。多くの研究者はこの彫刻を6世紀にまで遡るものと考えている⁵⁶⁶⁾。しかしこの障壁は、構成から見て二枚の転用材の板を左右に立てて、間に強引に戸口を付けたものとの印象を与える。メインストンは床面と壁面の状態から考えて、後世にこの障

壁は挿入されたものだと考えている。

またこの障壁の中央の出入口状の開口部には、時代は不明ではあるが、開口上部の下面には左右の端に一つつ円形の穴があり〔図41〕、対応する床面にはやはり両端に穴を埋めたと思われる痕跡がある。このことから障壁の開口部にはかつて、両開きの扉、ないしそれに類する形態のものがあったと思われる。

他にハギア・ソフィアの南ギャラリーに残された、堂内装置の痕跡らしいものとしては、南西バットレス・ピア西面に現存する、パライオロゴス朝時代のデエシスの前の床面の痕跡がある。〔図42、43〕ここでは二種類の太さの材の跡が床面に矩形に残されているが、そのうちの東西方向のものはデエシス三分の二ほどのところに立ち上がることになる。〔図44〕このことから考えて、この痕跡のもとになった障壁はおそらく、デエシスが描かれる以前のものであろう。

またこのデエシス脇の窓のパラベットは、明らかに他と意匠が異なっており転用材である可能性が高い。〔図45、46、47、48〕ここは以前は扉がついており外と連絡していたという可能性が、一つ考えられる。もしもかりにそうだとすれば、おそらくのちにふれる総主教宮と渡り廊下のような空間で連絡していたのではないだろうか。この場合、デエシス前にあったであろう障壁は、渡り廊下入口の前室的空間という性格をもつことになる。

史料からはすでに見てきたように、南ギャラリーの東側にメータトリーオンがあったことがわかっている。一方、我々が南ギャラリーに関して、これと関連づけて考えられるものは、ピアの間の障壁とデエシスの前の痕跡である。これについては『儀式について』の記述から考えて、二つの可能性が考えられる。

一つは、パラキュプティコン、皇帝のメータトリーオン、皇后のメータトリーオン、総主教のメータトリーオンなどの小空間が、南ギャラリーに並んでいたというものである。しかしここで問題になるのは、ハギア・ソフィアにあったかどうか定かではない総主教のメータトリーオンは別にしても、そのような様々な障壁の跡はハギア・ソフィアに見られない点である。またデエシス前の障壁の跡は、皇帝と皇后が同時に使うには小さすぎるように思われる。

もう一つの可能性は、障壁の東側の空間が広くメータトリーオンと呼ばれていて、その中にさらにパラキュプティコンなどの細かい区分があったというものである。この場合は、少なくとも皇后のメータトリーオンと皇帝のそれとは同じもので、廷臣達もこの中を利用したと考えることができるだろう。この場合問題になるのは、他にこのような巨大なメータトリーオンの例を見ることができない点である。

残念ながら現在手元にある情報では、これ以上の考察は無意味なように思われる。ただしピア間の障壁は、障壁としては他に例を見ない堅牢なものなので、時代が定かではないがギャラリーの使用方を考えるうえで重要な要素である。仮に10世紀にこの障壁があったとすればこの障壁よりも東側は、名称はさておき、特別な空間で、ここを利用できたのは皇帝、廷臣や高位聖職者など選ばれた人々のみだっただろう。

またこのギャラリーは、ミカエル3世の晩年から再びモザイクによるアイコンで飾られるようになった。デエシス等、現在みることのできるもの多くは、より後の時代に属するものである。しかしおそらく9世紀末には南ギャラリーの中央の二つのベイに、東側にバントクラトール、西側にペンテコストをモチーフにした、中央のキリストを使徒が放射状に取り囲む構成のモザイクが、天井のヴォールトに描かれるようになったはずである⁵⁶⁷⁾。このモザイクは二つとも19世紀まで残っていたが、後の時代にハギア・ソフィアを訪れた旅行者のスケッチ〔図49〕をみると、クロス・ヴォールトの天井に、ドームにより適応した円形の構図を、半ば強引に用いており、9世紀末にすでにある程度、この図像が確立していたことがわかりおもしろい。

さて以上に加えてギャラリーに関する記述で興味深いのは、たびたび宗教会議が開かれ、その会場にギャラリーが使用されたことである。ケーラーはこの会議場として使用された空間も、障壁の東側であったとしている⁵⁶⁸⁾。『儀式について』でも総主教の選挙について記録した第2巻第14章に、高位の聖職者達がハギア・ソフィアのギャラリーで、時期総主教候補について会合をもつことが記されている⁵⁶⁹⁾。しかしながらギャラリーの何処かは、方位も含めて記述されていない。

ギャラリーには他に「小さなセクレトン」があり、ここには「価値ある木」と表現されるキリストの十字架の遺物が保管されている。これは第2章の十字架崇拝祭の次第に登場する。記述によると「小さなセクレトン」を訪れて遺物に祈りを捧げた皇帝は、次に「大きなセクレトン」に行く。ここで行進用の蠟燭を持った元老院議員達が皇帝を出迎えて、彼等は先の聖遺物と共に大きな螺旋階段へ進むのである。これと類似の動作は第2章正統信仰の日の次第に見ることができる。この場合は行進用の蠟燭を持った元老院議員達は、「セクレトンの大トリクリノス」で皇帝を出迎えて大きな螺旋階段へと進むのである。これに関して、コルマクとホーキンスはこの二つの「セクレトン」は総主教宮殿の「セクレトン」で、どちらも現存しており、大きいほうはナルテックス南前室の上の部屋で、「小さなセクレトン」はその隣の西南の斜路の上の部屋であると考えている⁵⁷⁰⁾。〔図50〕

ビュザンツ時代、総主教が日常的に使用した建築物としては、総主教宮とトマイテースとがあり、総主教宮はハギア・ソフィアの西南に隣接して建っていた⁵⁷¹⁾。トマイテースに関しては総主教宮の附属施設なのか独立した建物なのか意見が別れているが、マンナウラとハギア・ソフィアの間、第二の総主教宮ともいべき形で建っていたとする、ギロンの説は大変興味深い。マンゴは文献史料から、先程の二つのセクレトンの西側に総主教宮の他の部屋がつづいていて、その中に螺旋階段があったと考えている。

この二つのセクレトンには、西ギャラリーの南端の扉から入ることができる。〔図51〕シュトゥルーベはこの西ギャラリーに関して、ハギア・ソフィアのなかでここだけトンネル・ヴォールトが使用され空

間的に独立性が高いこと、またここでのみベア・コラムが使用され中央部の床面装飾など独自の意匠が見られること、さらに当初の南ギャラリーと西ギャラリーの間にカーテンがあった可能性があること、などを指摘し当初西ギャラリーには総主教宮の前室としての機能があった可能性を指摘している⁵⁷²⁾。

もしも彼女のこのような機能が西ギャラリーにあったとするならば、先に述べた障壁とあわせて、ハギア・ソフィアの南ギャラリーにおいても、西ギャラリー、障壁の西（エクセドラの外側）、障壁の東という空間秩序が想定可能なのではないだろうか。だがこの障壁の年代が不明である以上、このような空間秩序が導入された時期も、いつの時代のことなのか不明である。

5) スケウオフルキオンと北側廊東部分

『儀式について』において、ハギア・ソフィアの北側廊やそれよりも北側の部分が登場するのは、第1巻第1章と第35章に記録されている聖大土曜日の次第である。この日の儀式の中心となるのは、一つにはすでに見て来たようにハギア・ソフィアの至聖所であるが、もう一つスケウオフィラキオンも重要な舞台となっている。

これに関して、第1章、第35章、それぞれに

「このペーマの左側の部分を通して、スケウオフィラキオンに入る。ここで皇帝達は聖なる宝物に香を焚き、ここの黄金の椅子に、総主教はここにある玉座に腰を下ろす。そして総主教は皇帝達に甘松と肉桂を渡す。スケウオフィラキオンのカルトゥーリオスが彼等に跪いた後で、総主教の祈りがおこなわれ、外に出るとシュンクレートス達に甘松を分配する。」⁵⁷³⁾

「(至聖所) 側面左側の部分を通して出て、スケウオフィラキオンへ行く。入ると蠟燭をつけて祈り、祈り終えるとすべての宝物に香を焚き、しばし総主教と席につく。それからクーブクリオンの者達と他の高官達が、入室の仕来りにしたがって入室し、宝物庫係から甘松を取る。」⁵⁷⁴⁾

との記述を見ることができる。これから明らかなように、当時のハギア・ソフィアのスケウオフルキオンは至聖所の「左側」、すなわち北側にあった。現在、ハギア・ソフィアの北東に円形平面のドームを戴く独立した建物があり、これがかつてのスケウオフルキオンと考えられている⁵⁷⁵⁾。[図52]

この建物は残念ながら内装が完全に失われている。[図53] 三層からなるその壁体は、一・二層目は石材とレンガが帯状に交互につまれているが、三層目はレンガのみで構築されている。また各開口部のアーチも下二層は一重だが、三層目では二重になっている。これら材料および構法の違いから、メインストーンは一、二層目を4世紀あるいは5世紀初めとし、三層目を6世紀としている。またディリムテキは一、二層目を5世紀としている。またこの一層目の調査の結果、現在の北側の入口は後世に開けられたもので、当初の入口は西側に、そして小さな入口が南側にもあったことも判明した⁵⁷⁶⁾。

スケウオフルキオンは祭具室のことであるが、同時にここに領聖に使用するパンと葡萄酒が保管されていた。また儀式の際にはここで用意された聖体を大聖入という形で、スケウオフルキオンから至聖所へと運ぶことがわかっている⁵⁷⁷⁾。

なおハギア・ソフィアの北側、このスケウオフルキオンの西側に、現存はしないが当時は洗礼堂があったことが知られている⁵⁷⁸⁾。これは現存する南側の洗礼堂に対して大洗礼堂と呼ばれており、皇族の子弟の洗礼式にも使用された⁵⁷⁹⁾。

さてスケウオフルキオンでの勤めを終えた皇帝は、第1章によると

「(スケウオフィラキオンから) 皇帝達は総主教と共に外に出て、ペーマの左側の部分を通り、聖ニコ

ラオスを通して神聖な井戸へと続く大きな門へ向かって出る。」⁵⁸⁰⁾

ことになっている。また第35章には以下のような記述を見ることができる。

「スケウオフィラキオンから外に出て、側廊のナルテックス、この大教会の女性輔祭達が仕来りにしたがって立つ場所、を通り、そしてペーアの左側の門を経て退出する。総主教は彼に祝福を贈る。それから二人はペーアの後ろの聖ニコラオスの細い通路を通して、神聖な井戸まで進む。」⁵⁸¹⁾

この二つの記述は微妙な食い違いがあるように見える。何よりも問題となるのは第35章の「側廊のナルテックス」の解釈である。これに関してタフトはスケウオフィラキオンの位置、教会堂の北東外部から西側の北側廊のナルテックスまで、わざわざ行くのは不自然であるとして、北側廊東端の入口の前室のことを差していると考えている⁵⁸²⁾。そして彼はこの部分を皇帝は、スケウオフィラキオンから北側廊を経て至聖所に戻り、その後、退出すると考えている⁵⁸³⁾。

次に気にかかる部分は第1章の「聖ニコラオス」であるが、これをヴォクトは「聖ニコラオスの通路」と考え、第35章に登場するものと同じもので、アプスの東側を通っていたとしている⁵⁸⁴⁾。当時ハギア・ソフィアのアプスの北東には、聖ニコラオスの教会⁵⁸⁵⁾あるいは礼拝所があったことが知られている⁵⁸⁶⁾。この通路について多くの研究者は、ハギア・ソフィアの東側にあった列柱をもつ通路で、『儀式について』の記述から北側廊東側の出入口と連絡し、神聖な井戸の堂の「大きな門」へと続いていた、と考えている⁵⁸⁷⁾。

以上のように見て行くと、第1章の記述と第35章の記述との間に、実は大きな矛盾はなく、皇帝はスケウオフィラキオンを出ると北側廊を経て至聖所に入り、それから聖ニコラオスの通路を経て神聖な井戸の堂へ行くことがわかる。

2-2 他の市内の教会

フォルム（コンスタンティノスのフォルム）と聖コンスタンティノスの礼拝所⁵⁸⁸⁾

イスタンブル旧市街の目抜き通りであるディヴァン・ヨルを走る市電にはチェンベルリタシュという停車場がある。このすぐ北側に停車場の名の由来となった、鑄割れを金属によって補強された六層の紫色の石材からなる円柱が、聳え立っている。[図54、55]これがかつてのコンスタンティノスの円柱で、コンスタンティノスのフォルムのあった場所を現在に伝える数少ないものの一つである。

この帝都の核ともいえるこのフォルムの中心にたつ記念柱について、7世紀に成立した『復活祭年代記』は以下のように述べている。

「彼（コンスタンティノス1世）はさらに、大きくてそのうえ非常に美しいフォルムを造り、その中央に称賛に値するターバイの紫の石でできた高い円柱を立てた。この柱の上には頭に光を戴せた巨大な自分自身の像をおいた。それはフリュギアから持ってきた青銅の像だった。同じ皇帝コンスタンティノスはローマから、いわゆるパッラディウム（パラス像）を持ってきて、フォルムの自分の像の柱の下に建てた。これはビュザンティウムの住人の間で言われていることである。」⁵⁸⁹⁾

沿革

コンスタンティノスのフォルムはメセーをミリオンから500m程西北に進んだところにあった。おそらく324から330年の間に建設されたようである。古典古代の市壁の外、いわゆるネクロポリスのあった場所で、コンスタンティヌスが市域を拡張した際に市内に取り込まれた。セプティミウス・セヴェルスのポルティコ（後のメセー、今のディヴァン・ヨル）と軸線を同じくする大洋に似せた楕円形をした広場、と伝えられるが正確な大きさは不明である。[図56、57]

このフォルムの周囲は二層の列柱が一重に囲み、東西の端にはアーチ状の門が、また北に元老院の議場があった。そしてこの広場の中央には、紫色の石材で造られた高さ30mを越える⁵⁹⁰⁾ コリント式の円柱が聳え立っていた。この円柱はコンスタンティノスの柱と呼ばれ、上に太陽神に似せたコンスタンティノス自身の像ののっており、また台座には皇帝コンスタンティノスを奉った礼拝所が設けられ、パラス像や真の十字架の断片が納められていた。この柱の建設は328年と思われる。

この柱はそれまでも度々地震と火災で被害を受けていたが、1105年に悪天候が引き金となって倒壊した。後の皇帝マニユエル・コムネノスは再建を命じたが、このときの工事で、石像を戴いた柱頭は大理石

製の十字架をのせたものに替えられた⁵⁹¹⁾。

ラテン帝国やオスマン帝国の征服にもこの柱は生き残ったが、16世紀の火災で被害を受け、柱身の補強工事がなされた。またこのときからチェンベルリタシュ(=焼けた柱)と呼ばれるようになった。17世紀には今度は地震による被害を受け、18世紀に台座が補強されて現在の形となった⁵⁹²⁾。

また単にフォロスと呼ばれ、コンスタンティノポリスの中で大変重要な位置にあったフォルム自体も、しかしオスマン朝時代になるとその意味も失われ、やがて本来の形は失われてしまった。

儀式

『儀式について』によると皇帝は、カルコプラティアの聖母教会と聖使徒教会に礼拝に行く際に、ここに立ち寄りて総主教と祈りを捧げる。このとき行なう動作について整理すると、以下のようになる⁵⁹³⁾。

皇帝は記念柱の基壇の上、障壁の右側の部分にもたれるようにする。元老院議員達は皇帝の右側の「柱の立っている所」の中に、侍従達は柱の基壇の右側一段低いところに位置する。他の人々はフォロスの中央、おそらくは基壇の外の左右に立つ。デーモス達は紫の円柱の前にある、元老院議員達のいる右側の「柱の立っている所」の外の小さな基壇を使用する。このような状態で総主教の到着を待つ。総主教が到着すると礼拝所内に入るのは、総主教、福音書と輔祭達、聖歌隊のうち、おそらくは選ばれたものだけで、他の聖職者達も一般の信徒と共に礼拝所に向かって左側の外に立ち、十字架は中央の門のそばの専用台の上に置かれる。そして連袴がおこなわれるが、礼拝所の左側に窓がありここから輔祭が、外に向かって祈りを唱える。

『儀式について』で言及されているフォロスでの儀式は聖母の生誕祭、復活祭の月曜日、受胎告知が四旬節第三週日曜日と重なったときの三つで、聖母の生誕祭の場合は礼拝で他の二つはいずれも連袴がおこなわれる。これについて『テュピコン』を見ると、連袴、礼拝、どちらをおこなうのか(あるいは両方とも、またはどちらもおこなわないのか)が厳密に区別されているが、『儀式について』における皇帝の動作に大きな違いはない。

また受胎告知が四旬節第三週日曜日と重なったときには但し書きがあり、天候が荒れた場合は⁵⁹⁴⁾ フォロスではなく、元老院の中央に移動式の机を設置して儀式をおこなったようである。

建築

すでに述べたようにコンスタンティノスのフォルムのうちで、現在までに残っているものはコンスタンティノスの円柱のみである。それもオスマン時代の補修工事によって大きく外見が変わっている。現在の円柱は、六層の円筒形の紫色の石材の上に大理石の柱頭がのる構成となっているが[図54、55]、オス

マン時代の補修によって柱台、柱礎、円筒形の石材一個分の柱身が石材によって覆い隠された。またビザンティン時代の柱の基壇は現在の地表面の下に埋まってしまっている。このため特に本論文において問題となる、基壇とそこにあったであろう礼拝所に関しては、現在のチェンベルリタシュ自体はあまり手掛かりとはならない。

18世紀の工事によって覆われてしまった部分に関しては、16世紀のベトルス・ギリウス⁵⁹⁵⁾を始めとする多くの旅行者が残した記録が手掛かりになる⁵⁹⁶⁾。コンスタンティノスの円柱に関する記述は、複数の記録の間で互いに食い違う点も時にはあるが、多くの場合以下のような特徴を持っている。全部で7段の円筒形の紫の石材からなる柱身は、コリント式をおもわせる柱礎の上に立っており、その下にはモールディングなどによって飾られた四角柱型の柱台がある。[図58]この柱台は数段のより大きなおそらくは正方形の基壇の上に乗っている。

この基壇は現在は完全に地中にあるが、第二次世界大戦前に柱とその周辺(ただし北側を除く)の発掘調査がおこなわれ、ある程度の様子がわかるようになった。しかし調査団の人間関係などに混乱があったせいもあり、残念ながらその成果は、現在イスタンブールのドイツ考古学研究所にあるマンブーリによる図面⁵⁹⁷⁾ [図59]と、彼の幾つかの短い報告以外⁵⁹⁸⁾ 発表されていない。

この調査の結果、円柱の下には最上段が約9m四方の4段の基壇があり、その中央に円柱が立っていることが判明した。この基壇には四隅に四角い上部構造物の痕跡があることから、マンブーリは14世紀の史料にあるように、円柱の柱台を囲むように四つのアーチのある建物が建っていたと復元している。

しかしながらこの建物が『儀式について』で言及されている聖コンスタンティノスの礼拝所であると仮定すると、基壇の上、礼拝所の前に皇帝や十字架が位置することはほぼ不可能になる。また礼拝所の左側の窓云々も意味をなさなくなる。このためマンゴはポルフェウロゲネトスの時代にあつては、このような構造物はまだ建設されておらず、発掘されなかった柱の北側に礼拝所が柱に隣接して建てられていたと考えている。[図60]確かに彼の復元案に従うと、『儀式について』の記述とは矛盾しなくなる。さらにこの礼拝堂についてマンゴは、8世紀に聖コンスタンティノス信仰が首都で盛んになった結果、建設され、12世紀の円柱の倒壊で破壊されたと考えている。

また『儀式について』に繰り返し登場する「柱の立っている所」⁵⁹⁹⁾も、何を指しているのか、具体的な位置と形態との確定が困難なものである。従来、この言葉に解釈として微妙な差はあるものの、記念柱の周囲の空間ということで多くの研究者の意見は一致していた。例えばライスケは柱の立っている基壇の所と解釈しており、ベリャエフは列柱ないしそれに類するもので囲まれていた記念柱の周囲の空間と考え、ヴォクトは柱の立っている所としているが、かなりの範囲まで拡大して解釈している。

これに対してマンゴはこの単語を複数の柱から構成されているものを差すと考え、記念柱の基壇から、

フォルムを貫いて西に延びる二列の列柱を想定している。〔図60〕そしてこの根拠として、記念柱の西側に一列の列柱の基礎が発見されたとの考古学上の報告をあげている。

確かにこの単語が複数の柱から構成される障壁のようなものを差し、記念柱の立っている所ではないとする彼の説は、文脈から考えても説得力を持っている。しかしこのキオノスタシアが二列の平行な列柱なのか、記念柱の基壇を囲む欄上のものなのかは、史料の記述からは判断することは出来ない。

聖使徒教会

沿革⁶⁰⁰⁾

この教会の歴史はコンスタンティノス1世にさかのぼるとされる。しかしコンスタンティノス創建と伝えられる、他の多くの教会と同様4世紀における状況については不明な点が多い。おそらく最も説得力のある説明の一つは、コンスタンティノス1世が自身の墓所として円形の霊廟を建設し、続くコンスタンティノス2世の時に聖ティモテウス、聖ルカ、聖アンドレアスの聖遺物を納めるようになって十字形平面をもつ本堂が献堂された、というものであろう⁶⁰¹⁾。

この十字型平面の建物は地震などの被害を受け、550年にユスティニアノス1世がまったく新しく五つのドームをもつ連続十字平面の教会堂を建設した。このときに新しく第二の霊廟も増築された。この第二の霊廟の建設にはコンスタンティノスの霊廟がすでに歴代皇帝の墓所として手狭になったため、新たに皇帝の墓所が必要となったという背景がある。この二つの霊廟は1028年まで帝室の墓所として使用された⁶⁰²⁾。

その後この教会堂は、バシレイオス1世によるモザイク画をふくむ大修復工事⁶⁰³⁾を、また12世紀にモザイクの修理を受けた。

オスマン・トルコによる征服の後、総主教座教会として使用されたが、1462年にモスク建設のため破壊され、総主教座はテオトコス・パンマカリストスへ移された。

建築

聖使徒教会の建築形態は、19世紀後半から多くの研究者が文献史料をもとに様々な考察を重ねてきた。戦後になると、もはや考えうる形態がすべて登場してしまった感もあり、ほとんどこのような試みはなされていない。それゆえ本稿では、シュトゥルーベが主だった復元案をまとめている⁶⁰⁴⁾ので、それをもとに簡単に触れるに留めたい⁶⁰⁵⁾。〔図61、62、63、64〕

文献史料の記述から以下のことがわかる。この教会堂は五つのペンデンティヴ・ドームを持つ連続十字形平面だった。また中央のドームのみに窓があり、各ドームそれぞれにピアが四本づつあって、各ドームの間はトンネル・ヴォールトによって繋がっていた。そして各ドームはそれぞれ四つのペンデンティヴと四つのトンネル・ヴォールトによって支持されていた。つまり中央部では周囲の空間に連続していく四つのトンネル・ヴォールトがペンデンティヴ・ドームを支持し、また四つの腕の部分では、中央部から延びたトンネル・ヴォールトと三面に立ち上がったトンネル・ヴォールトの様に奥行きが深いティンバナム上端部の大アーチが、ドームを支持していた。

この東西南北の腕部分にはそれぞれ周囲三方を廊が囲み、その上にはギャラリーがのっていた。この四つの腕部分にはそれぞれ、先の周囲の空間との間に各4本の円柱からなる列柱がたち、これはギャラリー部分も同様で、全体では二層になっていた。

至聖所に関しては十字形の交差部に位置しており、西西北を仕切る口字型の障壁と東側を区切る半円形の司祭席によって、他の部分と分けられていた。至聖所内の中央には祭壇が置かれ、北側に聖ヨアンネス・クリュストモス、南側に神学者聖グレゴリオス、祭壇の下に使徒達の遺骸が納められていた。

儀式

『儀式について』に聖使徒教会が登場するのは復活祭後の日曜日（第1巻第6章、第16章）、復活祭の月曜日（同第10章）、万聖人の日曜日（第2巻第7章）、聖コンスタンティノスの記念日（同第6章）、その他の場合（同第13章）である。このうちとくに重要なのは前章で見たように復活祭の月曜日⁶⁰⁶、万聖人の日曜日⁶⁰⁷、聖コンスタンティノスの記念日⁶⁰⁸である。またやはり前章で触れたように、復活祭の月曜日、復活祭後の日曜日、万聖人の日曜日は基本的に同じ次第に従っていると書かれているが、実際には復活祭の月曜日と万聖人の日曜日の教会内での儀式には大きな違いがあり、復活祭後の日曜日に関する具体的な記述は見られない。

聖使徒教会での儀式の前後に関してみていくと、復活祭の月曜日は皇帝も総主教もそれぞれ行進をとまなつて大教会からフォロスを経て聖使徒教会へ向かう。皇帝は馬で大宮殿へ戻るが途中、繰り返しデーモスの儀式がおこなわれる。復活祭後の日曜日は往路復路共に馬で皇帝は移動するが、少なくとも復路にはデーモスの儀式がおこなわれる。万聖人の日曜日は帰路、馬を使用することが書かれているが往きに関しては記述がない。おそらく復活祭後の日曜日に準ずるものとおもわれる。聖コンスタンティノスの記念日は、他の祭日とは異なり、聖使徒教会からポームヌ宮の聖コンスタンティノスの聖域へ行進すると見るべきであろう。なおちなみに、以上の祭日のうち小聖入に皇帝が参加するとの記述があるのは復活祭の月曜日のみである。

また宗教儀式の内容を見ても、復活祭の月曜日は、おそらく標準的なこの教会における儀礼を扱っており、聖使徒教会が儀式の中心となる。これに対して万聖人の日曜日は、聖使徒教会から万聖人の教会へ行進して万聖人教会で儀礼をおこなうことが記されており、儀式の中心は万聖人の教会である。しかしのちに詳しく見ていくように、この万聖人の教会は聖使徒教会の付属礼拝所の一つと考えることができそうである。第三の聖コンスタンティノスの記念日は、のちに触れるポームヌ宮殿の聖コンスタンティノスの教会が儀式の中心となり、聖使徒教会はそこにいたる行進の出発点にすぎない。

つまり以上三つの祭日の次第は、いずれもその性格を大きく異にし、『儀式について』で聖使徒教会の、

登場回数比較的多いにもかかわらず、ハギア・ソフィアとは異なり言及される場所があまり重複しないのである。そしてその理由の一つとして、この教会が本堂の内外に数多くの礼拝堂や墓所、付属屋を有していたことがあげられる。そこで本稿では、他の教会堂と共通部分の多い聖使徒教会堂本体とその設えについてまずみていき、そのあとで各礼拝所に関して考えることにする⁶⁰⁹。

教会堂本体に関しては復活祭の月曜日の記述が、おもに参考になる。このうち小聖入の記述から、この教会にも他の教会と同様、ナルテックスに皇帝のための椅子が用意され、皇帝は総主教と共にアンボ、ソレアを経て至聖所の神聖な扉へ進むことが、また領聖に関する部分の記述から、皇帝は他の教会でと同様にギャラリーから儀式に参加したことがわかる。

まず堂内、身廊部分を見ていくと、以外と情報が少ないことに気がつく。すでに述べたように聖使徒教会では教会堂中央の交差部分に至聖所があり、至聖所の手前にソレアとアンボが配置され、ハギア・ソフィアと同様、6世紀の典型的な堂内装置の構成になっていたと思われる。この至聖所内には聖ヨアンネス・クリュストモスと神学者聖グレゴリオスの墓があったことが記録されている。しかし他の史料に⁶¹⁰登場する、教会の名の由来となった使徒に関しては触れられていない。

次にギャラリーに関して考察する。ここでは問題となる点が二つある。一つ目は、ギャラリーに皇帝が上るのに使用したとされる「左の階段」の位置、もう一つは皇帝が儀式に参加した位置についてである。

ここで再び『儀式について』の記述を引用し整理してみる。

皇帝は小聖入の後に北側廊を通りナルテックスに出て、「そしてアトリウムの左の部分に向かって向きを変え」、階段の前で待っていた廷臣達の歓迎を受けて、彼等に先導され「この左の階段を通過して」ギャラリーに上る。

ギャラリーに上った皇帝は、家臣の開けたカーテンを「入ると右側の部分に立ち」儀式に参加する。また「至聖所の向かいに帝室の移動式祭壇」が設置される。

領聖の際に、帝室の移動式祭壇まで総主教が来ると、皇帝は侍従に先導されて「皇帝は進み出て、総主教の手から領聖を受け、右の布の向こうに入り」、廷臣達が領聖を受けるのを待つ。

儀式が終わると皇帝は「ギャラリーの前を通過して、中（内側の通路？）を通過して神に守られた宮殿に」行きその自分の部屋で総主教と会食をする。

そのあとで皇帝は部屋を出て、「ナルテックスのギャラリーを通過して、クーピクラーリオス達の持ち上げる布をくぐり、左側の先程上った螺旋階段を通過して」廷臣達の歓迎を受けた後、「出ると門で馬に乗り」帰路につく。

以上を文字通りに解釈すると以下ようになる。皇帝は北側廊からナルテックスを経てアトリウムに至

り、東から西へ移動している際の左、すなわち南側へ向かい、アトリウムの南側の階段を上る。おそらくこの階段は、ギャラリーとは西腕部分の南西隅で連絡していたはずである。この階段を出た皇帝が立つのは右側、すなわち西腕部分の南側廊のどこかである。祭壇が設置されるのは至聖所の向かい、すなわち同じ西側の西ギャラリーの中央となる。すると領聖後の皇帝の行動も自然な行為である。「宮殿」に行く経路は意味するところが不明だが、おそらくギャラリーの外側の通路を差していると思われる。帰路は「宮殿」からどうやって教会に戻るかが問題となるが、北ギャラリーの何処かに出る通路がもしも仮にあったとすれば、それを使い西ギャラリーを通過して南西隅の階段へ至ることになる。

しかし前後の記述を見てみると『儀式について』において「右」「左」は、教会内の部位を指す場合は皇帝の経路に対してではなく、「東に向かって」使用されることが多い。もしそう考えるならば「アトリウムの左の部分」は「アトリウムの東に向かって左の部分」、すなわち北側部分であり、「左の階段」は「東に向かって左の階段」、つまり北側の階段と見ることができる。すると北側の階段を上った皇帝は、おそらく北西の角からギャラリーに入り右へ行く。祭壇が置かれるのは西ギャラリーの中央であるから、これはおそらく西ギャラリーの南側か西腕部分の南ギャラリーの何処かであろう。「宮殿」に行く経路はやはりはっきりしないが、帰路ギャラリーの南側に「宮殿」から戻るとすれば、矛盾点は生じない。

これに対してシュトゥルーベは「東に向かって」に基づく「右」「左」の解釈をさらに推し進め、ギャラリーに出た皇帝が立つ「右側の部分」を南腕部分の南ギャラリーと解釈している。ここで問題になるのは「至聖所の向かい」に置かれる「帝室の移動式祭壇」だが、彼女はこれを南腕部分の南ギャラリーの中央、至聖所の真右と考えている。しかしこの解釈の仕方は、いささか強引な印象がぬぐい去れない。

ここでは二番目に紹介した解釈に従って考察を進めることにする。すると皇帝は領聖を受けたあとで、右側の布の中に入るようになっていく。このことから考えて、西側の腕部分のギャラリー南西隅にカーテンで区切られた、皇帝の休憩用の空間が用意されていたことがわかる。そして「ギャラリーの前を通過して、中（内側の通路？）を通過して」の解釈があいまいだが、「宮殿」へ連絡する通路がやはり、ギャラリーの南部分の何処かにはあったはずである。

さて次に教会堂の外に目を転じてみることにする。当時の他の教会と同様、教会の西正面、ナルテックスの前にアトリウムがあったことは第1巻第10章の記述から明らかである。しかし第2巻第13章には皇帝が「プロピュライアナルテックス」に用意された椅子に座り、秘書官（ミュスティコス）達の人垣の中で衣装を整えることが説明されている。このプロピュライアは字義的にはアトリウムのさらに西側にある、外からアトリウムに入る際に通過する建物とも考えられる。しかしシュトゥルーベは『儀式について』におけるこの単語の用法から考えて、ナルテックスとアトリウム間の空間、エクソナルテックスとらえるのが適当とみている⁶¹¹⁾。

このナルテックスにいたる経路として『儀式について』では、三通りの異なるものを見ることができる。まず第1巻第10章と第2巻第13章の、メセーから、おそらくアトリウムと、前述のプロピュライアを通過してナルテックスに入るものがある。これは皇帝がこの教会を訪れる際の最も一般的な経路だろう。次いで第2巻第6章に皇帝がポヌス宮から聖使徒教会に来る場合の経路が説明されている。

「水浴場の大きな門を通過してナルテックスに入る。そしてこのナルテックスで東に向かって左へ曲がり、その釣り下げられた布の中へ入る。」⁶¹²⁾

ここで問題となるのは「水浴場の大きな門」の位置である。聖使徒教会には付属の浴場があったことは他の文献史料からも明らかである⁶¹³⁾、その位置は不明である。シュトゥルーベは後に触れるようにポヌス宮の位置を、聖使徒教会の北側と考えているため、皇帝は北側からナルテックスに入り浴場も北側にあったとしている。

また同第7章の記述ではホーロギオンの位置が問題となる。

「皇帝達は聖使徒のホーロギオンへと通じる同じ教会の門で馬を下り、それからクーブクリオン達に先導されて指揮官の習慣によって右に曲がり、そして聖使徒⁶¹⁴⁾のナルテックスを通り・・・」⁶¹⁵⁾

このホーロギオンに関しては、同じ章に以下の記述もある。

皇帝はデーモス達の歓迎を受けつつ、「聖使徒のホーロギオンのところの扉から入り、続けて「聖使徒の側廊の扉から入り」る。通説で言われるように「側廊（ギュナイティケース）」が「北側廊」を指すのであれば、ホーロギオンも聖使徒教会の北側にあった可能性が高くなる。

またこれに関してシュトゥルーベは、前述の第10章の記述のうち、儀式が終わって帰る際に「北側の螺旋階段」をおりた皇帝が馬に乗る門が、「聖使徒のホーロギオンへと通じる同じ教会の門」と同じであると見え、ホーロギオンも教会堂の左側、すなわち北側にあると考えている⁶¹⁶⁾。

しかしこの第2巻第7章、万聖人の日曜日の場合、最初の注意書き⁶¹⁷⁾から考えて、宮殿から聖使徒教会までの経路は第1巻第10章の記述と同じと考えられる。つまり皇帝はメセーから聖使徒教会に進むことになるはずである。しかしメセーは聖使徒教会の南側を通過しており⁶¹⁸⁾、常識的には南から教会堂に向かってきて、アトリウムの北側にわざわざまわりこむ経路というのは疑問が残る。また引用部分にもあるように「聖使徒のホーロギオンへと通じる同じ教会の門」を通った皇帝は、右へ曲がってナルテックスに入るのであるから、この門は南側にあったと考へたほうが説得力があるように思われる。そうするとホーロギオンも南側にあったことになる。

次に教会に周囲にあったであろう様々な付属施設のうち、『儀式について』で言及されるもののみを見つめることにする。

聖コンスタンティノス

コンスタンティノスの霊廟をジャンンは聖コンスタンティノスに捧げられた教会の一種とみている。彼はこの建物について祭壇の左側にあつて本堂のギャラリーと階段で連絡していたとしている⁶¹⁹⁾。第1巻第10章の「至聖所の左横を通つて出て、聖コンスタンティノスの墓所へ」進む、あるいは第2巻第6章の「ペーマで東に向かつて左に向きを替え、墓所へ」行くといった『儀式について』の記述に基づく限り、この解釈は妥当のように見える。しかし多くの研究者は他の文献史料の記述から、コンスタンティノス1世の霊廟は教会堂の東側、教会の中心軸上に東腕部分と接続する形で配置されていたと考えている。おそらく『儀式について』のこれらの記述は単に、至聖所の北側の扉を通つて出る、ことを述べているに過ぎないとみるのが妥当であろう。

さてこの霊廟は11のニッチと一つの入口をもつ、疑似十二角形をした円形平面をしており、ドームを載っていたと考えられている。

この霊廟には第2巻第6章にも述べられているように、皇帝レオン6世、その皇后テオファノ、皇帝バシレイオス1世、コンスタンティノス1世等の棺が納められていた。『儀式について』第2巻第4章を始めとするビザンティン諸帝の墓所に関する記録を分析したグリエルソンの研究によると、この霊廟にはコンスタンティノス1世、コンスタンティオス2世、テオドシオス1世といった初期の皇帝達と5世紀後半の諸帝、そしてマケドニア朝の諸帝の棺が納められていた⁶²⁰⁾。

総主教メトディオスの館

ジャンンによると聖使徒教会内には847年6月14日に死んだ総主教メトディオスを偲ぶ礼拝所があり、第1巻第10章に言及のある「総主教ニケーフォロスとメトディオスの墓所」はこの礼拝所のことを指すそうである⁶²¹⁾。彼はこの礼拝所の位置に関してはコンスタンティノスの霊廟とユスティニアノスのそれとの間と考えている。また『テュピコン』によると⁶²²⁾、毎年6月14日にこの総主教の記念祭がおこなわれ、大教会から行進がフォロスを通つて聖使徒教会まで進み、総主教メトディオスの礼拝所で儀式がおこなわれた。

ユスティニアノスの霊廟

聖使徒教会にはもう一つ帝室の霊廟があつた。これは『儀式について』では第10章で一回触れられるだけであるが、ユスティニアノス1世がこの教会を新築した際に、自分の霊廟として建設したもので、教会堂の東北に位置し、北側の腕と連絡していたと考えられている。

この「ヘローン」と呼ばれる霊廟は、平面は四葉式ともいふべき、変形十字型で西側に入口があつた。

グリエルソンによると、この霊廟にはユスティニアノス1世の家族と、ヘラクリオス朝、イサウリア朝の諸帝が眠っていた⁶²³⁾。

万聖人

この教会は皇帝レオン6世によって死別した妻テオファノを偲ぶために、聖使徒教会の東側、故人に捧げられた教会の隣に造営され、のちに万聖人の教会として改装された。その後、1010年の地震で被害を受け、バシレイオス2世によって修理された。再び1296年の地震で倒壊し、修理はされたものの14世紀末には採石場と化してしまつていた⁶²⁴⁾。

この教会の建っていた位置についてダウニーは、聖使徒教会に平行する形で西北か西南かに並んで建てていたとしている⁶²⁵⁾。しかしシュトゥルベは以下に引用する『儀式について』第2巻第7章の記述から、この意見に異を唱えている⁶²⁶⁾。

「(聖使徒教会の) ペーマから出た皇帝達はプライボシトスから儀式用の蠟燭を受け取り、総主教と共に時を同じくして行進を万聖人(の礼拝所)に向かつておこなう。そして続く開帳の儀式を、言い換えれば更新の儀式を終えると、(万聖人の教会の) ペーマへ入場し、入り、仕来りに従つて、そしてそこから(皇帝達は) 東に向かつて右側の部分を抜けて、同じ教会の殉教者聖レオンの礼拝所へと行き、そこで蠟燭を手に三回礼拝をして神への感謝を示し、そしてすぐに総主教に挨拶をし彼に接吻する。そして総主教は万聖人(の至聖所)に入る。皇帝達はアプスのある至聖所を通つて、皇后聖テオファノの礼拝所へ入る。そこでクラニディオンを脱いで座り、聖なる福音書の朗読を待つ。神聖な福音書が朗読されるときにはこの礼拝所から出て、ペーマに向かつて吊つてある布の中に立って神聖な福音書を傾聴する。そして聖なる福音書が終わつたら再び聖テオファノの同じ礼拝所に入り、座つて招待者の表を用意する。そして黄金で縁取られたサギオンを身に纏うと、(皇帝は) 聖ヒュパティオスの礼拝所のナルテックスを通り、そしてその外へ続く中庭を通り、さらにそしてそこから木の階段を通るが、これは聖コンスタンティノスから聖使徒のギャラリーへと昇るもので、そこから聖使徒のギャラリーを通つて宮殿に入る。」⁶²⁷⁾

この記述内容を整理すると以下のようになる。

万聖人の教会の堂内右側に聖レオンの礼拝所がある。聖テオファノの礼拝所は万聖人の至聖所を経て行く。聖テオファノの礼拝所の側に聖ヒュパティオスの礼拝所がありその側にコンスタンティノスの霊廟がある。

コンスタンティノスの霊廟は聖使徒教会の東側である。それゆゑに万聖人、聖テオファノ、聖ヒュパティオスといった一連の建築物は、聖使徒教会の東側、少なくとも南北の腕の東側にあるはずである。

また第2巻の第6章には、皇帝が聖使徒教会から「万聖人のアプスの屋外」を経てポームス宮殿に向か

うことが記されている。シュトゥルーベは基本的にポータス宮殿の位置を、聖使徒教会の北側に隣接していたと考えているため、自動的に万聖人の教会も聖使徒教会の北側にあることになる。それゆえに彼女は、聖使徒教会の北東、ユスティニアノスの霊廟のとなりに一連の万聖人教会堂群があったと結論付けている。

実際にはのちに改めて触れるように、ポータス宮殿の位置は正確には不明である。確かに宮殿自体は聖使徒教会の北ないし東にあったと思われる。また『儀式について』の記述にも繰り返し、「宮殿」が教会に隣接していたと思わせる記述がある。しかしここにはポータス宮という明確な表現は見当たらない。先のギャラリーに関して考察した部分でも述べたように、この「宮殿」は聖使徒教会の南部分と連絡していたと考えるのが自然である。しかしながら『儀式について』の記述から考えて、考えられる可能性は二つしかない。万聖人礼拝所群とポータス宮が聖使徒教会の北東にあるのか、南東にあるのかである。ここでは聖使徒教会の南側から通路がポータス宮へつづいていたと考え、シュトゥルーベの説に従うが、疑問点が残る説だと言わざるを得ない。

さてこの万聖人の教会堂に関しては、以上のこと以外にあまり語ることはない。史料には具体的な建築形態を伝える記述は、見いだせない。もともと皇后の慰霊堂であったことから、また聖使徒教会の北東にユスティニアノスの霊廟と隣接してあったと思われることから、規模としては決して大きくはなかったと思われる。また堂内に聖レオンの礼拝所があったことから、ある程度空間が分節化されていた可能性が高い。それゆえに建設年代から考えて、内接十字型平面の教会堂が蓋然性が高いが、あくまで推測の域をでない。

聖レオン

ジャンンやシュトゥルーベは先に見た記述から、この礼拝所は万聖人の堂内東部分にあったと考えている⁶²⁸⁾。しかしそれ以上のことは、この礼拝所に関してわかってはいない。

聖テオファノ

聖テオファノは皇帝レオン6世の最初の妃で、893年に死んだ。ジャンンによると⁶²⁹⁾ 聖使徒教会にこの皇后を祭った聖域は二つあり、一つはレオン6世による教会堂で教会本堂の東側に、もう一つはコンスタンティノス7世による礼拝所でコンスタンティノスの霊廟の近くにあったそうである。ダウンニーはこの聖テオファノの教会堂が、のちに万聖人の教会に改装されたとしている⁶³⁰⁾。それゆえに『儀式について』で登場するのはコンスタンティノスによる礼拝所の方である。

先に述べたようにこの建物は、『儀式について』第2巻第7章の記述から、万聖人の教会の堂内から、同じ教会の円形の祭壇のある空間、すなわちアプスの至聖所を通過していくことがわかる。つまり万聖人の

東側にあることにある。

この礼拝所内での皇帝の行動に関して、『儀式について』からの先の引用部分から実際には、聖テオファノに捧げられた礼拝所でありながらも、皇帝はこの空間を休憩や会食の打合せなど、あたかも控え室のような機能で使用していたことがわかる。しかしながら、この礼拝所の正確な位置や建築形態に関しては不明である。

聖ヒュパティオス

ジャンン、シュトゥルーベ共に、先に触れた『儀式について』の記述から、この礼拝所はコンスタンティノスの霊廟の近くにあつて、ナルテックスをもっていたとしている⁶³¹⁾。このことから礼拝所でも、比較的独立性の高い建物が想定される。しかしながら詳細なことは何もわかっていない。

まとめ

この聖使徒教会は現存せず、また発掘調査もおこなわれていない。ただいくつかの部材が発見されてイスタンブールの考古博物館に展示されている⁶³²⁾。[図65、66]エフェソスの聖イオアーネスやヴェネツィアの聖マルコの原形となったとされる、教会堂の当時の有様は想像力に頼るしかない。

『儀式について』の記述からは以下のことがわかる。

- 1) アトリウムの北西に螺旋階段があったこと。
- 2) ギャラリーの南側に皇帝用のカーテンで仕切られた空間があった。
- 3) ギャラリーの南側に「宮殿」へとつづく通路が連絡していたこと。
- 4) ギャラリーからコンスタンティノスの霊廟を経て外にでる木造の階段があった。
- 5) 万聖人の教会を中心とする一連の礼拝所群が、聖使徒教会の北東にあり、その向こうにポータス宮があった。

この教会、あるいは教会が含まれていたであろう宮殿に関して、我々が利用できる材料は絶望的なほど限られている。まずポーヌス宮については、ロマノス1世によって同名の貯水池の近くに建設されたことが、史料の伝えているほとんどすべてである⁶³³⁾。このポーヌス貯水池は7世紀にパトリキオスだったポーヌスによって、聖使徒教会の北東の何処か、コンスタンティノスの市壁の近くに建設されたことが知られている⁶³⁴⁾。しかしながらこの宮殿の位置は特定されていないし、また当然ながら遺構も発見されていない。シュトゥルペは前節で触れたように、聖使徒教会に関する『儀式について』の記述に、繰り返し登場する「宮殿」をポーヌス宮と考え、ポーヌス宮が聖使徒教会の北側の何処かにあると考えている⁶³⁵⁾。しかし彼女自身述べているように、ポーヌス宮から聖使徒教会へ行く途中に通る「クセーロケーピオンの聖ヨアンネス（教会）へと続く道」の位置が不明なため、それ以上の考察は不可能である。

またポーヌス宮殿の教会に関して、具体的な考察を進めていく手掛かりとなる史料は、5月21日の聖コンスタンティノス大帝の記念日について説明した、『儀式について』の第2巻第6章以外にはほとんどない⁶³⁶⁾。『儀式について』のこの部分からわかることは以下の通りである⁶³⁷⁾。

おそらく聖コンスタンティノスの教会は宮殿の前庭に面していた。そしてこの教会には聖コンスタンティノスの至聖所と聖ヘレネの至聖所の二つがあり、聖コンスタンティノスの至聖所には銀のキポリオンがあった。また聖コンスタンティノスの至聖所の左外、段の上に聖コンスタンティノスの大十字架が立っていた。

さてこれらの記述では二つの至聖所の位置関係や大きさについて、具体的なことは何も述べられていない。また十字架が保管されていた場所についても、聖コンスタンティノスの至聖所の「左から出た」ところ、としか記されておらず、明確な位置関係は明らかではない。つまり同時代の教会建築の遺構を念頭においたときに、数ある平面の中からこの記述の条件を満たすものを特定するには、上記の情報量ではまったく不十分である。換言すれば残念ながら、これらの記述から具体的な建築物の形態を想像することは、ほぼ不可能と思われる。

『コンスタンティノポリスのパトリア』と呼ばれる、この都市に関する様々な物語を集めた10世紀の通俗的な文書は以下のように述べている。

「カルコブラティアの神聖なソロス（＝聖遺物を入れた箱を納めた堂）は、教会の本堂（バシリカのこと）の修理もしたユスティノス（2世）とソフィアによって、建てられた。・・・そこには聖母の神聖なガードルとエステース（＝チュニック）がおかれており、聖なるオモフォリオン（＝ローブ／ヴェール）はブラケルナイにある。」⁶³⁸⁾

カルコブラティアの聖母教会は、帝都で人々の信仰を最も集めた教会の一つであった。またハギア・ソフィア、ハギア・エイレーネーと同一の組織によって運営されていたこの教会は、帝都の最も古い地区の一角にあり、市内、無数にあった聖母の教会のなかでも、古い歴史と高い格式を持っていた。

沿革⁶³⁹⁾

この教会の創建については文献史料において、既に食い違いが見られる。6世紀の年代記作者、読経者テオドロスやレオン・グラマティコスにはテオドシウス2世の姉妹ブルケリアを、ユスティニアノスの新勅法はレオン1世の妻ヴェリナを創建者としている。また9世紀初頭のテオファネスはテオドシウス2世を創建者としながら、別の箇所でもユスティノス2世を創建者にあげている。しかしながらこの教会のある地区が、もともとはシナゴグをふくむユダヤ人居住地区であった、という点で多くの史料は一致を見ている。いずれにせよ、カルコブラティアという言葉が「銅市場」を意味すること、から考えても、この地区が以前ユダヤ人居住地だったとの記述は信憑性が高いものと思われる。

この史料上の混乱のため、研究者の解釈もまちまちである。マンゴはテオドシウス2世がユダヤ人を追い出し、聖母の教会を建てた、としながらも、ブルケリアあるいはヴェリナの命による可能性も否定してはいない。一方、ミュラー＝ヴィナーは、5世紀中頃、ブルケリアとマルキオス帝によって創建されたが、476年に大火により焼失、その後ヴェリナによって再建されたと考えている。これに対してジャンはブルケリアのもとで着工され、ヴェリナの時代に竣工したと解釈している。

その後この教会は532年に、ハギア・ソフィア、ハギア・エイレーネー改築のため総主教座教会として使用されたが、6世紀中頃、地震により損傷を受けたものと思われる。このためユスティノス2世によって修理、改修工事がおこなわれ、聖母の教会と連結した使徒ヤコボスの教会とソロス（聖母の遺物の保管堂）が新たに建設された。そして聖母のガードルや聖イノケンスの聖遺物はまとめてソロスに保管されたが、その正確な時期については不明である。

9世紀中頃、この複合施設にバシレイオス1世による修理、拡張がなされた。この工事は教会の窓を採光改善のために改修し、教会の裏に学校を教会本堂と連続した形で設立したものであった。

この後カルコブラティアの聖域は、13世紀にラテン帝国支配下でフランク人の管理下におかれた。この間に聖母のガードルは西方へと奪われた。そしてその後、聖遺物は再びコンスタンティノポリスに戻されたが、ここではなくブラケルナイの聖母の教会に保管された。また聖シメオン・テオドコスをはじめとする他の聖遺物は、カルコブラティアからペリプレブス修道院へと移された⁶⁴⁰⁾。このため一部の研究者は、帝都の回復以後、この教会が機能を失ったとの見方をしている。しかし13世紀末から14世紀初頭にかけて、改修工事が行われた可能性を指摘する学者もいる。またパライオロゴス朝時代のフレスコ画の存在⁶⁴¹⁾から、14世紀にこの教会が、たとえ往時の壮麗さを失ったとしても未だなお宗教施設として、機能していたことは明らかである。

そしてオスマン・トルコ征服後の1484年、このカルコブラティアの聖母の教会はモスクに改装され、教会としての機能を完全に失った。

儀式⁶⁴²⁾

『儀式について』では聖母の生誕祭⁶⁴³⁾と受胎告知が四旬節第三週日曜日と重なったとき⁶⁴⁴⁾に関する記述にカルコブラティアの聖母教会が登場する。この二つの儀式を比較してみると以下のことがわかる。

ナルテックスには皇帝用の椅子が用意されている。そして教会の身廊には通常と同様ソレア、ペーマ、祭壇といった装置があり、側廊も儀式に使用される。小聖入に関する記述は二つの祭日にほぼ同じであり、至聖所の祭壇に献納品を納めたあと、皇帝は「至聖所の左側の部分」を通って側廊に入り、聖遺物を納めた箱が安置されている堂、ソロスへと向かう。このことからソロスは教会堂の北側にあったと想像される。また聖母の生誕祭の記述から、左側の、つまり北側の側廊と聖遺物を納めた神聖な箱のある堂との間には、トロピケーと呼ばれるトンネル・ヴォールトを持つ通路状の空間があったことがわかる。

このソロスという堂にも至聖所があり、その中にも祭壇がある。そしておそらくこの祭壇の上に聖遺物の箱が安置されている。さらに左側にもう一つ礼拝堂があり、ここにも祭壇がある。このことも両方の次第に等しく記載されている。

聖母の誕生日には皇帝は、先に述べたトロピケーという空間から儀式に参加する。これは受胎告知のときも「風がある」場合は同じである。このトロピケーに関して興味深いのは、聖母生誕祭の記述に、儀式後、総主教がトロピケーで皇帝に戴冠することが記されている点である。皇帝はカーテンなどで仕切られた空間で、冠を付けたり外したりするのが普通だが、そのようなものに関する記述はない。また昇天祭の

記述などから、カーテンなどの設備がないところで皇帝が冠を付けたり外したりする場合は、宦官達が皇帝の回りに人垣を作って外から見えないようにすることがわかる⁶⁴⁵⁾が、そのような動作も言及されない。これらのことから考えて、このトロピケーと側廊の間にカーテンが吊るされていたものと思われる。『儀式について』の記述によれば、このトロピケーの中に入るのは皇帝と宦官(クープクリオン)、それに聖職者なので、カーテンの位置はこれで問題はない。なおこれと関連して、称号を持った高官達は北側廊、トロピケーの前に待機して、トロピケーから出る皇帝に歓呼することから、北側廊がトロピケーの前室的性格を持っていたことがわかる。

これに対して通常の受胎告知の日には、皇帝はギャラリーを使用する。教会堂北側廊に木の階段があって、これは上るとギャラリーと連絡している。皇帝はこの階段を上ってギャラリーへ行き、聖体礼儀に参加する。ギャラリーにはメータトーリオンがあると記述されているが、皇帝が儀式に参加する場所もメータトーリオンの位置も具体的には説明されていない。北側廊の階段が使用されるのであるから、北ギャラリーから儀式に参加するとみることできるが、逆に北ギャラリーは階段があるので前室的に使用され、儀式の中心は西あるいは南ギャラリーであるとも考えることも可能であろう。

また同じ章の記述から、北側の側廊は学校に繋がっており、この学校のコンクの段を下りるとポルティコへ続く門があったこともわかる。

建築⁶⁴⁶⁾

この聖域には三つの教会があったことが知られている。それぞれ、聖母(バシリカ式の本堂)、キリスト(アンティフォネーテース)、そして『無名のイギリス人巡礼者の記録』がアトリウムにあると伝えた使徒聖ヤコブス(と聖ザカリアス)の教会である。また教会本堂の左側に教会と繋がって、聖母のガードル等の聖遺物を納めるための円形の堂(ソロス)があった。そしてさらにこの堂の左に、もう一つの祭壇があった。

文献史料のトポグラフィカルな記述を調べることで、オスマン朝時代に⁶⁴⁷⁾アジェム・アー・メスジディと呼ばれたモスクが、この教会であると同定された。[図67、68、69、70]戦後この建物の調査が行われ、バシリカ式建築の教会本堂の現状と、それに附属する八角形平面の集中式の建物の存在が明らかになった。[図71]

このバシリカ式教会堂が、この聖域で中心的存在だった聖母の教会である。この遺構は煉瓦造による三廊式バシリカで、アプスは外壁が多角形、ギャラリー、ナルテックス、アトリウム、さらにはアプス前に小さな十字型平面のクリプタを有していた。つまりこの教会堂はストゥーディオス修道院のハギオス・ヨアンネス教会によく似たバシリカ式教会堂だったのである。[図72、73]

そして床面の発掘では身廊と南側廊を分ける列柱の基礎の真中あたりに、方形の部分が身廊に突き出しているのが発見された。発掘に参加したクライスはこの基礎の一部をピアの基礎と見なし、当初バシリカ式教会としてこの建物は建設されたが、後の時代にドームがかけられ、ドームド・バシリカに改造されたと考えた。[図72] 彼の説によると、この工事はバシレイオス1世によっておこなわれた。史料には彼が教会堂に窓を付け足したとあるが、この際に教会本堂自体がドームを戴くように改造されたことになる。そしてジャンンやマシューズも、この説に賛成している。

だがこの仮説にも問題点がないわけではない。コンスタンティノス・ポルフログネトスの10世紀中頃の記述には、この教会がバシリカ式だとの記述がある⁶⁴⁸⁾。ジャンンはこれに対して、上部構造は異なっても平面形態がバシリカ式だと解釈している。またミュラー＝ヴィーナーはむしろクリアストーリーの窓を改修したと考えがっているようである。現実的には、バシリカ式教会堂特有の二層の列柱とその上のクリアストーリーという内部立面を、ピアとティンバナム、ペンデンティヴからなるドームド・バシリカのそれに改装するのは、かなりの難工事であったはずで、この点からはミュラー＝ヴィーナーの説も説得力を持つように思われるが、本稿では通説に従うことにする。

またこの教会堂の南側廊東端に戸口の痕跡があり、その先に列柱廊の遺構があった。このことから、マンブーリーはこれがハギア・ソフィアにつながる通路だったとしている。マシューズはこれを、受胎告知の祭日に皇帝が教会から退出する際にもちいるポルティコへの通路であると考えている。

またアトリウムの北側に、集中式の建物のニッチが四つある八角形の基礎が発見された。この建物は東西におそらく戸口を持っており、バシリカ式の教会と同時期の建物と思われる。

ここでクライスの報告と文字史料をつきあわせてみると、当然のことながら、アトリウムの脇の八角堂は何なのかという疑問が生じる。

発掘にあたったクライス自身は、八角堂の中央に巨大なピアがあることから、他の類似の建築から考えて、これを上階にあつたであろう洗礼盤を支えるための物と見なし、この堂を洗礼堂であったと結論付けている。また洗礼盤もこの遺構から発掘されたため、この説は説得力を持つように思われた。さらに彼は、この堂はアトリウムにはないから聖ヤコブスではないとしている。

クラウトハイマーはこの建物は一層ないし二層の上部構造を持っており、洗礼堂かマルティリウムのいずれかであるとみている。

ここで文字史料からわかることを整理すると以下のようになる。前述の聖母のバシリカ、キリストの教会、聖ヤコブスの教会、ソロスの四つの堂が言及されている。また『儀式について』の記述から、「聖なる箱」を納めたソロスはバシリカの北側側廊に直結していたことがわかり、八角堂がソロスであったと考えることは非常に困難である。また同じ史料は、ソロスの左側に無名の第三の禮拜堂があったと伝えてい

る。ジャンンはこれが、聖ヤコブスを祀っていた可能性を指摘している。しかし洗礼堂の存在は、まったく報告されていない。

マンゴはこれらを踏まえて、八角堂の基礎部分に発見されたパライオロゴス期のフレスコ画の断片、「東方三博士の礼拝」と「ザカリアスの殉教」に着目した。また『無名のイギリス人巡礼者の記録』が、この教会の外のアトリウムには使徒聖ヤコブスの教会があり、このクリプタには主の兄弟聖ヤコブス、主の預言者ザカリアスの聖遺物がある、と伝えていることから、この八角堂を聖ヤコブスの礼拝堂であったとしている。

以上のことから10世紀のカルコプラティアの聖域を再現してみると、以下ようになる。アトリウムとナルテックスをもった聖母の教会が、この複合施設の中心である。この教会堂はH字型のギャラリーと側廊を持っており、おそらくはドームド・バシリカである。北ギャラリーと北側廊とは木製の階段で連絡されていて、ギャラリーには皇帝用のメータトーリオンがある。そしてこの建物の南側廊東端からは、列柱を持った通路がハギア・ソフィアの方に延びている。また反対側の北側廊には、二本の柱とアーチを持った開口部があり、ここを抜けると聖母の遺物が納められた円形の堂に入る。そしてこの円堂のさらに北に連続してもう一つ礼拝所がある。またアトリウムの北側に八角形の堂が、その他にも小礼拝堂が、そして教会の裏には学校がある。

ブラケルナイの聖母教会⁶⁴⁹⁾

「そこから我々はブラケルナイの聖なる神の母の教会へと行った。そこには（聖母の）ローブとガードルトと、かつて彼女の頭上にあった杯が納められている。それらは至聖所の祭壇の上に、主の受難の遺物と同じ様に、箱に封されて納められている。しかし更に安全に鉄で覆われている。箱は石で大変芸術的に造られていて、我等罪人はそれに接吻した。」⁶⁵⁰⁾

ブラケルナイとは本来、「泉」を意味していたと考えられている。実際この聖域には有名な泉があり、皇帝も沐浴に訪れた。しかしそれ以上にこのブラケルナイの聖母教会を有名にしていたのはその聖遺物であった。とくに聖母のローブは帝都を敵の手から守る神秘的な力があると信じられており、様々な奇跡が伝えられている。またそれを踏まえた行為も、たびたび記録のなかに見受けられる⁶⁵¹⁾。

沿革

この教会の創建に関して多くの史料は、マルキアノス帝の皇后ブルケリアによるものという点で一致している。それ故に創建年代は、マルキアノスの即位した450年からブルケリアの死ぬ453年2月までの間という、比較的短い期間に限定されることになる。そして多くの研究者も、これを定説と見ている。

473年、コンスタンティノポリスにパレスティナから聖母の服がもたらされた。これを納めるために、レオン1世は円形の礼拝堂を建設した。この聖遺物はソナラスによれば銀の箱に入れて堂に納められたために、この堂のことをハギア・ソロス（神聖な箱）と呼ぶようになった⁶⁵²⁾。

そして6世紀初めに皇帝ユスティノス1世のもとで、この教会は改築され、さらに6世紀後半にユスティノス2世によって、再び改築された。

また612年5月1日にヘラクリオス帝は勅令を出し、この教会とハギア・ソフィアの聖職者数の上限を定めている。そしてその数は司祭12、輔祭18、女輔祭6、副輔祭8、説教師20、聖歌手4、扉係6となっている。

その後、イコン破壊運動期には本教会も同運動の標的とされ、一時は倉庫として使用されたりもした。このため内装も変更されたが、正統信仰復活後は再び壮麗に飾られるようになった。

1070年にこのブラケルナイの聖母教会は火災で焼失してしまうが、直後には再建工事が始まり、遅くとも1077年には完成したようである。

この教会もやはり1204年にラテン帝国が成立したときに、カトリックの教会に改装されたが、再征服後すぐに正教会に復帰した。

この教会の最後は帝国が減じるよりも早く、1434年に火災により焼失し、その後再建されることはな

かった。よってこの教会は現存していない。

ベトルス・ギリウスはブラケルナイについて、第六の丘と金角湾の間、幅800歩にみえない平地にこの教会の基礎と泉があることを記録している⁶⁵³⁾。ちなみに第六の丘はコンスタンティノポリスの北西の端にある丘のことである。

またジャンンはこれについて、皇帝が沐浴に使った泉水の聖像は今でもアイヴァンサライ地区（テオドシオスの市壁に沿った内側一番北の一角）にあると述べている。

儀式⁶⁵⁴⁾

ブラケルナイの聖母教会はコンスタンティノポリスの宗教儀式全体のなかでも大きな地位を占めていた。また隣接してブラケルナイ宮があったことから、帝室の宗教儀式のなかでも重要な位置にあった。

皇帝がこの教会を使用するのは年三回、進堂祭、聖大金曜日、聖母就寝祭の祭日、それに加えて皇帝は望んだときにこの教会で沐浴をしたことが知られている。『儀式について』の記述のうち、建築物に関して興味深い言及がなされているのは、進堂祭と沐浴に関する部分である。聖母就寝祭は、すでに前章で見たように記述の中心がブラケルナイ宮で、聖母教会に関しては進堂祭以上の情報は得られない。聖大金曜日は記述が簡単すぎてあまり参考にはならない。

まず進堂祭に関する記述⁶⁵⁵⁾からは以下のことがわかる。

ブラケルナイ宮のアナスタシアコスというトリクリノスからダニュービオスというトリクリノスを通り、門を出るとポルティコがある。このポルティコの所は歓迎の儀式がおこなえるくらいの広さがあり、その外に列柱が斜めに配置されている。ここで皇帝は総主教を出迎える。

ここから先程のポルティコを通過して教会のナルテックスへ行くことができる。このナルテックスには、皇帝用の椅子がある。また中央の門の左側にはベンチがある。さらにおそらくナルテックスは、ギャラリーへ昇る階段室と隣接し連絡していた。

加えて皇帝の沐浴⁶⁵⁶⁾に関する記述からは次のようなことがわかる。

まず皇帝が到着するときに、門の外、皇帝の通り路の右側のところで元老院議員が皇帝を出迎え、左側には皇帝の椅子が置かれることから、たびたび言及されているナルテックスの皇帝の椅子も仮設のものと思われる。続いてこの教会のプロピュリアで聖職者が出迎える。このプロピュリアが教会堂のアトリウムの西側の空間を指すのか、ナルテックスの前室を指すのかは不明だが、他の教会での例から考えて、ナルテックスの前室と思われる。

教会の室内にはアンボ、ソレア、テンブロン、至聖所、祭壇といった装置があることが、進堂祭の記述からわかる。またこの祭日には皇帝がギャラリーを使用するが、ここには大きな十字架、それに礼拝所が

あり、その奥には皇帝の私室があり⁶⁵⁷⁾、この礼拝所から皇帝は儀式に参加し領聖を受ける。のちにふれるが、これらの空間はソロスから離れていないところにあったと、進堂祭の記述から想像されるため、おそらく南ギャラリーの一角を占めていたと思われる。

ブラケルナイを有名にしていた聖母のローブをいれた箱を納めた堂、いわゆるソロスについては以下のことがわかる。第2巻の沐浴に関する記述は、この堂の至聖所と祭壇に言及している。またペーマの右側にエビスケプシスと呼ばれる部分があり、ここに聖遺物を納めた箱があったと考えられている。さらに記述には聖母のアイコンと銀で出来た十字架が安置されたメータトーリキオン、皇帝が礼拝に用いるメータトーリオンが出てくる。これらの位置は定かではないがおそらくソロスの内部が隣接して建っていたと思われる。

進堂祭の次第の領聖につづく部分では、皇帝が教会堂のギャラリーの礼拝所や私室のある部分から、ソロスのトリクリノスを經由して、煉瓦の通路と螺旋階段を通りダヌーピオスのトリクリノスに入ることが説明される。また同じ章の進堂祭が四旬節の月曜日と重なった場合⁶⁵⁸⁾の記述から、ソロスのギャラリーにバラキュプティオンがあり、皇帝はバラキュプティオン、本堂ギャラリーの礼拝所、十字架と蠟燭をともして歩くことから、ソロスと本堂はギャラリーの階で連絡していたことがわかる。

このソロスと教会堂の位置関係については、沐浴に関する記述で、元老院議員達が「ペーマの東に向かって右側の部分」とスケウオフルキオンを通り、神聖な箱の堂のナルテックスに移動するとなっている。このことから神聖な箱を納めた堂は教会本堂の右側奥、言い換えれば南東にあることがわかる。

なお余談になるが、このスケウオフルキオンが堂内のある空間を指すのか、それとも独立した建物を指すのかは不明であるが、タフトは聖母教会本堂南側に、ハギア・ソフィアのそれと同様に独立して建っていたと考えている⁶⁵⁹⁾。

そして沐浴の記述には、ナルテックスから階段を上って水浴場に行くことが記されている。しかしこのナルテックスが聖母の教会堂のものか、聖遺物の堂のものかは不明である。つづく部分は以下のことを述べている。水浴場にはドームがかかかっていて、更衣室、神聖な洗い場、聖フォティノスの礼拝所がある。また東のコンクの中に聖母の銀のアイコンが、その左に聖母の手のレリーフがある。

建築

ブラケルナイには宮殿、聖母の教会、聖母の聖遺物を入れた箱を納めた堂（ハギア・ソロス）、皇帝が沐浴をした水浴場などが互いに隣り合って建っていた。

『儀式について』の記述から聖母教会の右奥からソロスに行けることがわかる。このソロスは円堂でギャラリーを持っていた。おそらくソロスは聖堂の東南にあったはずである。ちなみに両者はは身廊レベルだ

けでなく、ギャラリーでも繋がっていた。なおクラウトハイマーはこれをマルティリウムの一環としている⁶⁶⁰⁾。

またこのソロスのギャラリーから宮殿のダヌーピオスの間に抜ける通路があり、階段を二回上ることから考えて、ダヌーピオスのトリクリノスは教会よりも高い所にあった。このトリクリノスはアナスタシアコスと呼ばれる他のトリクリノスとヨセフィアコスのポルティコで繋がっていた。またこのブラケルナイ宮には、もう一つオケアノスというトリクリノスがあった⁶⁶¹⁾。

そして先ほどのソロスのそばに水浴場があり、このドームを持った建物は、おそらくソロスのナルテックスと連絡していた。

さてこれらのなかで最も規模が大きかった建物は聖母教会だったと思われるが、この教会の建築上の形態は何回か変わっている。

最初のレオンの建物に関しては、殆ど不明である。しかしジャンンはバシリカ式の教会堂と見なしており、状況証拠から考えてこの説は妥当な意見のように思われる⁶⁶²⁾。

次のユスティノス1世のものは、より複雑な形態をしていたようである。

「しかしここでは、前述のように、ビュザンティウムの教会について記すべきであろう。彼（ユスティニアノス1世）は聖母の教会の一つを、市壁の外ブラケルナイと呼ばれる場所に建設した。皇帝の業績からいえば、この教会は彼の叔父ユスティノス（1世）の建造物に数えられるべきであるが、ユスティニアノスは叔父の治世から既に自身の権威をもって政府を統括していた。この教会は海に面しており、大変神聖かつ荘厳な教会で、尋常ならざる奥行と、さらに奥行にたいして均整のとれた幅を持っており、上の部分も下の部分も、ともに他ならぬパロス島の大理石の石材が柱として立てられ、それによって支えられていた。中央を除く他の部分では、これらの柱は直線上に配置されていたが、そこでは柱は後退して（外側に半円形に張り出して）いた。この教会に入るものは誰でも、特にあたりを支配している不安定さのかけらもない全体の偉大さに、そして悪趣味から解き放たれた壮大さに驚愕することだろう。」⁶⁶³⁾

上に引用したプロコピオスの記述や、教会のアプスにあった銘文が⁶⁶⁴⁾、ユスティノス1世の建設工事の内容を知る手掛かりとなる。

クラウトハイマーはユスティノス1世による工事を、完全な新築と考えている。彼はこの建築物を、ストゥーディオス修道院のバシリカやカルコプラティアの聖母教会に似た二層のバシリカ式教会堂と考え、帝都におけるバシリカ式教会の最後の例の一つとみなしている⁶⁶⁵⁾。マンゴも同様にバシリカ式で再建したととらえている。これに対してジャンンは、この工事は改修工事で、ドームを追加するためのものだったと考えている。

ここで問題になるのは、プロコピオスの文章の解釈である。引用した部分の前半をみる限り、確かにこ

の教会は二層からなるバシリカ式教会堂のようである。しかし続く部分の「後退している」列柱は、いかに解釈したらよいのだろうか。それも中央部分で「後退している」のである。バシリカ式教会で左右の列柱が中央のところを外側に膨らんでいる、という例は少なくとも現存遺構のなかには見あたらない。

ジャンンはこの列柱が中央部分で外側に膨らんでいるという記述から、上にドームがかかっていたと考えている。しかしプロコピオスの記述のように柱が外側に膨らんでいるだけでは、ドームを支えるには構造的に不十分で、石造あるいは煉瓦造のドームを支えるには絶対に少なくとも四本のピアが必要になる。もしもそのような構造体が教会の中央部分にあったとすると、他の部分に見られるプロコピオスの記述から考えて、何か一言あってしかるべきであろう⁶⁶⁶⁾。なおこの場合は、常識的にはユスティノス1世の工事は改修工事ではなく再建工事とみるべきである。

おそらく一つの可能性として考えられるのは、東側内陣部分にドームを設け左右、あるいは南北はエクセドラを配したが、東側にはなおさらに数本分の列柱が延びていた、という構成であろう。ちなみにプロコピオスの記述において「後退している」列柱とは、エクセドラを指す場合がほとんどである。

もう一つの可能性として、この「後退している」を字義通りにとらえ、交差廊があったとみることもできるかも知れない。だが帝都では、交差廊を持つバシリカ式教会堂は、一般的からは程遠い存在であった。

以上の様々な考察から、結局、一つの結論を導きだすことは困難である。本稿においては、単にバシリカ式ないしそれに準じる形態とだけしておくことにする。

ユスティノス2世による次の改修工事に関して、9世紀初頭に書かれたテオファネスの年代記はこう語っている。

「皇帝はまた、ブラケルナイの神聖なる神の母の教会に南に一つ、北に一つ、系二つのアプスを増築し、言うなれば教会を大きくそして十字形にした。」⁶⁶⁷⁾

同様な記述は他の史料にもみることができる。例えば11世紀にレオン・グラマティコスが編纂した歴史書はいかのように述べている。

「だがまたブラケルナイの二つの半ドームを、教会が十字形になるように追加したのもこの人物（ユスティノス2世）で、内部は様々な色彩の柱と大理石によって更に美しくした。」⁶⁶⁸⁾

この工事をジャンンは記述の最後の部分から、袖廊を付け加えて十字型平面に改造するものと考えている。これに対してクラウトハイマーはトレフォイル・トランセプト、つまり三葉式平面の建築物を考え、同時期に改築されたベツレヘムの生誕教会のような形態ではないかと想像している。〔図74、75〕またブラケルナイの教会がベツレヘムのそれに影響を与えた可能性については明言をさけている⁶⁶⁹⁾。

さて次の11世紀の工事後の教会に形態に関しては二つの説がある。ジャンンは以前の形態に基づいて再建されたと考えているが、マジェスカはギャラリー付の三廊式バシリカに変更されたとしている。しか

し1402年にティムール大帝を訪れるために大使として派遣されたルイ・ゴンザレス・デ・クラヴィホは、彼の旅行記『ティムール大帝の物語』⁶⁷⁰⁾のなかで以下のように述べている。

「・・・本体は三つの廊からなり、中央のものが最大で、より大きくより高く、二つの他のものはより低く、ギャラリーを備えており、そしてそのギャラリーはより大きな廊の上をわたっている・・・（中略）・・・より大きな廊の天井は大変豊かで立方体の木材と木製の梁からなっており、立方体と梁とは非常に上質の金で金箔が押されている・・・」

この記述をみる限りでは、15世紀初頭に聖母教会は明らかに三廊式のバシリカでΠ字型のギャラリーを有し、木造の天井を持っていた。この三廊式バシリカ、Π字型ギャラリー、木造天井は典型的な5ないし6世紀のバシリカ式教会の構成要素である。これらを有するという事は、ユスティノス1世の建築の西側身廊部分は、同2世の東部分の工事、1070年の火災を経てもなお、建設当初のまま残っていたのだろうか。いずれにせよ11世紀コンスタンティノポリスの教会建築、それも最も権威ある教会の一つと考えると、この形態が11世紀に新しく計画されたものとは到底考えられない。おそらく部材的には不明だが、少なくとも計画は6世紀の建築から引き継いだものであろう。

しかしこのように考えてくると、逆に6世紀の状態について疑問が生じてくる。木造小屋組天井の身廊に石造ドームの内陣という組み合わせは、いかにも不自然ではないだろうか。おそらくそれまでのヴォールト天井が、11世紀の火災で損傷を受け、木造の屋根にかえられた、というのが納得のいく説明ではないだろうか。

以上をまとめると以下のことが確認できる。10世紀当時のブラケルナイの聖母教会は、西半分の身廊部分がギャラリーを有する三廊式のバシリカで、屋根はトンネル・ヴォールト、東半分はトレフォイル・トランセプトというベツレヘムの生誕教会か、あるいはケルンのカピートルの聖マリア教会の様な形態で、内陣上にはドーム架構を持つ。聖母教会の東南にはソロスという円形二層の聖遺物堂があって、至聖所脇とギャラリーとで両者は連絡している。この円堂はナルテックスを有し、そしてギャラリーにはバラキエプティコンとトリクリノスがある。またソロスは宮殿とギャラリーで、水浴場とナルテックスで連絡している。一方、本堂にはギャラリーとナルテックスをつなぐ階段室があり、南ギャラリーには皇帝用の私室と礼拝所がある。

なお最後にこの教会に関しては、キエフのイシドロスの不思議な記述が残されている⁶⁷¹⁾。この聖母の教会は、彼の測量によると幅が68(21.1m)ビュザンティン・フィート、奥行きが146ビュザンティン・フィート(45.3m)で、テッサロニキのアケイロポイエトスと呼ばれる聖母の教会は、同様に測ったところ幅53ビュザンティン・フィート(16.4m)だったそうである。ところが実際には、アケイロポイエトスの幅は含側廊：28.3m 身廊：14m である。これに合わせて(53byz.ft.=14mつまり

1 byz.ft.= 0.26mと考えると)ブラケルナイの大きさを計算すると、奥行き:38.6m 幅:18m となる。もしもトレフォイル・トランセプトを持つ教会堂ならばこの数値はどちらも不自然な数値ではない。またより単純な三廊式バシリカには後者の方が適当であろう。ちなみにもし53byz.ft.=28.3mと考えると、1 byz.ft.=0.54mとなり、ブラケルナイの聖母教会も奥行き90m、幅36mとなり、どちらもまず考えられない数値となる。

ペーゲーの聖母修道院⁶⁷²⁾

この教会についてプロコピオスは以下のように述べている。

「これら両方の教会は、ともに市壁の外に建てられた。一つ(=ブラケルナイ)は海岸の側、市壁の始まる所に、そして今一つ(=ペーゲー)は黄金門の側にであり、言ってみれば、図らずも防衛用の線の両端である。これは恐らく、二つの教会が街の周囲を囲んだ壁の見えざる護り手として機能するようにとのことだろう。」⁶⁷³⁾

しかし教会堂の持つ神秘的な力という点からすると、むしろ次に引用する記録の方がこの教会の性格を正しく伝えている。

「『泉の側の』と呼ばれる聖母の教会は、ユスティニアヌス大帝によって建てられた。というのも、彼がトラキアへ狩りに行く時に、未だ小さな礼拝堂だったこの地の教会へ群衆が来るのを見て、あれは何なのか訊ねた。するとストラテegos、マギストロスそして宝物庫の役人が答えた。「治癒の泉でございます、陛下。」そこで皇帝はしばし戸惑った後、ハギア・ソフィアで余った材料で大きく美しい教会を建てねばならないと決心した。」⁶⁷⁴⁾

「ペーゲー」とは文字通り「泉」の意味である。この修道院は泉水のそばに建てられた礼拝所から始まったと、いくつかの史料は伝えている。かなり早い段階から、泉の綺麗な水と周囲の風景の絵画的な美しさが、訪れるものを魅了してきたようである。そして10世紀には、この泉の水は人々の病を癒す力があると考えられるようになり、それ以降は様々な奇跡の中心としても、信仰の対象になった。

沿革

この教会の創建者は、伝説上、レオン1世とされることが多い。しかしながら多くの、より信頼に値する記録は、この教会をユスティニアヌス1世により建設されたとしている。この教会はペーゲーの修道院の中心であり、ペーゲーの修道院は設立当初から帝室修道院とでもいうべき、帝室との深い繋がりを持っていた⁶⁷⁵⁾。このため市壁の外という立地条件もあってたびたび損傷をこうむったにもかかわらず、そのつど修理を受けている。

最初は626年のアヴァール人による略奪で、のちにすぐ修理された。

その後、時期ははっきりとしないが地震による被害を受けた。これは800年前後に皇后エイレーネーによって修理され、この時、彼女とその息子コンスタンティノス6世を描いたモザイクで飾られた。

また869年の地震で再度損傷をうけ、バシレイオス1世によって修理され、一連のモザイク画と礼拝堂が加えられた。また続くレオン6世もナルテックスを改修し装飾を加え、聖アンナの礼拝堂を建設した。

しかし924年にブルガル人の皇帝シメオンがコンスタンティノポリス郊外に侵攻した際に兵火によって焼失したが、927年にはすでにこの教会で皇族の結婚式がおこなわれている。それゆえブルガル人の来襲による被害は比較的軽いものであったか、その直後に再建されたと考えられている。

また1204年からは、ラテン帝国支配下でカトリックの修道院として使用された。そして年代は定かではないが、13世紀末には正教会の修道院として再び機能し始めたようである。

1422年、市の近郊を支配したオスマン・トルコは、この教会を破壊した。しかし神聖な泉に対する人々の信仰は篤く、18世紀には教会も、建築的にはまったく新しいものではあるが、再建されて今日に至っている。

儀式⁶⁷⁶⁾

前章で見たようにこの教会で皇帝が宗教儀式に参加するのは、昇天祭のときである。この行事に関しては輔祭レオンが残した記録に以下のような部分がある。

「(967年) 皇帝(ニケフォロス2世フォカス)は昇天祭の日に伝統に従い、市壁の外にある所謂泉を行進を伴って訪れた……この壮麗な神殿は聖母のために建てられたものである。」⁶⁷⁷⁾

この日の皇帝の行動に関しては前章で見たように『儀式について』に詳細な記述がある⁶⁷⁸⁾。ここから以下のことわかる。

この教会にはアトリウムがあり、おそらく通常のものと同様、方形の平面に列柱廊をもっていたと思われる。ここから教会の外の道へ通じる門が開いていた。この門では皇帝が最初に到着したときにヌーメロス監獄長官が、皇帝が総主教を迎えに出るときに青党長官(=スコラ工軍団長官)と緑党長官(=エクスキュービトス軍団長官)が皇帝を歓迎した。

アトリウム中央の扉からナルテックスに入ると、おそらくは仮設の皇帝専用の玉座があった。そこから皇帝の門を通過して身廊へ入ると、通常の教会のしつらえ、アンボ、ソレア、至聖所、祭壇があり、至聖所とソレアは神聖な扉で繋がっていた。

そしてアトリウム右側の扉から入ると階段があった。この階段はギャラリーへと繋がっていて、そこには手前から順に「狭いトリクリノス」、「小さなメーターリオン(メーターリオン)」、「(皇帝の)自分の私室」があった。この「自分の私室」は皇帝の休憩と着替えに使用されたようである。また皇帝は儀式に「通例通りの場所」から参加したとされるが、この場所は不明である。シュトゥルーベはこれを領聖を受ける場所と同じと考えトリクリノスの手前としている⁶⁷⁹⁾。

そして「狭いトリクリノス」では、ミサの前に「自分の私室」を出て総主教を迎えに行く皇帝を、ストラテゴス達とパトリキオス達が歓迎する儀式がおこなわれた。また聖体礼儀のあとで総主教と皇帝が会食

をするのもこの部屋である。このときアトリウムに集まったデーモス達の歓声が、トリクリノスで聞こえることと、領聖の際にトリクリノスの門の前に携帯用の祭壇をおき、廷臣達はそこで領聖を受けたことから考えて、このトリクリノスは西ギャラリーにあった可能性が高い。

建築

ペーゲーは現在のバルクル地区で、テオドシオスの市壁の外、当時のペーゲー門、今のシリヴリ・カブから暫く行ったところである。

この修道院には聖母の教会堂のほか、三つの礼拝堂があったことが知られている。

このうち、聖母の教会堂に関しては、残念ながらあまり有効な手掛かりが残っていない。最も有名なものはニケフォロス・カリストス・クサントブーロスの『教会史』の記述⁶⁸⁰⁾であるが、これは14世紀のものでジャンナは当時の教会の状態を描写したと考えている。この史料からは以下のことがわかる。

泉は地表面よりも掘り下げられたところにあり、この周囲を建物で覆い、泉の上に屋根がかかっていた。堂は方形をしていたが、長さが幅より1/3長かった。この泉のある部屋は四方をアーチ⁶⁸¹⁾で囲まれていたが、東西のアーチは空中に浮いており、南北では壁体の上に乗っていた。

泉の上にはドームがかかっていてその周囲に窓があり、そしてこのドームはペンデンティヴで支えられていた。このドームの周囲には、豊かに装飾されたより低いドーム(ヴォールト)がかかった部分があった。

天井は金箔をおしたガラス・モザイク、壁面は大理石板によって装飾されていた。

建物の中央から若干西によったところに泉があって、その周囲は方形に一段低くなっていた。またそこに降りる階段があり、沐浴をしたり水をくんだりできるようになっていた。さらに教会を二分するかのようには溝が掘られていて、泉から出た水が至聖所までながれていた。

さてこの教会に関するもう一つの重要な史料は、『泉のそばの聖母の神聖な聖域について』⁶⁸²⁾といい10世紀に成立したと考えられている。この史料においても、いくつかの興味深い記述を見ることができる。以下にそれをまとめてみる。

この教会はユースティニアノス1世が泉の水によって腎臓の病から回復したため、聖母への感謝をあらわすために創建された。この建築は四つの大きなアーチと一つの大きなドームで構成されていた。

しかし後の時代にドームが落ち、これをバシレイオス1世が修理した。彼はドームの落ちた建築を基礎まで壊したうえで、さらに規模を拡大して新しい教会を建てようとしたが、廷臣達に反対されたため、崩れ落ちた部分のみ(おそらくペンデンティヴよりも上の部分)を修理することにした。

ここでクサントブーロスの記述を見てみると、やはり東西では大アーチ、南北ではティンバナムによ

て支えられたペンデンティヴ・ドームを上部構造とする、長方形の平面の建築物が想像される。これは10世紀の教会堂で一般的だった内接十字型平面の教会というよりは、6世紀のドーム・バシリカを連想させる。このことから924年の火災と1204年の改宗事件は建築物の基本的な形態に影響を及ぼさなかった、と仮定することはできないだろうか。

ここではこの仮説にのっとって上の二つの史料と、おそらくは9世紀の建築を念頭において書かれたであろう『儀式について』を突き合わせて、記述を比較し建築形態について考えてみる。

まずこの教会はアトリウム、ナルテックスを有しており、ナルテックスの右側に階段室があった。教会堂本体は身廊が長方形平面をしていて、その上に東西の大アーチと南北のティンバナムが支えるペンデンティヴ・ドームがかかっていた。そしておそらくΠ字型のギャラリーを持っていて、西ギャラリーには「狭いトリクリノス」、「小さなメータトーリオン（メータトーリキオン）」、「（皇帝の）自分の私室」と呼ばれる一連の区切られた空間があった。このギャラリーか、あるいは側廊の天井にはドーミカル・ヴォールトが使用されていた。そして身廊の中央には一段低く掘り下げられた部分があり、その中に泉水があってそこから水路が至聖所の方へ延びていた。

言い換えるならば、ペーゲーの聖母教会は泉水を覆う形で建てられた、ドーム・バシリカであったと結論付けることができる。

ハギオイ・セルギオス・カイ・バッコス修道院

沿革⁶⁸³⁾

この教会の内部の柱頭にはユスティニアノスとテオドラのモノグラムが彫られている。またエンタブラチャーの銘文には皇帝ユスティニアノス1世と皇后テオドラが創建者として登場する。そして修士パウロスが使徒ペトロスとパウロス、殉教者セルギオスとバッコスの修道院の責任者であるとする536年の記録がある。これらの事実からハギオス・セルギオス・カイ・バッコスの完成年代はユスティノスが即位した527年から536年の間ということで、研究者の間の意見はほぼ一致している。また同様の理由により、施主が時の皇帝ユスティニアノス1世と皇后テオドラというのも、異論のないところである。

しかし教会の建設目的に関しては、クラウトハイマーが唱え、後にほぼ通説となったホルミスダス宮の付属礼拝堂と考えるもの⁶⁸⁴⁾、マンゴの主張する、テオドラによって単性派修道僧のための修道院として建設されたとするもの⁶⁸⁵⁾があり、どちらも決め手を欠いている。

建設の動機はさておき、おそくとも536年には、この教会は修道院の一部として機能していた。またホルミスダス宮には単性論者達が皇后テオドラの保護を受けて住んでいたのは、536年前後から548年までである。つまり6世紀中頃以降は、この教会は正統派の修道院として機能していた。

この修道院はイコン破壊運動の際にはイコン破壊派の中心として、盛んに政治活動をおこなったことで知られる。なお正統信仰復活後の880年、ローマ教皇に譲渡されたとの説がある。また867年以降のある時期にバシレイオス1世によって修理されたようである。これ以降この修道院は、あまり記録に登場しなくなる。しかし重要な聖遺物、聖セルギオスと聖バッコスの頭を持っていたため、巡礼者によって賑わったと想像される。

そしてオスマン・トルコ征服後、16世紀初頭ベヤジット2世の時代にフセイン・アーによってモスクに改装され、北側の彼自身の霊廟や前庭が整備された。さらに18世紀中頃、内装が改装され、また同時にミナレットが追加された。1870年には南側に鉄道が開通し、修道院の他の遺構が破壊された。

そしてこの建物は現在では、その形態から「キュチュック・アヤソフィア（小ハギア・ソフィア）」と呼ばれている。

儀式⁶⁸⁶⁾

『儀式について』の記述から、皇帝は復活祭の火曜日にこの教会を訪問し儀式に参加することがわかる⁶⁸⁷⁾。彼はまず大宮殿から「古い部屋（アセークレーティオン）」を通り、「聖セルギオスの神殿」のギャラリーに入る。そして至聖所の向い側、皇帝の門の上で祈る。またギャラリーには聖母の礼拝所も

あり、そこでも礼拝する。

しかし皇帝が通常、聖体礼儀に参加するのは「至聖所のバラキユンプティコン」である。そして彼は礼拝堂で領聖を受けると、外に出てメータトーリオンに入る。

一方、廷臣達は至聖所の向い皇帝の門の上の拱帯用の祭壇（アンティミシオン）で領聖を受ける。

ちなみにギャラリーからトリクリノスへ下りることができる。

ここで問題になるのは「至聖所のバラキユンプティコン」である。シュトゥルーベはこれを、明言はしていないが、ギャラリーの南側、最も至聖所に近い部分と考えているようである。その根拠は、他の教会では南ないし西ギャラリーに類似の設備がある場合が多いからである。また『儀式について』には「至聖所のバラキユンプティコン」に関する記述の前後には、皇帝が「上る」、「下りる」といった表現はまったくなく、だからこの設備は字義通りに至聖所にあるのではなく、ギャラリーにあったと考えるのが妥当であり、その意味でもシュトゥルーベの仮定は適切であるように思われる。

建築⁶⁸⁸⁾

プロコピオスの記述から、この教会はハギオス・ペトロス・カイ・パウロスというバシリカ式の教会堂と隣接して建っており、共通のナルテックス、アトリウム、プロピュライアを有していたことが知られている。そして両者共に、ユスティニアノス1世の私邸だったホルミスダス宮の一部であった。ホルミスダス宮は後の時代には使用されなくなったが、『儀式について』の記述に出てくる「古い部屋」がその残った建築を指すものと考えられている。現在、当時の遺構で残っているものは、ハギオス・セルギオス・カイ・パッコスのみである。

マシューズはこの現存している教会堂の外壁の様子を詳しく調べ、南側に壁体を共有する形で〔図76〕ハギオス・ペトロス・カイ・パウロスが、また北東の角に突き当たる形でホルミスダス宮の建築があったものと結論付けている。そしてこのハギオス・セルギオス・カイ・パッコスは宮殿と教会のどちらとも、身廊レベルとギャラリー・レベルの両方で連絡していたと考えている。

実際に現存する建物の北東隅の壁体〔図77、78、79、80、81、82〕は、後の時代に大掛かりな改修工事を受けたあとがある。残念なことに堂内の対応する部分は、きれいに白く塗り込められているために、どのような性格の改修工事であったかはいま一つはっきりとしない。しかしながらこの部分で、他の建物と連絡する開口部があった可能性は高いように思われる。

一方の西正面は、本来のアトリウムが隣に建つもう一つの教会との共有物だったことから明白のように、現在のアトリウムは後の時代のもので16世紀のものと考えられている。〔図83〕現在のナルテックスは内側に五つ、外側に四つ扉を持っている。この扉はそれぞれ内と外とで一対一に対応しているが、

一番南側は内側だけで外側の扉がなく、それを塞ぐ形で階段がある。〔図84、85〕このため多くの研究者は、当初は外側に扉があったが、後の時代に周囲の建物がなくなるとつれてナルテックスに階段を作る必要ができて、この階段が作られたと考えている。マシューズは『儀式について』で記述されている儀式の際に、皇帝がギャラリーに行くのにこの階段を使ったと考えている。しかし史料のこの部分には上下移動を示す単語が階段も含めまったくなく、修道僧は「ギャラリーの門」で皇帝を迎え、また皇帝と分れると書かれている。さらにこの「ギャラリーの門」では高官達が皇帝を出迎えたりもするのであるが、もし仮にこの「ギャラリーの門」がくだんの階段に付随したアーチ型の門であるとすれば、あまりに狭すぎるだろう。ここではむしろ、皇帝はホルミスダス宮の「古い部屋」を抜けて、教会の北東の角から直接ギャラリーに入ったとするほうが、適当であると思われる。マシューズは他の部分で、皇帝が会食をするトリクリノスは教会内にあるのではなく、本来ホルミスダス宮に属するものだと述べているが、これは妥当な意見と思われる。

教会本体は四角形の平面の中に八角形の殻を挿入した形となっている。〔図86〕四角形の軸線上、東側にアプスを持つ。〔図87〕他の部分は内側の八角形に並んだピアの間を、外側の四角形の対角線上にくる部分では、赤い石柱によるエクセドラが、四角形の軸線上では緑の列柱が上方に延びている。〔図88〕列柱の上にはアーキトレヴが載り、これはピアの上に延びている。その上にギャラリーが載る。そして再び、身廊レベルと同じ構成の列柱が繰り返されるが、今回は連続する小アーチがその上にくる。この小アーチの上にはピアとピアとを結ぶように八つのアーチが並び、エクセドラとは半ドームで、その他の部分ではティンバナムで下の列柱とつながっている。そしてこの八つのアーチの上に16角形のパンブキン・ドームがのる。〔図89〕八角形をした身廊と四角形の外壁との間は、周歩廊になっているが、外側の八角形と内側の四角形の軸線が微妙にずれているために、その形は歪んでいる。〔図84、85〕

現在、見ることのできる内装のうち建築彫刻は大半が当初のものだが、壁面の装飾はオスマン朝のものである。またアプス両側のピアのアーキトレヴが、途中で止っていてアプス内側の面には存在しない。かつてはこの部分でアーキトレヴがテンプロンと繋がっていたと考えられていたが、フェルトは当初からアプス内側までアーキトレヴが続いていたと考えている。

また床面も、オスマン朝に属するものである。

以上のことから、10世紀当時のこの教会の状況を描き出すのは、かなり困難である。例えば、『儀式について』の記述からギャラリーには聖母の礼拝所、「至聖所のバラキユンプティコン」、メータトーリオンがあったことがわかるが、いったいこの教会の狭いギャラリーの何処に何がどのように配置されていたのだろうか。〔図85、90、91〕ギャラリーの北東の角から入った皇帝は、記述の順番がそのまま位置関係に対応すると仮定すると、まず皇帝の門の上、つまり西側で折りそれから聖母の礼拝所に入る。つ

まり聖母の礼拝所はギャラリーの南半分の何処かにあったことになる。そしてそののち、「至聖所のバラキンプティコン」に入る。先ほどのシュトゥルーベの説が正しいとすると、「至聖所のバラキンプティコン」はギャラリーの東南の隅、至聖所の隣である。皇帝は礼拝所で領聖を受けるが、領聖を受けた皇帝はメータトリーオンに行く。おそらくこの二つは隣り合っていたのではないか。西ギャラリーで廷臣達が領聖を受ける、あるいはその準備がなされていることを考えると、この礼拝所が聖母の礼拝所だと仮定して、少なくとも南ギャラリーの何処かにメータトリーオンもあった可能性が高い。

またトリクリノスから戻った皇帝がギャラリーを通過して入口まで行くことから、前述のホルミスダス宮から直接ギャラリーに入るという仮定が正しいとして、ホルミスダス宮へ行く出入り口は二つあったことになる。おそらく北東の角にあいていた二つの開口がそれであろう。しかしこれ以上のことは、なにも言うことができないのが現状である。

ハギオス・モーキオス教会

「以下は気に留めておくこと。聖モーキオスはもともと、コンスタンティノス大帝(324-37)によって建設されたが、そのときには数多くの異教徒がここに住んでいた。そしてここにはゼウスの神殿があり、その場所に(彼は)教会を建てた。コンスタンティオス(337-61)の三回目の執政の時(342)に(この教会は)倒れた。そこでテオドシオス大帝の時代に、アリウス派(の異端の信者)達が神聖な教会を追い出されて、聖モーキオスの聖域に来て、ここに住むことを望み、皇帝に許可を求め、許された。それでアリウスの人々はすぐに、この教会を再建し、この教会を7年間、儀式に使用した。そして(この教会は)伝えられているところによれば、7年目に礼拝の最中に倒れた。それで多くのアリウス派が殺された。皇帝ユスティニアノスの時代に、この教会は再建され、我々の時代にも建っている。」⁶⁸⁹⁾

8世紀前半にコンスタンティノポリスの名所旧蹟について解説した、通称『簡単な歴史に関する覚書(バラストセイス・シュントロモイ・クロニカイ)』と呼ばれる文章がまとめられた。この文章は、まず聖モーキオスの聖域の解説から始まっている。この文章には序文がないために、ハギオス・モーキオス教会に関する記述が本来のこの文章の始まりなのか、それともこの部分に先行する散逸してしまった部分があったのかは、明らかではない。しかし聖モーキオスはコンスタンティノポリスの殉教者で、記念日が5月11日である。この日は同時にこの都市の創建記念日でもある。そんな聖人を奉った聖域に関して書き始めることは、この史料の性格から十分ありうることである⁶⁹⁰⁾。

沿革⁶⁹¹⁾

さてこの教会の創建に関する『バラストセイス』の記述は、実はあまり信頼されていない。他の史料でこの教会のことが始めて言及されるのは、5世紀初頭のソゾメノスの記録である。例えば4世紀のエウゼビオスは『コンスタンティノス伝』で、彼が造営した教会の名を列挙しているが、そこにこの教会の名前はない。このためジャンンはハギオス・モーキオス教会がコンスタンティノス1世の創建であるという記述に疑問を挟んでいる。またマンガは逆に、コンスタンティノスの城壁の外の墓地の真中、貯水池のそばにあるこの教会は、同時代のローマとの比較の上で、コンスタンティノスの事業として妥当なものと考えられているようである⁶⁹²⁾。

いずれにせよこの教会は5世紀には存在していた。またプロコピオスは『建築について』で、聖モーキオスの教会は皇帝ユスティノス1世の時代に、ユスティニアノスが再建したものと述べている。このことから『バラストセイス』の記述は、後半部分は事実と則したもののようである。

なお同じ史料は、この教会がレオン3世の時代に倒壊したというのは間違いだと書いているが、8世紀

前半におけることの真相は不明である。しかし9世紀には、この教会はかなりひどい状態にあり、至聖所の床が抜け祭壇も壊れていた。このためバシレイオス1世はこの教会に全面的な改修工事をおこなった。

バシレイオス2世はこの教会を修道院に改組した。そしてコムネノス朝の諸帝はこの修道院に献納を怠らず、また建築物にさまざまな形で手を加えた。その中でも特にマニエル・コムネノスは、食堂を新築し屋根を全面的に改修した。

しかし13世紀初頭の記録が、機能している聖モーキオスの修道院を描いた、現存する最後の記録となった。14世紀末にはこの修道院は廃墟と化し、ヨアンネス5世は黄金門と城壁修理のために石材を、この廃墟から採集している。

儀式⁶⁹³⁾

5月11日にはこの教会で殉教者の記念祭がおこなわれるが、皇帝はヒポドロモスでの儀式⁶⁹⁴⁾、総主教はハギア・ソフィアとフォロスを往復する行進とハギア・ソフィアでの儀式⁶⁹⁵⁾、それぞれ参加しハギオス・モーキオスは訪れない。

また前章で見たように903年にレオン6世が、この教会内で襲われ負傷するまで、皇帝は毎年五旬節中日の水曜日このハギオス・モーキオス教会で儀式に参加した。そのときの様子を描写した『儀式について』の記述⁶⁹⁶⁾から以下のことがわかる。

この教会はアトリウムとナルテックスを持っており、アトリウムからナルテックスに上る階段があった。おそらくこの階段の手前に泉水があり、皇帝はそこで手足を洗うことになっていた。また皇帝が総主教を迎えに行くときの描写から、教会はおおよそメセーの北側にあったことがわかる。なぜなら皇帝はナルテックスを出て左折し、門を出てメセーに行くからである。

ナルテックスには中央の門の左側に皇帝用の金の椅子がおかれていた。教会堂内は身廊、側廊によって構成され、アンボ、ソレア、至聖所、祭壇といった堂内装置があった。

さてナルテックスは階段室と連絡していて、これを上り少し左に曲がると西ギャラリーに出る。階段を出て左折すると西ギャラリーに出るのであるから、前述の階段は教会の西南にあったと思われる。そしてこの西ギャラリーを通過して私室へ至るのであるから、ギャラリーの西北に皇帝の私室が設けられていた。

また皇帝は「秘密の螺旋階段」をのぼってギャラリーのバラキュプティコンに行き、ここから儀式に参加したが、この空間の場所は明記されていない。これに関連してミサののちの会食の際に、総主教は「(総主教の)行進が到着する前に最初に皇帝が上った」階段、つまり西南の階段を使用することが⁶⁹⁷⁾、説明されている。史料の表現をそのまま受けとめれば、「秘密の螺旋階段」は先程の西南の階段とは異なるもので、同じ位置にはなかったと思われる。また奉神礼ののちに、バラキュプティコンからギャラリー

を通過して私室にはいるのであるから、バラキュプティコンが私室の側にあったとは考えがたい。それゆえに少なくとも、ギャラリーの西南あるいは西北には、バラキュプティコンはなかったことになる。

皇帝と総主教の会食はギャラリーでおこなわれるが、このとき総主教は先に述べた西南の階段を上ると、「ギャラリーを通過して」食事の用意されたギャラリーにいくと、記されている。このことから会食がおこなわれるのは、北ギャラリーである可能性が高くなる。また皇帝はバラキュプティコンか皇帝の私室で総主教を待つだけだから、この両者の間のギャラリーで会食があったと考えることができる。以上の様々な要素を考慮すると、この教会の北ギャラリーに会食用の食卓とバラキュプティコンがあった可能性が高い。

建築

実のところ『儀式について』が、この教会の建築物に関するほとんど唯一の史料なのである⁶⁹⁸⁾。プロコピオスを始めとする誰一人として、この教会の建築物を描写しなかったのはなぜだろうか。やはりこの建物が極めて標準的なものだったからではないだろうか。これまで見て来たことから、この教会の基本形態に関してみると、アトリウム、ナルテックス、身廊、側廊、ギャラリー(Π字型)といった建築的要素、ユスティニアノス1世の建設でバシレイオス1世の改修といった歴史的事実しか材料はない。

おそらく平面形態はバシリカ式であったことだろう。しかし上部構造に関しては、木造なのか、ドームを持っていたのかなど、まったく不明である。しかし蓋然性からいえば、ユスティニアノスの建築がドームを持っていたか否かはさておき、バシレイオス1世の工事の後、10世紀の状態としてはドームド・バシリカが最も適当と考えられる。

なお『テュピコン』から、この教会の脇に同じ聖モーキオスを奉ったマルチリウムがあったことがわかる⁶⁹⁹⁾。

最後にこの教会の位置については、次の引用で代用したい。ギリウスはこの教会の16世紀の状態に関して以下のように述べている。

「私はモーキオスの教会のいかにばかりの残滓を、ユスティニアノスが第七の丘の上で作った大きな貯水池のそばで見た。その柱はすべて残っていて、モーキオスの名前がまだ生き残っている。」⁷⁰⁰⁾

市内の他の教会

市内にある教会で皇帝が聖人の記念祭に参加するものは、『儀式について』では第2巻第13章にまとめて登場する。このうち皇帝の行動が詳しく取り上げられているのは、以下の二棟だけである。

ハギオス・パンテレエモン

『儀式について』には7月27日に皇帝は、ナルセス地区（タ・ナルスー）の聖パンテレエモンの教会に行くこととある⁷⁰¹）。しかしこの教会に関して、詳しいことは、何一つ伝わっていない。ジャンンによると⁷⁰²）、皇后テオドラがこの教会の工事を命じたという記録はあっても、どのテオドラか、つまり6世紀のユスティニアヌス1世の妃か、9世紀の皇帝テオフィロスの妻なのかすら不明という状況である。またこの地名はナルセスという人名に由来するが、どのナルセスなのかも諸説ある⁷⁰³）。結局、ジャンンは蓋然性から考え、マウリキオス帝の将軍ナルセスが創建者で、6世紀にテオドラが修復または再建したとしている。

また具体的にコンスタンティノポリスのどのあたりをナルセス地区というのかも諸説あるが、ジャンンは『儀式について』の該当部分の記述から、現在のシュレイマン・ジャーミーの北東の一帯だとしている。だがこの地区のパンテレエモンの教会は現存しないし場所も不明である。またこのような状況ゆえに、建築物に関して我々が手にすることのできる情報は、ほとんど『儀式について』の記述に限られている。それは以下のようなものである⁷⁰⁴）。

まず皇帝は街路のポルティコに面したプロピュライアで馬から降り、階段を上ってアトリウム⁷⁰⁵の南側の部分を通って、ナルテックスに入る。そして皇帝の門に入って、身廊の真ん中とソレアを通り、神聖な扉から至聖所に入る。ここで祭壇の布と殉教者の遺物に接吻し、ペーマの北側の部分を通ってテトラセロンに入り、聖水と聖遺物を崇拜する儀式をおこなう。それから外に出て中庭⁷⁰⁶のアナデンドラディオ⁷⁰⁷にはいる。

シュトゥルーベによるとアトリウム（原語では「ルーテール」）と中庭（同じく「エクサエロン」）という二つの単語は微妙に意味が異なる⁷⁰⁸）。彼女はルーテールを通常「教会の西側のアトリウム」を意味するとし、エクサエロンに関してはギロンの「天井のない大きな中庭」⁷⁰⁹）とする説を支持している。またアナデンドラディオについて、彼女は「庭園に似た中庭」と考えているが、ギロンのマンナウラの前のアナデンドラディオに関する説⁷¹⁰）から並木道である可能性も否定はしていない。

このことから考えて、『儀式について』の記述で登場する三つの単語は、それぞれ別のものを指すと見てよいだろう。おそらく教会の北側に、アトリウムとは異なる第二の中庭があって、そこに植物園あるいは薬草園のような樹木のある区切られた空間があった。また教会の中の至聖所には殉教者の頭部が聖遺物

として納められていて、この至聖所の北側にテトラセロンがあった。

ストゥーディオス・バシリカ

この章で取り上げられているもう一つの教会は、皇帝が8月29日に洗礼者の新首を記念して訪れるストゥーディオス地区（タ・ストゥーディウー）のプロドロモス（先駆者、つまり洗礼者聖ヨアンネスのこと）の修道院の教会である⁷¹¹）。この地名は修道院の設立者でもある、5世紀の貴族ストゥーディオスに由来する⁷¹²）。修道院の名前もまた同じである。

前章でも軽く触れたが、まずこの修道院の来歴をまとめておくことにする⁷¹³）。前述のようにストゥーディオスによって454年、あるいはその数年前に設立され、このときに現存するバシリカ式教会堂も建設された。その後この修道院は特に目立つ存在ではなかったが、8世紀には反イコン破壊運動の中心となり、たびたび苛酷な迫害を受けた。続く9世紀には、政治的に中立を保つと同時に、文化的な中心の一つとして繁栄したが、10世紀に洗礼者の頭部を獲得すると帝室に接近し、11世紀になると皇帝の保護を受けるようになった。このため同時期に、改装工事がおこなわれたようで、現存する床面もこの時期のものと思われる⁷¹⁴）。コムネノス朝の治下でその勢力に陰りがみえ、ラテン帝国の略奪を受け衰退、一時は解散状態にまで追い込まれた。しかし1293年に改修工事を受け活動を再開し、14世紀には再び帝都の修道院の指導的地位に返り咲いた。オスマン朝征服後、ベヤジット2世の時代にモスクに改装されイムラホール・ジャーミーと名前を変え、18、19世紀に火災と地震で大損害を受け、手を入れられないまま放置され現在に至っている。

この修道院の建物のうち現存しているのは、バシリカ式の本堂だけである。〔図92〕以下にその建築的特長をまとめてみる⁷¹⁵）。まずアトリウムは、現在北側の外壁しか残っていないが、当時はポルティコに囲まれていたようだ。そしてナルテックスは、もともとのアトリウムの東部分で列柱によって開放部分と連続していたようである。〔図93〕教会内に入ると、三廊式のΠ字型ギャラリーをもった構成になっていたことがわかる。〔図94、95〕ギャラリーへは、かつては堂外の階段で連絡していたものと思われる。おそらくクリアストーリーはなく、そのかわりに堂内の列柱に対応して大きな窓が側廊外壁に開いていた。〔図96〕身廊東端部にはアプスがあり、内側は半円形をしておりシュントロノンの痕跡がある。外壁は多角形で、かつては各面に一つづつ計三つの窓が開いていた。このアプスからΠ字型にテンブロンが身廊に突出して至聖所を囲んでいた。そして至聖所の祭壇の下にはクリプタが発見されている。目を細部に転じると、単純な平面計画とは対称的に豊かな装飾がなされている。水平なエンタブラチュアーの建築彫刻など、細部は古典的伝統に則っており統一がとれている。列柱などが大理石で作られているのに対して、壁体は煉瓦5層と石材3層を交互に積む構法で建設されている。これは5世紀のコンスタンティノ

ポリスでは、一般的な構法である。これらのいずれもが典型的な帝都のバシリカ式教会堂というのに相応しいものである。

『儀式について』の記述から、このバシリカ式教会堂に関して以下のことがわかる⁷¹⁶⁾。まずこの日の儀式は基本的には、先に取り上げた聖バンテレエモンの祭日に準じておこなわれる。皇帝は修道院の中庭（エクサエロン）と通路（ディアパティコン）を進み、ナルテックスの南部分に到着する。そして小聖入に参加し聖遺物の安置されているペーマの右側に進む。そしてメータトーリオンで着替え、側廊に入り、ペーマの「東に向かって右の部分」で福音書を拝聴する。そのあとでアナデンドラディオンの会食をする。

すでに述べたように、現存する遺構からは周辺にあった修道院の状況がまったくわからない。しかし、教会での儀式に先行する部分で、人々が船で来る皇帝を「修道院の海側の門」で待つ部分がある。また上記のように皇帝は、アトリウムではなく中庭を通して、ナルテックスの南部分に到着する。これらのことから考えて現存するバシリカ式教会堂の南側に通路と中庭があったものと思われる。しかしこの中庭にアナデンドラディオンのあったのか否かは不明である。

また堂内に関しては、メータトーリオンから側廊を通り至聖所へ行くという記述から考えて、南側廊の東南隅にメータトーリオンがあったものと思われる。

2-3 大宮殿内の教会

『儀式について』には大宮殿の数多くの教会や礼拝所が登場するが、現存するものは皆無である。〔図97、98、99、100〕そのうちのいくつかはほとんど史料で言及されていないが、中にはかなり詳しい記述を見ることができるものもある。以下、それらについてまとめてみる。

ファロスの聖母教会

沿革⁷¹⁷⁾

この教会が初めて記録に登場するのは768年のことである。このときの建築はコンスタンティノス5世によって8世紀に建設されたと考えられているが、あくまで推測の域をでない。

通常、ファロスの聖母教会と言ったときには、9世紀におそらくまったく新しい建築として建造されたものを指す。この教会はミカエル3世によって建設され、864年から866年の間のあるときに献堂された。

この教会は大宮殿内において、後述するように宗教儀式の中心として機能した。しかしラテン帝国支配下にカトリック教会として使用され、それ以降は史料に登場しなくなる。

儀式

ファロスの聖母教会は『儀式について』でも最も頻りに登場する教会の一つである。その中でも特に重要な儀式は、皇帝の結婚式である。しかし第2巻にあるこの主題を取り扱った章では、覚書風に皇帝の戴冠結婚式はファロスの聖母教会で最近では執り行われるようになった、と書いてはあるものの、実際に取り上げられているのは、より古い時代のダフネー宮のハギオス・ステファノスの教会を使用する儀式の次第である⁷¹⁸⁾。

それ以外にこの教会が儀式の舞台となることは数多いが、整理すると以下ようになる。

1) 宮殿内で完結する行進がおこなわれるとき、その出発点として使用される。ネア献堂記念祭（5月1日、ネアへ）⁷¹⁹⁾、聖バシレイオスの記念日（1月1日、ハギオス・バシレイオスへ）⁷²⁰⁾ そして大天使ミカエルの記念日（11月8日、ネアへ）がこれにあたる。また7月20日の預言者エリアスの記念祭の場合はネア献堂記念祭に準じる儀式がおこなわれるのだが、ファロスの聖母教会内の聖エリアスの礼

拝所から行進は出発し、ネアのなかの聖エリアスの礼拝所へ向かう⁷²¹⁾。なお1月1日を除くこの行進すべてに、総主教が参加する。

また復活祭と受胎告知が重なった年は、宮殿内でファロスの聖母教会からダフネー宮の聖母教会へ行進をおこない、本来の受胎告知の祭であるカルコプラティアでの儀式は省略するが、復活祭の儀式であるハギア・ソフィアでのミサは例年どおり執り行う⁷²²⁾。

2) 『儀式について』によると祭日の前など、年何回か皇帝は晩禱に参加する。その際に皇帝はファロスの聖母教会を使用することが多い。具体的には聖エリアス前夜⁷²³⁾、聖枝祭前夜⁷²⁴⁾、聖大木曜日⁷²⁵⁾そして聖大土曜日⁷²⁶⁾である。このうち総主教が参加するのは聖エリアス記念祭のための晩禱だけである。

3) 年中行事として皇帝参加の聖体礼儀がおこなわれる。これは復活祭の木曜日に皇帝が総主教以下の聖職者を宴に招いた際におこなわれるもの⁷²⁷⁾と、聖枝祭の聖体礼儀⁷²⁸⁾の二つである。

さてこれら『儀式について』の記述から、ファロスの聖母教会に関して以下のことがわかる。まず位置について、普通の廷臣達はクリュソトリクリノスを通ってこの教会に来るが、これは位置関係からして至極自然な経路である。しかし皇帝は行進がファロスから出発する際には、必ず「秘密の戸口をくぐり個室の続く通路を経て」教会に現れる。この秘密の戸口などが、何処にあった何なのかはまったく不明であるが、大変興味深い点の一つである。

また紫の大理石のアナトリカという名の戸口、東側の銀の門、象牙の門、黄金の門などがあり、そして内部には聖エリアスの礼拝堂があること、ナルテックスを有していることも確認できる。

建築

この教会の建築に関して最も詳しい記述は、総主教フォティオスの説教集にある⁷²⁹⁾。この史料から建築形態としてはっきりわかることは以下のとおりである⁷³⁰⁾。この教会がアトリウムをもっていたこと。中央にモザイクで壮麗に飾られたバンプキン・ドームを持つ、おそらくは内接十字型平面をしていたこと。宝石とエナメルで飾られた祭壇、銀のキボリウムと障壁があったことなどである。

また他の史料からこの教会は決して大きくはないが、三祭室式の東端部を持ち、中央に至聖所、北側に隣接してプロテシス、南側にディアコニコン、三つともがアプスを有することがわかる⁷³¹⁾。

ネア（新教会）

沿革⁷³²⁾

この教会はバシレイオス1世が自ら工事を監督し、880年5月1日に献堂された。

この教会は最初、独自の僧侶組織によって運営されていたが、12世紀に修道院になった。そしてラテン帝国のイサク2世によって略奪を受け、そののちラテン帝国時代には聖ミカエル教会の名で宮廷礼拝堂として使用され、オスマン・トルコの支配下で1490年に破壊された。

儀式

ネアが『儀式について』に登場するのは、以下の二つの場合のいずれかである。

1) 宮殿内で完結する行進の目的地として使用される。ネア献堂記念祭（5月1日）と大天使ミカエルの記念日（11月8日）⁷³³⁾、がこれにあたり、行進はファロスの聖母教会を出発する。また7月20日の預言者エリアスの記念祭の場合はネア献堂記念祭に準じる儀式がおこなわれるのだが、ファロスの聖母教会内の聖エリアスの礼拝所から行進は出発し、ネアのなかの聖エリアスの礼拝所へ向かう⁷³⁴⁾。なおこの行進すべてに総主教が参加する。

2) 8月1日と四旬節第三週日曜日におこなわれる十字架の礼拝の際に、第三第六の動めの後、ネアで十字架を讃える儀式がある。

これらの記述から、ネアの建築については以下のことがわかる。エリアスの礼拝所にはこの預言者の羊の皮が聖遺物として納められている。側廊に皇帝バシレイオス1世のイコンがあり、礼拝できるようになっている。そしてアナバシオンと呼ばれるギャラリーがある。儀式に皇帝は「海に向かったナルテックスを出たところ」にあるプロセウカディオオンから参加する。このナルテックスは多くの研究者の間で、教会堂の南側のそれと考えられている。プロセウカディオオンには布（カーテン）が吊っており、椅子が置いてある。おなじナルテックスに秘密の階段があって、ナルテックスのテラスへ上ることができる⁷³⁵⁾。

建築⁷³⁶⁾

この教会はクリュソトリクリノスの東側に位置し、キリストに捧げられた教会ではあったが大天使ミカエル、聖母マリア、預言者エリアス、聖ニコラオスの各々に捧げられた四つの礼拝堂があった。

ネアについては『続テオファネス年代記』や『バシレイオス伝』に詳しい記述がでている。それによると5つのドームを持っていて、外側は黄銅で黄金に似せて暮かれており、壁体は内装外装ともに大理石の板によって飾られていた。至聖所は黄金・白銀・宝石・真珠によって装飾され、床は異なる色彩の大理石

からなる幾何学模様で飾られていた。この教会はさらに西のみならず南北にもナルテックスを持ち、西側には南北一つづつ、計二個の泉のあるアトリウムと、ヴォールトのかかったポルティコを持っていた。

これらのことから多くの研究者は、四隅に四つの礼拝堂を持った内接十字型の教会堂と見ており、コンスタンティノス・リプスの修道院（現在のフェナリ・イサ・ジャーミー）やミュレライオン（ポドルム・ジャーミー）にその残響を聴くことができると考えている。

大宮殿内の他の教会、礼拝堂

ハギオス・デメトリオス教会⁷³⁷⁾

この教会はレオン6世によって建設された。ファロスの聖母教会の左側、同じテラスの上に建っていて、戸口で連絡していた。教会が四角であるとの記述や、黄金の柱頭を戴いた四本の柱やヴォールトの救世主のモザイクが言及されていることから、形態的にはおそらくドームを一つ持つ内接十字型の教会だと考えられる。

この教会が『儀式について』に登場するのは以下の二回である。

10月26日の聖デメトリオスの記念日に、皇帝は入場後この教会の「中央を通して出て」⁷³⁸⁾、テトラセロンで福音書の朗読を聴く。また聖枝祭の前夜にはこの教会で、皇帝が元老院議員達に翌日の祭で使う椰子の枝を配る。

ここで問題になるのはテトラセロンであるが、『儀式について』の記述から考えて、ナルテックスから入った後、「中央を通して出」るのであるから、史料では触れられていないが右か左に曲がって堂外のテトラセロンに入る、言い換えれば堂の隣に立っているテトラセロンに入る、と考えるのが適当ではないだろうか。もしもそう考えるならば、この教会の右側にはファロスの聖母教会が建っていたわけだから、教会堂の左側、つまり北側にはり出して三葉形平面のテトラセロンがあったものともわれる。

ハギオス・バシレイオス

この教会に関しては、ラウシアコスに左側にあったこと以外、ほとんど何も知られていない⁷³⁹⁾。『儀式について』のなかでこの教会が重要な役割をはたすのは、1月1日におこなわれる聖大バシレイオスの記念祭である。しかしこの部分で言及されているのは、皇帝がここで行進の最後を締めくくる連禱に参加することのみである⁷⁴⁰⁾。

ハギオス・ペトロスの礼拝堂

この礼拝堂に関しては『バシレイオス1世伝』が、幾許かの情報を与えてくれる。マルキオスのポルティコの端に位置し、上部に聖母の礼拝堂、となりに大天使ミカエルの礼拝堂があった⁷⁴¹⁾。同様の記述は『続テオファネス年代記』にも見ることができるが、それ以上のことは何もわからない⁷⁴²⁾。

『儀式について』でこの礼拝堂が言及されるのは一回だけである。それは10月26日の聖デメトリオスの記念日で、この礼拝所は総主教や皇帝、廷臣の聖デメトリオスの教会に向かう宮殿内での行進の出発点となる⁷⁴³⁾。

ダフネー宮⁷⁴⁴⁾

ダフネー宮は大宮殿の中でも最も古い部分で、コンスタンティノス1世によって青銅門と同じ時期に建設された。建物、テラス、ポルティコ、庭園が連続する一連の建物群で、中心にはアウグステウスと呼ばれる広間があり、そこには巨大な黄金と宝石の十字架があった。ちなみにダフネーとの名前は同じ名前のニンフの像があったことに由来する。

ハギオス・ステファノス⁷⁴⁵⁾

この教会はかつては宮殿の中心となる教会であった。428年にブルケリアによって建設されたが、建築形態は不明である。ヴォクトは同時代一般的であったバシリカ式とみているが、ジャンンは「礼拝所（エウクテリオン）」と史料で扱われることが多いことから、小さな付属的な存在を想定している。これに対してマシューズは後に触れるようにこの教会に水盤があることから、洗礼堂によく見られる集中式の教会であった可能性を指摘している⁷⁴⁶⁾。

ハギオス・ステファノスには聖コンスタンティノスの十字架⁷⁴⁷⁾と聖ステファノスの手が聖遺物として保管されていた。また『儀式について』の神現祭前夜の記述から、洗礼盤のような水盤があったことがわかる。

なおこの教会は9世紀まで、皇帝の結婚式をおこなう場所であった⁷⁴⁸⁾が、ファロスの聖母教会が建設されると会場はそこに移された。

『儀式について』でこの教会が登場する儀式は大きく以下のものに分けられる。

1) 生誕祭、復活祭などの祭日に、皇帝が宮殿外の宗教儀礼に出かける前に、ここにより聖コンスタンティノスの十字架を礼拝する⁷⁴⁹⁾。

「それから皇帝はプライボシトス達と第一の殉教者聖ステファノスの教会に入り、蠟燭を手に三回跪い

て神への感謝を示し聖コンスタンティノスの大きく美しさに満ち価値に満ちた十字架を拜する。」⁷⁵⁰⁾

2) 上で触れたようにファロスの聖母教会ができるまでは、この教会で皇帝の結婚式、あるいは結婚戴冠式をおこなっていた。

「皇帝と皇后は聖ステファノスに入り、婚約式をおこない教会を出る。総主教はミサをあげ、ミサが終わると皇帝と皇后は入って結婚式(と戴冠式)をおこなう。」⁷⁵¹⁾

3) 総主教が水を祝福する儀式が、皇帝、侍従、廷臣、軍人などの参加のもと、神現祭の前夜(1月5日)にこの聖ステファノスの教会でおこなわれた⁷⁵²⁾。

4) 総主教がアウグステウスや19寝台のトリクリノスで宮廷儀式に出席する際に、まるで控え室のようにこの教会を使い、衣装を整えたりプライボシトスと呼ばれるのを待たせたりした⁷⁵³⁾。

5) 8月1日、四旬節第三日曜日の両日、宮殿内で十字架を崇拝する儀式がおこなわれたのちに、儀式に用いた十字架を保管するのに、この教会が使用された⁷⁵⁴⁾。

6) 聖枝祭で皇帝は、廷臣達と行進してトリコンクを出発シダフネー宮に向かい、聖母教会で礼拝してからハギオス・ステファノスに来て連禱をおこなう⁷⁵⁵⁾。

聖母教会と聖三位一体教会、ステナキオンそして洗礼堂⁷⁵⁶⁾

この聖母の教会は「最高に神聖な聖母の最初に建設された教会」と呼ばれるが、いつごろの建設かははっきりしない。また『儀式について』第1巻第1章の記述から⁷⁵⁷⁾、これら四つは連続して建っていて、ステナキオンは聖三位一体と連絡している廊下のような狭い空間であること、洗礼堂には十字架が保管されていることがわかる。しかしそれ以上の建築物に関する情報は伝わっていない。

また『儀式について』の同じ部分から、これら四つの空間は上のハギオス・ステファノスとともに、ハギア・ソフィアに向かう前に皇帝が連続して礼拝をおこなう場所であることがわかる。その他の箇所では、これらが言及されることはあまりなく、あっても聖枝祭の場合⁷⁵⁸⁾のように補助的なものである。ただダフネー宮の聖母教会だけは、復活祭と受胎告知が重なった年に、受胎告知の儀式がおこなわれる舞台となることが知られている⁷⁵⁹⁾。

2-4 まとめ

以上見てきた各教会堂について、本節では様々な角度から整理して検討する。

まずそれぞれの建物の沿革からみていくことにする。各教会の創建からまとめると[表10]のようになる。

創建が4世紀にまで遡ると考えられているものは、常にコンスタンティノス1世にまで遡るのか、それとも続くコンスタンティノス2世の時代のものかが、言い換えればコンスタンティノポリスの最初の都市計画との関連が⁷⁶⁰⁾問題となるが、本論文ではあまり重要ではない。すでに見てきたようにハギア・ソフィア、聖使徒教会、そしておそらく聖モーキオス教会の三つが4世紀に創建された教会堂であろう。ここで興味深いのは、コンスタンティノポリスで最も古い教会であるハギア・エイレーネーが、『儀式について』を始めとする9世紀、10世紀の史料では重要視されていない点である。

一方、首都の重要な二つの聖母教会、カルコブラティアのとブラケルナイのそれとは、ともに5世紀に属するものである。ほぼ同時期にストゥーディオス修道院の洗礼者の教会とダフネー宮殿内の聖ステファノス教会も建設された。

続く6世紀はビュザンツ帝国において、最も建築活動が盛んだった時期である。プロコピオス⁷⁶¹⁾が伝えるように皇帝ユスティニアノス1世は積極的に各種の建設事業を推進した。教会堂建築はその中でも、帝国の威信をかけた国家事業の核となるものだった。この時期には、ペーゲーの聖母修道院と聖セルギオスと聖パッコス教会が皇帝の命によって創建された。またナルソス地区の聖パンテレエモン教会もこの時期に属するものであろう。しかしユスティニアノス1世の建築への熱意が最もよく現れているのは、ハギア・ソフィア(大教会)と聖使徒教会の二つの建物を、まったく新しく造営し直したことであろう。おそらく聖モーキオスの教会も彼によって、新たに建設された。またブラケルナイの聖母教会はこの時代の二度に渡る改修工事で、東側部分をまったく新しい形態に改造されてその姿を大きく変えた。さらにカルコブラティアの聖母教会にも手が加えられた。

さてここですぐ気がつくことは、皇帝が使用する教会のうち、宮殿内にあるもの以外のほとんどの教会が、すでに名前があがっている点である。さらに上にあげた、6世紀にまで遡る教会堂の大半が、ユスティニアノス1世と、つづくユスティノス2世の時代の工事に建築形態の多くを負っている。このうち、カルコブラティアとブラケルナイの二つの聖母教会以外はすべて事実上の新築で、まったく新しい建築物として造営された。またブラケルナイの聖母教会も東側部分に大改修を受けており、おそらくこの部分は新た

に建設されおしたものと思われる。この時期に手が加えられなかった教会堂はストゥーディオス修道院とダフネー宮の聖ステファノスだけである。

ユスティニアノス1世による6世紀の造営活動が、建築史上一つの山場を作ったとすれば、各教会堂の沿革から浮き上がる次の山場はバシレイオス1世の時代ということになるだろう。7世紀、8世紀と続いた首都における建築事業の停滞の後、再び皇帝を中心とした中央政府が大規模な建築事業を主導するようになったのである。この様子は10世紀に成立した『バシレイオス1世伝』⁷⁶²⁾に詳しい。

『儀式について』に登場する教会堂のうち、バシレイオス1世が手を加えたものを以下にみていく。ハギア・ソフィア(大教会)は西大アーチの補強を中心にモザイクによる内装など、かなり大掛かりな工事が行なわれた。すでにみたように南北のティンバナムもこのときに手が加えられたようである。聖使徒教会は史料ではバットレスの補強が語られている。聖セルギオスと聖パッコスパッコスの教会は『バシレイオス1世伝』では言及されないが、多くの研究者がこの時期に修理されたとみている。以上の3棟の工事は、規模は様々だが建築物に対する構造的な補強が主眼であった。これに対して聖モーキオスとペーゲーはかなりの大工事であったと思われる。モーキオスは床が抜け祭壇が壊れており、ペーゲーはドームが壊れていたのを、それぞれ教会堂として使用できるように手を入れたとされる。しかしこれらは明らかに修復工事で、基本的な建築形態はおそらくほとんど変更されなかったことだろう。カルコプラティアの聖母教会の場合、ドームを加えたのか否かは議論の余地が残る。仮にドームを加える大工事であったとすれば、唯一、バシレイオス1世の工事によって建築形態の大きく変化した例ということができるだろう。逆から言えばこのカルコプラティアの聖母教会以外に、既存の教会堂の建築形態を大きく変更したものはみられない。バシレイオス1世による工事はユスティニアノス1世のそれとは性格を異にし、ほとんどが改修や修理、補強であって建築形態自体を大きく変えるものではなかったようである。

むしろここで、注目されるべきことは宮殿内の建築であろう。事実『儀式について』や『クレートロギオン』に登場する教会で、9世紀以降に新築されたものは、ほとんどが宮殿内のものである。唯一の例外は聖使徒教会に付属していた万聖人の教会で、これはおそらく9世紀末か10世紀初頭にレオン6世によって建てられたものである。それ以外はすべて宮殿内に位置し、大宮殿では、ファロスの聖母教会がミカエル3世の晩年に、ネア(新教会)と聖ペテロス礼拝堂がバシレイオス1世によって、そして聖デメトリオス教会は続くレオン6世によって創建された。またポーンヌ宮の聖コンスタンティノス教会は、おそらくロマノス1世によるものだろう。

以上を要約すれば、ハギア・ソフィア、聖使徒教会といった皇帝が公式に儀式に参加する市内の教会は、

ほとんどが6世紀以前に創建され、ユスティニアノス1世によって新たに建設され、程度の差こそあれバシレイオス1世によって修理されたものである。

例外としては、修道院として独自の地位を保っていたストゥーディオス洗礼者修道院と、おそらくイサウリア朝の皇帝によって建設されたフォロスの聖コンスタンティノスの礼拝所があげられる。

前者は、8月29日の洗礼者の記念祭の所でみてきたように、修道院の方針が変わったことに伴って、皇帝が礼拝に訪れるようになったものであり、他の市内の教会や皇帝の庇護を受けたペーゲーの修道院などとは一線を隔する。

後者はおそらく、8世紀にコンスタンティノス1世が聖コンスタンティノスとして信仰の対象になるに従って、おそらく皇帝の命により建設されたものであろう。

市内の教会に関してまとめると、各教会堂の沿革からは以下のことがわかる。皇帝が使用する教会は、いずれもコンスタンティノポリスにおいて古い歴史を持つものである。しかしながら、聖遺物で知られる聖母教会や帝都の守護聖人の教会など、その重要性は様々なものに由来し、各々の教会堂自体には皇帝が使用するに足る伝統と格式とを兼ね備えてはいたが、全体としては決して一つの選択基準に則ったものとは思えない。これらの教会堂は建築的には、6世紀において整備されたものが大半である。そしてこれらの教会堂は多くがバシレイオス1世によって修理されている。

一方の宮殿内の教会は、かつて大宮殿内の宗教儀式の中心であったダフネー宮の聖ステファノス教会を別とすれば、すべてがミカエル3世以降の建設によるものである。むしろ伝統を誇るダフネー宮の諸教会の機能を、新たに建設された各教会堂が奪い取っていったようにさえ感じられる。この点において市内の教会と宮殿内の教会は、好対称をなしているように思われる。

次に各教会堂の建築形態から分類を試みる[表11]。この場合多くの建物については遺構が現存しないため、平面形態が分析の中心となる。

まずストゥーディオス修道院の洗礼者教会は、典型的なバシリカ式平面を持っており、疑問の余地はない。これに対して文献史料から想像されるペーゲーの聖母修道院の形態は、ドームド・バシリカである。カルコプラティアの聖母教会がドームを持っていたか否かは意見がわかるが、平面形態は明らかにバシリカ式教会堂である。ブラケルナイの聖母教会は三葉式交差廊を有するバシリカ式教会堂で、西側部分に関してはおそらく非常に古典的な三廊式の構成を持っていたに違いない。聖モーキオスは、蓋然性からバシリカ式であった可能性が高い。以上の5棟は、バシリカ式ないし、その派生型に属していたとみることができる。

これに対してハギア・ソフィア(大教会)は、非常に複雑な形態をしているが、方形の平面の中にドー

ムを支持する構造体が挿入された、ダブル・シェルともいべき二重の構造を持つ点では、聖セルギオスと聖パッコス教会と共通する。ただし平面計画においては、ハギア・ソフィアがよりバシリカ式に近いのに対して、ハギオイ・セルギオス・カイ・パッコスは八角形を基本とし、異なる性格を持っている。一方、聖使徒教会は五つのペンデンティヴ・ドームからなる連続十字形をしており、これもコンスタンティノポリスにおいては他に例をみない建築である。この3棟はいずれも非常に独創的な形態を持ち、ハギオス・ポリュエウクトス教会⁷⁶³ などとともに6世紀における試行錯誤の産物とみることができよう。

より新しい内接十字型ないしそれに類する平面形態を持っていた教会堂は、ファロスの聖母教会、ネア（新教会）、聖デメトリオス教会で、これらはみな大宮殿内の教会である。聖使徒教会の万聖人の教会もおそらく、同様な平面形態を持っていたと考えることができる。以上の4棟は、いずれも規模的には決して大きなものではなく、9世紀以降に建設されたものである。

またフォロス（コンスタンティノスのフォルム）の聖コンスタンティノスの礼拝堂と大宮殿内の二つの聖域、聖ペテロス礼拝堂、聖バシレイオス教会はいずれも、建築形態を考察するための十分な手掛かりがないのだが、その規模が大変小さかったと想像できることから、アプスを持つ長方形の空間であった可能性が高い。

最後に残念ながら平面形態をとく手掛かりが、まったくないものとして、ナルソス地区の聖パンテレエモン教会、ダフネー宮殿内の聖ステファノス教会、ポーマヌ宮の聖コンスタンティノス教会の3棟がある。

これら9・10世紀において皇帝が使用する教会堂建築の、平面形態と沿革をまとめると以下のようになる。

4世紀から6世紀にかけて建設された教会堂は、当時一般的であったバシリカ式教会堂やその派生型が多く、独創的な他に類例をみない建築は6世紀に集中しており、9世紀以降のものは、新たに教会建築の主流となった内接十字形平面のものが中心となる。これはそのままビザンツ建築史において、通説として言われていることと合致する。

また先にみた沿革と合わせて考えるとこれも明白なことだが、宮殿内に建てられた教会堂は新しく建設されたものがほとんどで、内接十字型が主流である。市内の教会堂は6世紀以前の建設によるものが大半で、バシリカ式ないしそのバリエーションが多いということになる。言い換えるならば、各教会堂の建築形態は建設時期によって左右されており、教会の使用目的とは無関係な可能性が高い。

ここで教会堂内で皇帝が使用する場所についてまとめてみたい [表12]。

ハギア・ソフィアでは南側廊と南ギャラリーに皇帝専用の空間メータトリーオンがあり、この二つは使い分けられていた。他の教会堂で同様に側廊に皇帝専用の空間があることが確認できたのは、ストゥーディ

オス修道院のメータトリーオンで、これはやはり南側廊にあったと思われる。またカルコブラティアの聖母教会では、バシリカ式の本堂の北側廊と聖遺物を納めたソロスといわれる堂を連絡する、トロピケーと呼ばれる空間が使用され、皇帝専用で用意された空間ではないがそれに準じるものと考えられる。

これに対して側廊とは確認できなかったが、至聖所と同じ平面上で儀式に参加するのは以下のとおりとなる。まず大宮殿内の二つの教会堂であるが、ネアでは教会堂南側のナルテックスにあるプロセウカディオという空間が使用される。これはナルテックスの一部をカーテンで区切ったものと想像される。また聖デメトリオスでは教会堂の北側にあるテトラセロンという空間を使用するが、これはおそらく堂外に半ば独立して建っていた三葉形平面の付属堂と思われる。ナルソス地区の聖パンテレエモン教会でも皇帝はテトラセロンを使用する。これも教会堂の北側にある空間で、おそらく教会堂の外に聖デメトリオスと同様に、半ば独立した形であったものと思われる。しかし聖パンテレエモン教会堂の平面計画によっては、至聖所北側のニッチを三つ持つ部屋を指す可能性もあり、教会全体の平面計画が不明なため、遺憾ながらこれ以上の推察は無意味であろう。聖使徒教会の万聖人の教会では聖テオフィノの礼拝所の前の「(万聖人の) ベーマを向いた布」で区切られた空間が使用される。しかし万聖人の教会の東側に聖テオフィノの礼拝所はあったと思われることから、このカーテンで区切られた空間が具体的に何処にどのように配置されていたのかは、非常に想像しにくい。最後にポーマヌ宮の聖コンスタンティノス教会では、至聖所の左側の十字架の前が、皇帝の定位置のようである。

次にギャラリーを使用する場合であるが、ハギア・ソフィアと同様に南ギャラリーに設備があるのは、ブラケルナイの聖母教会とハギオイ・セルギオス・カイ・パッコスの二つである。このうちブラケルナイには皇帝が領聖を受ける礼拝所と控室に使う部屋がある。ハギオイ・セルギオス・カイ・パッコスでは、礼拝に使うパラキンプティコンと領聖を受ける礼拝所、さらに控室としてメータトリーオンがある。

一方、聖使徒教会とベゲーの聖母教会は、ともに皇帝が西ギャラリーの移動式祭壇で領聖を受ける旨、記述がある。この二つの場合、皇帝は領聖を受けたあと、聖使徒ではカーテンで区切られた空間に入り、ベゲーでは私室に退くことが記録されている。おそらくは聖使徒教会のカーテンで区切られた空間も、ベゲーの私室、さらに加えてトリクリノスとメータトリーオンも西ギャラリーにあったと思われる。

これに対して聖モキオスでは礼拝用のパラキンプティコン、会食用の食卓、皇帝の控室が、北ギャラリーに東から西へ順に並んでいたと想像される。またカルコブラティアの聖母教会においても北ギャラリーが使用された可能性は否定できない。後者の場合はギャラリーの何処かに、いずれにせよメータトリーオンがあったはずである。なお参考までに聖モキオスでは、皇帝の領聖に関する記述はなく、カルコブラティアでは領聖を受けることのみが語られて場所、設備ともに言及はない。

ここで明らかに一つの傾向を見いだすことができる。皇帝が2階ギャラリーを使用するのは、6世紀以

前に創建された市内の教会に限られるという点である。これに関しては、儀式の次第も含めて次章で詳しく考察する。

しかしながら北側廊、南側廊など、皇帝用の空間の配置には、1階、2階をとわず特に規則性は見いだせない。かつてアーヒェンの宮廷礼拝堂からの類推で、西ギャラリーが注目された時代や⁷⁶⁴⁾、それにたいして南ギャラリーの重要性が唱えられた時期があったが、少なくとも『儀式について』を始めとするこの時代の史料においては、そのような傾向は見いだせない。

またシュトゥルレーベの指摘したメーターリオンとバラキュープティコン、私室と礼拝所の使い分け⁷⁶⁵⁾はいくつかの例で確認できる。つまり皇帝用の空間でも休憩用の空間と礼拝用の空間との使い分けが、多くの教会堂において確認できる。

第3章

考察